

杉 正 宗 遺 跡
箱 E 遺 跡
かなぼれ B 遺 跡
丸 ケ 屮 遺 跡
勝 の 段 遺 跡
下 黒 木 遺 跡
久 田 神 社 古 墳
城 峪 城 跡 北 散 布 地

苫田ダム建設に伴う発掘調査

4

2 0 0 5

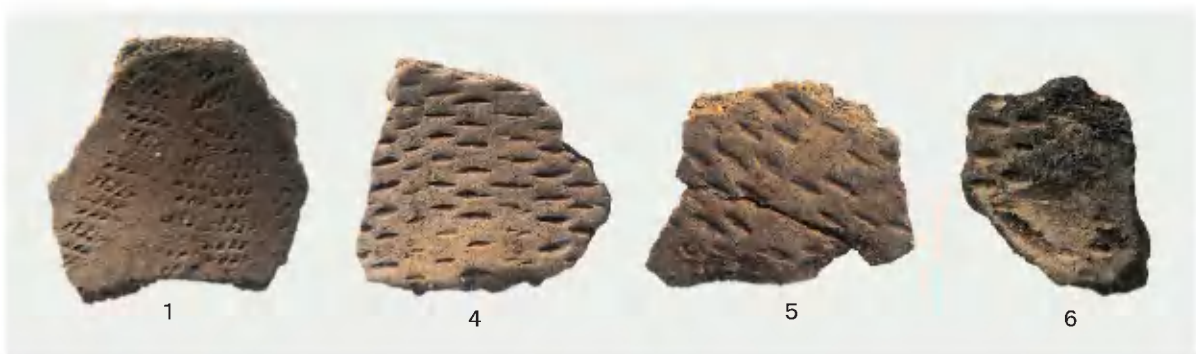
国土交通省苫田ダム工事事務所
岡 山 県 教 育 委 員 会



1 箱E遺跡 3区基盤層上面全景（南西から）



2 箱E遺跡 3区出土 石器（S1～3 尖頭器、S4 スクレイパー）



3 箱E遺跡 2区出土 縄文時代早期土器

卷頭図版 2



1 箱E遺跡 2・3区出土 縄文時代早期土器



2 久田神社古墳 全景（南から）

序

苫田ダムは、吉井川水系吉井川に建設される多目的ダムであり、完成後は流域の抜本的な治水対策として、また、将来を担う貴重な水源として流域の発展と豊かで安全快適な暮らしの実現に大きく貢献することが期待されております。

国土交通省（旧建設省）では、昭和47年度から実施計画調査を開始し、昭和56年度からは建設事業に着手しました。

以来、多くの関係者の皆様の御理解と御協力を頂きながら事業を進めてまいりましたが、平成16年度には遂にダム本体が完成し、運用を開始することになりました。

本ダムの完成によって水没した奥津町箱・河内・黒木・久田の各地区には、箱E遺跡・久田神社古墳をはじめとする多数の遺跡があることから、本工事に先立ち岡山県教育委員会と協議を重ね、ダムの湛水等によって影響のある遺跡部分についての記録保存を行うため、委員会に発掘調査を委託したところです。

この調査によって、県内でもあまり出土していない縄文時代の古い段階の尖頭器や押型文土器（箱E遺跡）、丘陵部の弥生時代集落（丸ヶ丸遺跡・勝の段遺跡）、奥津町内では数少ない横穴式石室を持つ古墳（久田神社古墳）、河川交通の大動脈・吉井川を望む中世の集落（杉正宗遺跡・下黒木遺跡）や近世のたたら場の一部（箱E遺跡・かなぼれB遺跡）など、縄文時代から江戸時代にわたる貴重な史跡資料が発見されました。

これらの遺跡発掘調査の貴重な記録である本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深める一助となり、また、学術・文化等のために広く活用されることを心から期待致します。

末筆ながら、この発掘調査ならびに本書の編集にあられた岡山県教育委員会をはじめとする関係者各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成17年3月

国土交通省中国地方整備局

苫田ダム工事事務所長 中 江 兼 二

序

苦田ダムは、昭和56年度の国土交通省（建設省）による建設事業着手から23年の時を経て、この春には完成の運びとなりました。

岡山県教育委員会は、昭和62年以来、ダム建設によって影響を受ける埋蔵文化財の保護・保存のため、関係各課と協議を進めてまいりました。とくに、平成3年度および平成6年度に実施した分布調査を基に埋蔵文化財とダム建設との調整を重ねてまいりましたが、ダムによって水没する、あるいは湖岸道路などによってやむを得ず削平を受ける部分につきましては、記録保存の措置を講ずることといたしました。

発掘調査は、平成7年度から開始し、平成16年度で終了しました。この報告書は、平成15～16年度に整理・報告書作成を行った苦田ダム関連遺跡調査報告書の第4冊目にあたります。

本書には、平成9年から14年度までに調査を実施した7遺跡と1散布地を収載しています。内容としては、縄文時代草創期の尖頭器、縄文時代早期の押型文土器を始め、横穴式石室を持つ古墳、中世から近世にかけての集落跡、近世たたら関連遺構などがあります。なかでも、箱E遺跡の尖頭器と押型文土器は、岡山県内で類例が少なく、縄文時代草創期から早期にかけての社会を復元する上で貴重な資料と言えるでしょう。

本報告書が、文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施や報告書の作成にあたりましては、苦田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から有益な御助言と御指導を賜り、また、国土交通省苦田ダム工事事務所・奥津町・同教育委員会の関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 正岡睦夫

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が苫田ダム建設事業に伴い、国土交通省と岡山県の委託契約に基づき実施した、杉正宗遺跡をはじめ9遺跡と1散布地の発掘調査報告書であり、同事業に伴う発掘調査報告書の第4分冊にあたる。契約事項は文化財課が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 杉正宗遺跡は苫田郡奥津町杉字正宗240-1他、箱E遺跡は同箱487他、かなぼれB遺跡は同箱185-1他、丸ヶ嶋遺跡は同河内960他、勝の段遺跡は同久田上原201他、下黒木遺跡は同黒木68-1他、久田神社古墳は同久田下原33-2他、城峪城跡北散布地は同久田下原730他に所在した。平成17年3月に鏡野町ほかと合併し、現在は苫田郡鏡野町分であるが、本文では旧来の町名字名で標記している。
- 3 杉正宗遺跡の第一次調査は弘田和司・常安 伸・和田 剛、全面調査は中野雅美・権田俊朗・白神賢士が担当した。箱E遺跡の用水路部分立会調査を易 伯通・島崎 東・大村俊幸、1・2区の第一次調査と全面調査は杉山光紀・平井泰男・根木智宏、3区の第一次調査は岡本寛久・三船幹也・河合 忍、全面調査は佐栞信也・氏平昭則・和田が担当した。かなぼれB遺跡の第一次調査・全面調査は佐栞・氏平・和田が担当した。丸ヶ嶋遺跡の第一次調査と全面調査は中野・赤井義典・上梶 武が担当した。勝の段遺跡の第一次調査は中野・赤井・佐栞・氏平・上梶・和田が担当した。下黒木遺跡の第一次調査は二宮治夫・赤井・上梶、全面調査は佐栞・氏平・和田が担当した。久田神社古墳の第一次調査は伊藤 晃・福田正継・佐栞、全面調査は中野・赤井・上梶が担当した。城峪城跡北散布地の第一次調査は佐栞・氏平・和田が担当した。調査面積は合計8,790㎡を測る。なお、丸ヶ嶋遺跡については、当初丸ヶ嶋散布地と呼称していたが、第一次調査の結果、遺構が存在したので改めて丸ヶ嶋遺跡として調査を行った。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては、「苫田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委員を委嘱した。委員各位からは、有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

稲田 孝司（岡山大学）	湊 哲夫（津山市郷土博物館）
白石 純（岡山理科大学）	宗森 英之（岡山県遺跡保護調査団）
橋本 惣司（岡山県遺跡保護調査団）	山本 悦世（岡山大学）（平成7年度～8年度まで）
船津 昭雄（岡山県遺跡保護調査団）	
- 5 調査にあたっては、国土交通省苫田ダム工事事務所をはじめ、奥津町役場および同教育委員会の関係各位から多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。
- 6 本書の作成は、平成15・16年度に岡山県古代吉備文化財センターで実施した。遺構・遺物の整理は同文化財センター職員伊藤・中野・岡本・氏平・上梶・和田の7名が担当し、全体の編集は氏平が行った。
- 7 本書の執筆は、発掘担当者があたり、文責はそれぞれ文末に記した。
- 8 遺物に関する鑑定・同定については、次の方々および機関に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。

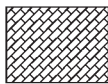
石器鑑定	稲田 孝司（岡山大学）
	藤野 次史（広島大学）

陶磁器鑑定	井上喜久男（愛知県陶磁資料館）
	家田 淳一（佐賀県立九州陶磁文化館）
石材鑑定	妹尾 護（倉敷芸術科学大学）
火山テフラ同定	パリノ・サーヴェイ株式会社

- 9 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 10 本書に記載した出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、丸ヶ岬遺跡出土石包丁（奥津町保管）を除き、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。なお、丸ヶ岬遺跡出土石包丁は、奥津町教育委員会の御厚意により図化・写真撮影を行った。記して感謝の意を表す次第である。

凡 例

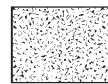
- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高であり、方位は地形図および全体図などは平面直角座標第V系の座標北を示し、古代以降の遺構図については磁北と座標北を併記した。そのほか特に示さない限り磁北であり、遺跡付近の磁北偏差は西偏6°30′を測る。また、平成14年4月から経緯度の基準が世界測地系へと移行しているが、本書では日本測地系に準拠している。
- 2 グリッドは奥津町箱の北西に位置するX=-92.0km、Y=-41.2kmを基準とし、それぞれの軸上に100mごとに0~50、およびA~Uを付す。さらに、100mを10分割し、Aa~Aj、001~009の様に小文字および小数字で表している。なお、グリッドの基準杭は北西の杭としている。
- 3 図面の縮尺については明記しており、一部例外があるものの基本的には以下のように統一している。
- 遺構 掘立柱建物 1/100 土壇墓・土壇・炉 1/60・1/30
遺物 土器 1/4 土製品 1/3（羽口・炉壁 1/4） 金属器 1/3（銭貨 1/2）
石製品 1/2
- 4 全体図では遺構名を以下のように略称している。
建物：建 柱穴列：列 土壇墓：墓 焼成土壇：焼 土壇：土 柱穴：P
- 5 掲載遺物番号については遺跡ごとに土器、土製品、金属器、石製品に分けて通し番号を付け、土器以外については下記略号を番号の前に付している。
土製品C (cray) 金属器M (metal) 石製品S (stone)
- 6 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性のあることを示す。
- 7 掲載した遺構図上の点描等は、特別な指示がない限り以下の範囲を示すものである。



基盤層（地山）



焼土（面）・被熱



炭

- 8 本報告書で掲載した地形図のうち、第2章第1図は、国土地理院発行の1/50,000の地形図「奥津」・「津山西部」を複製加筆したものである。

目次

卷頭図版	
序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査および報告書作成の経過と体制	2
1 調査の経過	2
2 整理の経過	4
3 調査・整理の体制	4
第2章 地理的・歴史的環境	7
第3章 杉正宗遺跡	9
第1節 遺跡の位置と調査の概要	9
第2節 中・近世の遺構と遺物	11
第3節 まとめ	14
(遺物観察・一覧表)	14
第4章 箱E遺跡	15
第1節 遺跡の位置と調査の概要	15
第2節 縄文時代の遺構と遺物	20
第3節 弥生時代の遺構と遺物	26
第4節 中・近世の遺構と遺物	27
1 掘立柱建物	27
2 柱穴列	30
3 炉・土壇墓	30
4 土壇	32
5 柱穴・包含層出土遺物	34
第5節 まとめ	36
(遺物観察・一覧表)	39
第5章 かなぼれB遺跡	43
第1節 遺跡の位置と調査の概要	43
第2節 縄文～古墳時代の遺構と遺物	48
第3節 中・近世の遺構と遺物	49
第4節 まとめ	53
(遺物観察・一覧表)	54
第6章 丸ヶ嶋遺跡	55
第1節 遺跡の位置と調査の概要	55
第2節 縄文・弥生時代の遺物	57
第3節 古代以降の遺構と遺物	58
第4節 まとめ	60
(遺物観察・一覧表)	60
第7章 勝の段遺跡	61
第1節 遺跡の位置と調査の概要	61

(遺物観察・一覧表)	64
第8章 下黒木遺跡	65
第1節 遺跡の位置と調査の概要	65
第2節 中・近世の遺構と遺物	67
第3節 まとめ	73
(遺物観察・一覧表)	74
第9章 久田神社古墳	75
第1節 遺跡の位置と調査の概要	75
第2節 久田神社古墳	77
第3節 古墳以外の遺構と遺物	81
1 掘立柱建物	81
2 焼成土壇・土壇	82
3 遺構に伴わない遺物	84
第4節 まとめ	85
(遺物観察・一覧表)	86
第10章 城峪城跡北散布地	87
図版	
報告書抄録	

図目次

第1章 発掘調査の経緯	
第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)	(1)
第2図 苫田ダム関連遺跡 (1/50,000)	(1)
第2章 地理的・歴史的環境	
第1図 遺跡分布図 (1/80,000)	(8)
第3章 杉正宗遺跡	
第1図 調査位置図 (1/2,000)	(9)
第2図 トレンチ断面図 (1/100)	(10)
第3図 A・C区遺構配置図 (1/300)	(11)
第4図 A区掘立柱建物1 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/2)	(12)
第5図 柱穴・包含層出土遺物 (1/4,1/3,1/2)	(13)
第4章 箱E遺跡	
第1図 調査位置図 (1/2,000)	(15)
第2図 調査範囲図 (1/800)	(16)
第3図 トレンチ断面図 (1/120)	(17)
第4図 1区全体図 (1/300)	(17)
第5図 2区基盤層上面・近世遺構配置図 (1/300) ..	(18)
第6図 3区東壁断面図 (1/100)	(18)
第7図 3区基盤層上面・近世遺構配置図 (1/300) ..	(19)
第8図 縄文時代の遺物① (1/4)	(20)
第9図 縄文時代の遺物② (1/4)	(21)
第10図 縄文時代の遺物③ (1/4)	(22)
第11図 縄文時代の遺物④ (1/4)	(23)
第12図 縄文時代の遺物⑤ (1/4)	(24)
第13図 縄文時代の遺物⑥ (1/2)	(25)
第14図 土壇1・出土遺物 (1/30,1/4)	(26)
第15図 弥生時代の遺物 (1/4)	(26)
第16図 掘立柱建物1 (1/100)	(27)
第17図 掘立柱建物2 (1/100)	(28)
第18図 掘立柱建物3 (1/100)	(28)
第19図 掘立柱建物4 (1/100)	(29)
第20図 掘立柱建物5・出土遺物 (1/100,1/4)	(30)
第21図 柱穴列1 (1/100)	(30)
第22図 柱穴列2 (1/100)	(30)
第23図 炉1、炉2、土壇墓1～3・出土遺物 (1/30,1/4)	(31)
第24図 土壇2・出土遺物 (1/60,1/4)	(32)
第25図 土壇3・出土遺物 (1/60,1/4,1/3)	(32)
第26図 土壇4、5・出土遺物 (1/60,1/3,1/2)	(33)
第27図 土壇6・出土遺物 (1/60,1/4,1/3)	(33)
第28図 土壇7・出土遺物 (1/60,1/4)	(33)
第29図 土壇8・出土遺物 (1/20,1/4)	(34)
第30図 柱穴・包含層出土遺物 (1/4,1/3,1/2)	(35)
第31図 岡山県内出土木葉形尖頭器 (1/3)	(37)
第5章 かなぼれB遺跡	
第1図 調査位置図 (1/2,000)	(43)
第2図 調査範囲図 (1/800)	(44)

第3図	トレンチ断面図① (1/120) ……	(45)
第4図	トレンチ断面図② (1/120) ……	(46)
第5図	A・B区遺構配置図 (1/300) ……	(46)
第6図	C区縄文～古墳時代・近世遺構配置図 (1/300) ……………	(47)
第7図	C区東西断面図 (1/100) ……	(47)
第8図	土壌1 (1/30) ……	(48)
第9図	縄文～古墳時代の遺物 (1/4, 1/2) ……	(48)
第10図	掘立柱建物1 (1/100) ……	(49)
第11図	掘立柱建物2・出土遺物 (1/100, 1/4) ……	(50)
第12図	掘立柱建物3・出土遺物 (1/100, 1/4) ……	(51)
第13図	炉1 (1/20) ……	(51)
第14図	炉2・出土遺物 (1/30, 1/4) ……	(52)
第15図	土壌2・出土遺物 (1/30, 1/3) ……	(52)
第16図	柱穴・包含層出土遺物 (1/4, 1/3, 1/2) ……	(53)
第6章 丸ヶ嶋遺跡		
第1図	調査位置図 (1/1, 500) ……	(55)
第2図	T1・T2～4と全面調査区遺構全体図 (1/300) ……………	(56)
第3図	全面調査区断面図 (1/100) ……	(56)
第4図	縄文・弥生時代の遺物 (1/4, 1/3) ……	(57)
第5図	焼成土壌1 (1/30) ……	(58)
第6図	焼成土壌2 (1/30) ……	(59)
第7図	土壌1 (1/30) ……	(59)
第8図	古代以降の出土遺物 (1/4, 1/2) ……	(59)
第7章 勝の段遺跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 000) ……	(61)
第2図	T8平・断面図 (1/150) ……	(62)
第3図	土壌1・出土遺物 (1/30, 1/4) ……	(62)
第4図	T4・5平・断面図 (1/300, 1/150) ……	(62)
第5図	T12～14 (1/600) ……	(63)
第6図	T10平・断面図 (1/300, 1/150) ……	(63)
第7図	T17平・断面図 (1/150) ……	(63)
第8図	T20平・断面図 (1/150) ……	(64)
第9図	各トレンチ出土遺物 (1/4, 1/2) ……	(64)

第8章 下黒木遺跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 000) ……	(65)
第2図	遺構配置図 (1/300) ……	(66)
第3図	T4断面図 (縦1/80・横1/400) ……	(67)
第4図	掘立柱建物1 (1/100) ……	(68)
第5図	掘立柱建物1出土遺物 (1/4, 1/3, 1/2) ……	(69)
第6図	掘立柱建物2・出土遺物 (1/100, 1/4) ……	(69)
第7図	掘立柱建物3 (1/100) ……	(70)
第8図	掘立柱建物4 (1/100) ……	(70)
第9図	炉1 (1/30) ……	(70)
第10図	土壌1～3・出土遺物 (1/30, 1/4) ……	(71)
第11図	柱穴・包含層出土遺物① (1/4, 1/3) ……	(72)
第12図	柱穴・包含層出土遺物② (1/3) ……	(73)

第9章 久田神社古墳		
第1図	調査位置図 (1/1, 500) ……	(75)
第2図	遺構配置図 (1/300) ……	(76)
第3図	T1断面図 (縦1/100・横1/200) ……	(77)
第4図	古墳全景 (1/100) ……	(77)
第5図	石室平面図 (1/40) ……	(78)
第6図	墳丘断面図 (1/60) ……	(79)
第7図	石室断・立面図 (1/40) ……	(80)
第8図	古墳出土遺物 (1/4, 1/3) ……	(81)
第9図	掘立柱建物1 (1/100) ……	(81)
第10図	掘立柱建物2 (1/100) ……	(82)
第11図	焼成土壌1 (1/30) ……	(83)
第12図	焼成土壌2 (1/30) ……	(83)
第13図	土壌1・出土遺物 (1/30, 1/4) ……	(83)
第14図	土壌2～7 (1/30) ……	(84)
第15図	柱穴・包含層出土遺物 (1/4, 1/2) ……	(85)

第10章 城峪城跡北散布地		
第1図	調査位置図 (1/2, 500) ……	(87)
第2図	トレンチ配置図 (1/1, 000) ……	(88)
第3図	十層柱状図と出土遺物 (縦1/200・横1/2, 000, 1/4) ……	(88)

図版目次

巻頭図版1	1 箱E遺跡 3区基盤層上面全景 (南西から)
	2 箱E遺跡 3区出土 石器 (S1～3 尖頭器、S4 スクレイパー)
	3 箱E遺跡 2区出土 縄文時代早期土器
巻頭図版2	1 箱E遺跡 2・3区出土

	縄文時代早期土器
	2 久田神社古墳 全景 (南から)
第3章	杉正宗遺跡
図版1	1 A・B区全景 (南西から)
	2 A区掘立柱建物1 (南東から)
	3 出土遺物
第4章	箱E遺跡

図版 2	1 全景（南西から）
	2 T 3（北東から）
	3 1区北側全景（東から）
図版 3	1 2区全景（南西から）
	2 3区東壁（西から）
	3 3区南側近世遺構（南西から）
図版 4	1 3区掘立柱建物 4・柱穴列 2 （北東から）
	2 1区土壇墓 3（西から）
	3 3区土壇 8（西から）
図版 5	出土遺物①縄文土器
図版 6	出土遺物②縄文土器
図版 7	出土遺物③石器・弥生土器・中近世の遺物
第 5 章	かなぼれ B 遺跡
図版 8	1 T 12（南西から）
	2 T 21（東から）
	3 C 区土壇 1（北から）
図版 9	1 A 区全景（西から）
	2 A 区掘立柱建物 1（北から）
	3 A 区土壇 2（南から）
図版 10	1 B 区掘立柱建物 2（西から）
	2 C 区近世の遺構（西から）
	3 出土遺物

第 6 章	丸ヶ嶋遺跡
図版 11	1 遠景（南から）
	2 焼成土壇 1（南から）
	3 出土遺物
第 7 章	勝の段遺跡
図版 12	1 遠景（南から）
	2 T 8（北から）
	3 T 12（北から）
第 8 章	下黒木遺跡
図版 13	1 全景（北東から）
	2 掘立柱建物 1・4（北から）
	3 掘立柱建物 2（北から）
図版 14	1 土壇 3（南から）
	2 出土遺物
第 9 章	久田神社古墳
図版 14	3 遠景（西から）
図版 15	1 石室東壁（西から）
	2 土壇 1（南から）
	3 全景（南から）
図版 16	1 出土遺物
第 10 章	城峪城跡北散布地
図版 16	2 遠景（北から）
	3 トレンチ近景（南西から）

表目次

第 1 章	発掘調査の経緯
表 1	収載遺跡調査一覧表 ……(3)
表 2	対策委員会などの記録 ……(4)
第 3 章	杉正宗遺跡
表 3	土器観察表 ……(14)
表 4	土製品一覧表 ……(14)
表 5	金属器一覧表 ……(14)
第 4 章	箱 E 遺跡
表 6	縄文時代の箱 E 遺跡及び周辺遺跡の変遷 ……(37)
表 7	土器観察表 ……(39)~(41)
表 8	土製品一覧表 ……(42)
表 9	石製品一覧表 ……(42)
表 10	金属器一覧表 ……(42)
第 5 章	かなぼれ B 遺跡
表 11	土器観察表 ……(54)
表 12	石製品一覧表 ……(54)

表 13	金属器一覧表 ……(54)
第 6 章	丸ヶ嶋遺跡
表 14	土器観察表 ……(60)
表 15	石製品一覧表 ……(60)
表 16	金属器一覧表 ……(60)
第 7 章	勝の段遺跡
表 17	土器観察表 ……(64)
表 18	石製品一覧表 ……(64)
第 8 章	下黒木遺跡
表 19	土器観察表 ……(74)
表 20	土製品一覧表 ……(74)
表 21	金属器一覧表 ……(74)
第 9 章	久田神社古墳
表 22	土器観察表 ……(86)
表 23	石製品一覧表 ……(86)
表 24	金属器一覧表 ……(86)

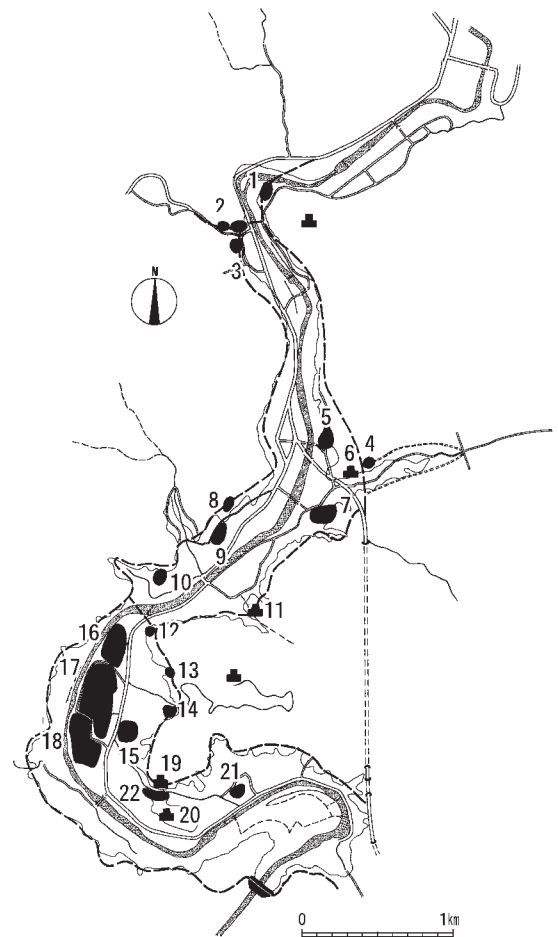
第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

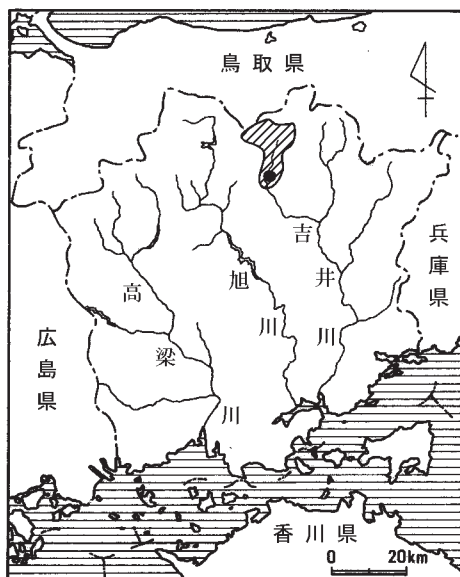
平成14年度の苦田ダム関連遺跡報告書第1分冊の報告においては、平成10年度までの湖岸道路を中心とした遺跡群を取り上げている。この分冊では、ほとんどが平成11年度から14年度に行った調査の報告である。

杉正宗遺跡は、奥津町杉字正宗に存し、後述する箱E遺跡とは吉井川を挟んだ東側に位置している。平成13年度第1回の対策委員会において、橋本委員から「鉄滓、土器片が散見でき、遺跡として取り扱うべきではないか」という発言があり、現地踏査の結果、中世の小規模な集落遺跡と考えられた。町史との関連で発見されたため、町教委から遺跡発見届けの提出を受け、国土交通省との協議に入った。この地点は国道179号線の付け替え地点に当たり西屋橋の工事も着手されており、急遽13年9月から第一次調査を行い、その結果を受けて引き続き10月から全面調査を行った。

箱遺跡群は、奥津町箱に存し、分布調査以前において、近世と考えられる鉄滓が散布する製鉄関連の遺跡としてとらえられていた。この遺跡は、



- | | | |
|-----------|-----------|-------------|
| 1 杉正宗遺跡 | 9 勝の段遺跡 | 17 久田原遺跡 |
| 2 箱E遺跡 | 10 下黒木遺跡 | 18 久田堀ノ内遺跡 |
| 3 かなぼれB遺跡 | 11 久田上原城跡 | 19 比丘尼ヶ城跡 |
| 4 丸ヶ岬遺跡 | 12 久田神社古墳 | 20 城峪城跡 |
| 5 河内構遺跡 | 13 北条高下遺跡 | 21 札ノ尾遺跡 |
| 6 河内城跡 | 14 峪畑遺跡 | 22 城峪城跡北散布地 |
| 7 河内遺跡 | 15 岡遺跡 | |
| 8 ナル林遺跡 | 16 夏栗遺跡 | 太字は記載遺跡 |



第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)

第2図 苦田ダム関連遺跡 (1/50,000)

ダム工事に関連した県道奥津～富・湯原線の付け替え道路工事として、調査を行うこととなった。

平成5年度におけるダム関連の分布調査において製鉄関連以外の遺物が見られる場所もあり、A～E地点の5か所の内E地点が調査の対象となった。

平成9年3月には、この道路建設により、すぐ裏に立ち退いた住宅との境になる道路側溝部分の立会調査を行っている。

平成11年9月から11月には、用地買収等がすでに完了していた旧宅地西側の水田部分（1区、鉄滓散布地）、旧宅地部分（2区）から全面調査を開始した。

平成13年には、東側の1段低くなった畑部分（3区）の第一次調査を行い、弥生土器等が認められたため、墓道等の問題が解決した翌14年5月から7月にかけて、改めて全面調査を行い、箱E遺跡の調査を完了した。

かなぼれB遺跡は、箱E遺跡の南、箱川の対岸の南に位置する。この遺跡は、分布調査時点においてはA・B・Cの各地点に中・近世の遺物がみられることから、遺跡として取り上げられてきた。平成13年度、これらの内B遺跡については、箱川の改修工事にかかることになり、平成14年度当初に第一次調査を行い、引き続き5月から全面調査を行った。

丸ヶ嶋遺跡は、奥津町河内にあり、かつて表面採集された磨製石包丁が町に寄贈され町教委に保管されていた。この遺跡は、河内谷に入る付け替え道路にかかることになり、平成14年度当初から第一次調査、引き続き全面調査を行った。

勝の段遺跡は、奥津町黒木勝の段に存する。この遺跡は、平成14年度に第一次調査を行ったが、全域サーチャージ水位（E L・230.0m）より上位に当たり、普段は水没しないため第一次調査で範囲を確認し、調査を終了している。

下黒木遺跡は、奥津町下黒木に存し、全域が水没地区に含まれる。平成13年度に第一次調査を行い、平成14年度に全面調査を実施した。

久田神社古墳は、地元古老からの話で、「かつて神社入口付近に古墳があった」との話を宗森対策委員から教示を得ていたが、現状では確認することができなかった。平成14年1月の第一次調査においても確認することができなかったが、平成14年4月から行ったこの台地上の古墳時代から中世の遺構が広がる久田神社遺跡水没地内の調査を行っていく中で古墳を確認することができた。

城峪城跡北散布地については、この地点は水没地区からははずれるが、平成8年から9年に発掘調査を行った城峪城跡の北側に位置し、城峪城跡とともに浮島として残り、公園として整備されることとなっていた。この丘陵上に城峪城跡と関係のある遺構が存在する可能性が考えられたため、平成14年夏に第一次調査を実施した。しかし報告どおり遺構の存在は確認されず、第一次調査のみで終了した。
(伊藤)

第2節 発掘調査および報告書作成の経過と体制

1 調査の経過

苫田ダム建設に伴う発掘調査は、平成7年度から開始している。ダム関連事業で調査対象となった遺跡は、21遺跡にのぼり、道路・水路関連9遺跡、水没予定地12遺跡に大きく二分される。今回は、

苦田1・2既報告分および水没予定地の久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡（苦田ダム建設に伴う発掘調査3・5として報告）を除いた7遺跡と城峪城跡北散布地について報告する。

今回報告分の遺跡の調査は、平成8年度の箱E遺跡立会調査に始まる。この時の調査では、ごく狭い範囲であったが柱穴が確認されたため、宅地部分の下に近世の遺構が残存する可能性があることが認識された。このため、箱E遺跡では平成11年度に西側部分（全面調査1・2区が含まれる部分）の第一次調査・全面調査を実施したが、その時点で、東側の畑（全面調査3区）は調査できなかった。そこで、改めて東側の畑で平成13年度に第一次調査を行った。

平成13年度は、久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡の調査と併行して周辺遺跡の調査を実施している。先に挙げた箱E遺跡東側の第一次調査のほか、杉正宗遺跡・下黒木遺跡・久田神社古墳に第一次調査を行った。杉正宗遺跡では、引き続いてA・B・C区で全面調査に入っている。

平成14年度は、年度当初から6名の調査員で夏栗遺跡の調査と併行して周辺遺跡の調査を実施した。丸ヶ叱遺跡は、第一次調査で遺跡の範囲を確認した後に全面調査に入った。かなぼれB遺跡でも、第一次調査に続いて遺構の存在が明らかなA・B・C区について全面調査を行った。久田神社古墳は、古墳の位置と遺跡の広がりを見きわめるため第一次調査のトレンチを追加し、その後全面調査に入った。この遺跡では、当初古墳の位置が不明であったが、全面調査範囲で石室の一部を確認したため、調査区を拡張してその全貌が明らかになった。なお、久田神社古墳周辺については、満水時水位より高い部分は第一次調査のみで終了している。箱E遺跡では前年度確認された3区の全面調査、下黒木遺跡でも全面調査を行い、当初から遺跡の範囲を確定するのが目的であった勝の段遺跡は第一次調査で終了した。城峪城跡と比丘尼ヶ城跡の間にある東西の細長い丘陵は、両遺跡の状況から遺跡の存在する可能性が高いことから、城峪城跡北散布地として第一次調査に入った。

表1 収載遺跡調査一覧表

収載遺跡	ダム関連	遺跡名	調査区	種別	調査期間(平成)	調査面積(m ²)	発掘調査担当者
1	1	杉正宗遺跡		一次	13年9月27日～10月4日	220	弘田和司・常安 伸・和田 剛
			A～C区	全面	13年10月18日～11月28日	585	中野雅美・権田俊朗・白神賢士
2	2	箱E遺跡	用水路	立会	9年3月11日～3月13日	30	易 伯通・島崎 東・大村俊幸
			1・2区	一次	11年9月20日～11月26日	840	杉山光紀・平井泰男・根木智宏
				全面			
			3区	一次	13年7月23日～8月10日	120	岡本寛久・三船幹也・河合 忍
全面	14年5月9日～7月12日	500		佐藤信也・氏平昭則・和田 剛			
3	3	かなぼれB遺跡		一次	14年4月1日～5月9日	468	佐藤信也・氏平昭則・和田 剛
			A・B区	全面	14年5月2日～6月6日	577	佐藤信也・氏平昭則・和田 剛
			C区	全面	14年10月16日～12月3日	470	佐藤信也・氏平昭則・和田 剛
4	4	丸ヶ叱遺跡		一次 全面	14年4月1日～5月20日	490	中野雅美・赤井義典・上村 武
5	9	勝の段遺跡		一次	14年11月21日～12月17日、 15年1月20日～3月13日	800	中野雅美・赤井義典・佐藤信也・ 氏平昭則・上村 武・和田 剛
6	10	下黒木遺跡		一次	13年6月8日～7月3日	350	二宮治夫・赤井義典・上村 武
			全面	14年8月27日～10月17日	1,450	佐藤信也・氏平昭則・和田 剛	
7	12	久田神社古墳		一次	14年1月17日～1月25日	70	伊藤 晃・福田正継・佐藤信也
			全面	14年4月30日～6月27日	1,140	中野雅美・赤井義典・上村 武	
8	22	城峪城跡北散布地		一次	14年7月8日～8月29日	680	佐藤信也・氏平昭則・和田 剛
面積合計						8,790	調査員のべ51名

平成14年度の調査で、箱E遺跡3区では縄文時代早期（本文でも述べるが草創期にさかのぼる可能性が高い）の尖頭器が4点（後に1点はスクレイパーと判明）出土し、県内でも出土例が少ないことから8月27日に記者発表を行った。テレビ局・新聞各社の取材があり、放送・掲載された。（氏平）

2 整理の経過

平成15年度の整理は、岡山市西川原に設置した苦田ダム関連遺跡整理事務所で実施した。整理作業のうち遺物洗浄・注記は、発掘調査中に奥津町の発掘調査事務所でを行い、既に終了していた。このため、整理事務所では、遺物の接合・復元、遺物の実測、遺構の検討、遺構・遺物の図面作成などを行った。この間、3回の対策委員会を開催し、対策委員会委員の方々から数々の貴重な意見をいただいた。平成16年度は、文化財センターに場所を移して整理作業を続けた。

平成14年7月24日の埋蔵文化財保護対策委員会では、箱E遺跡・かなぼれB遺跡について土層中に火山灰由来と考えられる層が対策委員から指摘されたため、対策委員でもある白石 純氏により実体顕微鏡で火山ガラスの有無を確認していただいた。その結果、火山ガラスの認められた箱E遺跡の土層をテフラ同定へ依頼することができた。この場を借りて御礼申し上げます。（氏平）

表2 対策委員会などの記録

年度(平成)	埋蔵文化財保護対策委員会	開催場所	現地説明会・記者発表など	パンフレット発行
11	平成11年7月9日(金)	苦田ダム関連遺跡発掘調査事務所 (奥津町久田上原)	平成11年11月3日(水) 久田原遺跡 現地説明会	
	平成11年10月28日(木)			
	平成12年2月17日(木)			
13	平成13年7月23日(月)	苦田ダム関連遺跡発掘調査事務所 (奥津町久田上原)	平成13年11月3日(土) 夏栗遺跡 現地説明会	
	平成13年11月15日(木)			
	平成14年2月22日(金)			
14	平成14年7月24日(水)	苦田ダム関連遺跡発掘調査事務所 (奥津町久田上原)	平成14年8月27日(火) 箱E遺跡 記者発表	11月 パンフレット 「発掘された久田の埋蔵 文化財 Ⅲ 夏栗遺跡」
	平成14年11月21日(木)		平成14年11月9日(土) 夏栗遺跡 現地説明会(箱E遺跡遺物展示)	
	平成15年2月18日(火)			
15	平成15年7月17日(木)	苦田ダム関連遺跡整理事務所 (岡山市西川原)		
	平成15年10月30日(木)	奥津町町民センター (奥津町女原)		
	平成16年2月23日(月)			
16	平成16年11月8日(月)	岡山県古代吉備文化財センター (岡山市西花尻)	平成16年12月11日(土)～12日(日) 苦田ダム関連遺跡発掘報告会(箱E遺 跡など遺物展示) 奥津町町民センター	12月 パンフレット 「よみがえる久田の歴史」

3 調査・整理の体制

平成8年度		所 長	河本 清
岡山県教育委員会		次 長	高塚 恵明
教育 長	森崎岩之助	次 長(文化課本務)	葛原 克人
岡山県教育庁		文化財保護参事	正岡 睦夫
教育次長	黒瀬 定生	<総務課>	
文化課		課 長	丸尾 洋幸
課 長	大場 淳	課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
課長代理	松井 英治	総務主幹	守安 邦彦
参 事	葛原 克人	主 査	木山 伸一
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 勝	<調査第三課>	
主 査	若林 一憲	課 長	柳瀬 昭彦
岡山県古代吉備文化財センター		課長補佐(第一係長)	松本 和男

文化財保護主査	易 伯通 (調査担当)	岡山県古代吉備文化財センター 所 長	正岡 睦夫
文化財保護主査	島崎 東 (調査担当)	次 長	能登原 巧
文化財保護主任	大村 俊幸 (調査担当)	<総務課> 課 長	安西 正則
		係 長	田中 秀樹
		主 任	小坂 文男
平成11年度		<調査第二課> 課 長	伊藤 晃 (調査担当)
岡山県教育委員会	黒瀬 定生	課長補佐(第一係長)	二宮 治夫 (調査担当)
教育長		文化財保護主幹	福田 正継 (調査担当)
岡山県教育庁	宮野 正司	文化財保護主幹	岡本 寛久 (調査担当)
教育次長		文化財保護主幹	赤井 義典 (調査担当)
文化課	松井 英治	文化財保護主幹	佐栗 信也 (調査担当)
課 長	佐々部和生	文化財保護主査	三船 幹也 (調査担当)
課長代理	正岡 睦夫	主 事	河合 忍 (調査担当)
参 事	松本 和男	主 事	上楯 武 (調査担当)
課長補佐(埋蔵文化財係長)	大橋 雅也	課長補佐(第二係長)	中野 雅美 (調査担当)
文化財保護主任	奥山 修司	文化財保護主査	権田 俊朗 (調査担当)
主 任		主 事	弘田 和司 (調査担当)
岡山県古代吉備文化財センター	葛原 克人	文化財保護主任	常安 伸 (調査担当)
所 長	大村 俊臣	主 事	和田 剛 (調査担当)
次 長		主 事	白神 賢士 (調査担当)
<総務課>	小倉 昇		
課 長	安西 正則		
課長補佐(総務係長)	山本 恭輔		
主 査			
<調査第二課>	伊藤 晃		
課 長	江見 正己		
課長補佐(第一係長)	杉山 光紀 (調査担当)		
文化財保護主幹	平井 泰男 (調査担当)		
文化財保護主幹	根木 智宏 (調査担当)		
文化財保護主事			
平成13年度			
岡山県教育委員会	宮野 正司		
教育長			
岡山県教育庁	國貞 忠克		
教育次長			
文化課	松井 英治	平成14年度	
課 長	松本 和男	岡山県教育委員会	宮野 正司
課長代理(埋蔵文化財係長)	藤井 守雄	教育長	
課長代理	奥山 修司	岡山県教育庁	三浦 一男
主 任		教育次長	
		文化課	
		課 長	西山 猛

第1章 発掘調査の経緯

課長代理（埋蔵文化財係長）	松本 和男	課 長	伊藤 晃
課長代理	宮田 正彦		（本書整理担当）
文化財保護主任	尾上 元規	課長補佐（第一係長）	中野 雅美
主 事	浜原 浩司		（本書整理担当）
岡山県古代吉備文化財センター		文化財保護主幹	岡本 寛久
所 長	正岡 睦夫		（本書整理担当）
次 長	藤川 洋二	文化財保護主任	氏平 昭則
<総務課>			（本書整理担当）
課 長	安西 正則	文化財保護主事	上梶 武
課長補佐（総務係長）	田中 秀樹		（本書整理担当）
主 任	小坂 文男	主 事	和田 剛
<調査第二課>			（本書整理担当）
課 長	伊藤 晃	課長補佐（第二係長）	江見 正己
課長補佐（第一係長）	中野 雅美	文化財保護主査	弘田 和司
	（調査担当）	文化財保護主事	小嶋 善邦
文化財保護主幹	赤井 義典	文化財保護主事	河合 忍
	（調査担当）		
文化財保護主幹	佐栞 信也	平成16年度	
	（調査担当）	岡山県教育委員会	
文化財保護主任	氏平 昭則	教 育 長	宮野 正司
	（調査担当）	岡山県教育庁	
主 事	上梶 武	教育次長	釜瀬 司
	（調査担当）	文化財課	
主 事	和田 剛	課 長	芦田 和正
	（調査担当）	参 事	田村 啓介
		総括副参事	平井 泰男
		（埋蔵文化財班長）	
平成15年度		主 任	小林 利晴
岡山県教育委員会		主 事	秋山 良樹
教 育 長	宮野 正司	岡山県古代吉備文化財センター	
岡山県教育庁		所 長	正岡 睦夫
教育次長	三浦 一男	次 長	内田 猛
文化財課		（総務課長事務取扱）	
課 長	西山 猛	参 事	松本 和男
課長代理	田村 啓介	参 事	伊藤 晃
課長補佐（埋蔵文化財係長）	平井 泰男	<総務課>	
文化財保護主任	尾上 元規	総括副参事（総務班長）	笏本 弘忠
主 事	浜原 浩司	主 任	小坂 文男
岡山県古代吉備文化財センター		主 任	小川 紀久
所 長	正岡 睦夫	<調査第二課>	
次 長	藤川 洋二	課 長	中野 雅美
文化財保護参事	松本 和男		（本書整理担当）
<総務課>		総括副参事（第一班長）	岡本 寛久
課 長	中田 哲雄	主 査	弘田 和司
課長補佐（総務係長）	笏本 弘忠	主 事	上梶 武
主 任	小坂 文男		（本書整理担当）
<調査第二課>			

第2章 地理的・歴史的環境

本書で報告する7遺跡1散布地は、岡山県苫田郡奥津町の南部、字箱・杉・河内・黒木・久田上原・久田下原に所在する。奥津町は、岡山県の北端に位置し、北は上斎原村と鳥取県三朝町、東と南は津山盆地西端の鏡野町に接する。町域には標高500～1,000m級の山並みが連なり、これらの山塊を縫って数多くの中小河川が流れだし、岡山県三大河川の一つ吉井川へと注ぎ込んでいる。これらの河川沿いには谷底平野や河岸段丘が形成され、有史以来集落や交通路として利用されている。地質は花崗岩質がほとんどで、表土には河川流域の谷底平野などを除いて黒ボク層が残る。

旧石器時代については具体的な様相は不明である。吉井川を約20km遡った上斎原村恩原遺跡群では、古くは約2.2万年前から細石刃文化までの後期旧石器文化層が3層確認されている。

縄文時代であるが、早期では押型文土器が岡遺跡などから出土し、上野寺遺跡・養野かなくそ遺跡などで表面採集されている。石器でも石鏃が散見され、寺原A遺跡では尖頭器が採集されている。早期の遺跡は多いが土器・石器の量はわずかで、小集団が丘陵部を中心に短期間で移動する生活を営んでいたようである。これが後～晩期では、丘陵での移動生活も継続しながら平野部の久田原遺跡のように開けた場所へ集落が展開して規模も拡大し、定住的な生活が開始したようだ。

弥生時代については、中期前～中葉には久田原遺跡・杉遺跡で集落が発展し、中期後葉には岡遺跡など周辺の丘陵部にも小集落が営まれる。後期になるとさらに集落の数が増え、規模も拡大する。ところが順調な発展を見せていた久田平野に、後期末～古墳時代初頭に洪水が襲いかかった。集落は埋没し、壊滅的な打撃を受けた。

古墳時代前期の遺構・遺物は極めて希薄であるが、中期以降、平野部を中心に大規模な集落が展開する。6～7世紀代には久田原遺跡・杉遺跡で集落が拡大し、12基からなる久田原古墳群がその最盛期を迎える。また、久田原古墳群中に炉壁と鉄滓を副葬する古墳があり、鉄生産がこの地域でも古墳時代後期には開始されたのではないだろうか。

古代については、奈良時代の久田原遺跡で53棟もの掘立柱建物が検出され、古代村落の全体像が明らかとなった。鉄生産も活発になり、久田原遺跡では製鉄炉1基・鍛冶炉3基が存在して鉄素材・鉄器生産が行なわれたと想定できる。発見した遺構・遺物から、この集落が公的な役割を果たすと同時に鉄素材と鉄器の生産管理に深く関わっていたことが読みとれる。

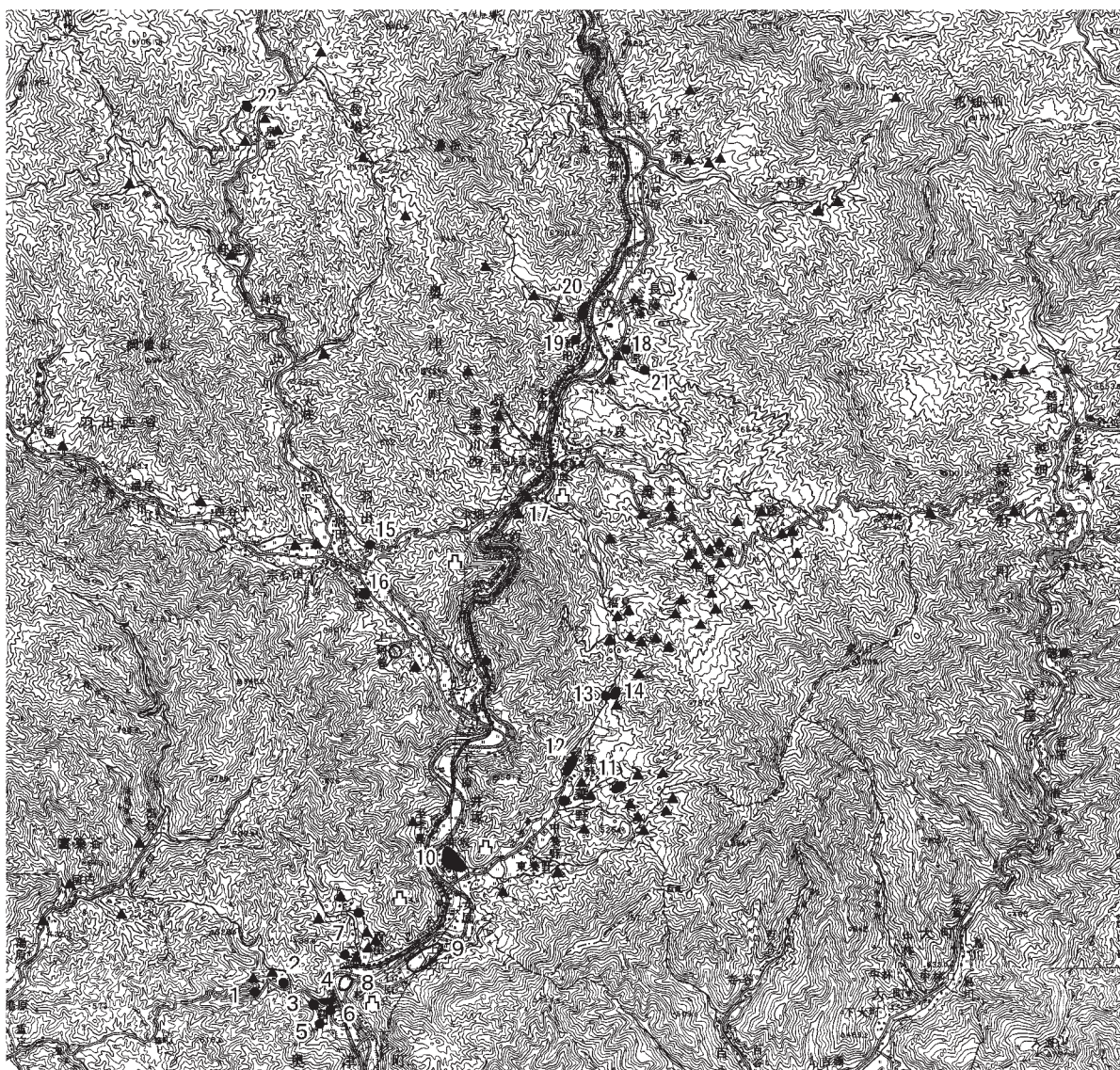
中世は、文献に登場する久多庄の実体が調査により明らかになりつつある。久田原遺跡では古代に引き続き多数の掘立柱建物を検出し、河内遺跡・河内構遺跡でも鎌倉～戦国期の集落を確認した。一方、集落を見渡せる山上に山城が近接して構築され、河内城跡などは南北朝期にあたることが判明した。これらの遺跡は、交通の要衝にある久田地区の重要性と、緊迫した社会情勢を物語っている。

近世になると久田地区以北でたたら製鉄が盛行し、数多くの製鉄遺跡が残された。福見口遺跡では大鍛冶炉6基からなる大鍛冶屋が確認された。一方、久田地区は吉井川の水運を活かした物流拠点として重要な役割を果たした。また、札ノ尾遺跡では多量の銅滓が出土し、銅製錬を行っていたことが判明している。

(氏平)

参考文献

- 「改訂岡山県遺跡地図」第7分冊津山地区 岡山県教育委員会 2003
 「土地分類基本調査 倉吉・奥津」岡山県企画部土地対策課 1989
 稲田孝司編『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団 1996
 橋本惣司「苫田郡奥津町の縄文遺跡」『環瀬戸内海の考古学』—平井勝氏追悼論文集— 古代吉備研究会 2002
 江見正己編「河内構遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170』岡山県教育委員会 2003
 江見正己編「久田原遺跡・久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184』岡山県教育委員会 2004
 日下降春「杉遺跡」『奥津町埋蔵文化財発掘調査報告4』奥津町教育委員会 2000
 亀山行雄編「福見口遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告168』岡山県教育委員会 2002



第1図 遺跡分布図 (1/80,000)

- | | | | |
|--------------|---------------|--------------------|------------------|
| 1 いもびら遺跡(箱凧) | 2 箱C遺跡(箱上散布地) | 3 箱D遺跡(箱遺跡) | 4 箱E遺跡(箱散布地) |
| 5 上野寺遺跡 | 6 かなぼれB遺跡 | 7 二の渡し遺跡(西屋散布地) | 8 杉正宗遺跡 |
| 9 杉遺跡 | 10 井坂遺跡 | 11 泉岳神社遺跡(泉岩神社散布地) | 12 養野かなくそ遺跡(上養野) |
| 13 大柄畑遺跡 | 14 大高下遺跡 | 15 陣山遺跡(うど坂) | 16 踊堂遺跡 |
| 17 福見口遺跡 | 18 寺原A遺跡(寺原) | 19 細田遺跡 | 20 土路江遺跡 |
| 21 梅の木原遺跡 | 22 泉源A遺跡(泉源) | | |

※▲は製鉄遺跡、●は縄文遺跡、□は山城、遺跡名の○内は橋本惣司「苫田郡奥津町の縄文遺跡」での表現

第3章 杉正宗遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

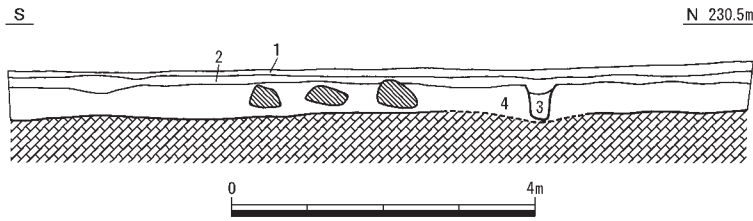
杉正宗遺跡は、奥津町杉字正宗に所在する。吉井川の左岸に形成された規模の小さい河岸段丘上に位置する。この位置の前面である西～北側は、吉井川の流れが西方向から南方向に変換する地点にあたり、東側には山塊が迫る。

この遺跡は、当初は遺跡として周知されていなかったが、平成13年に遺物が採集され、町教委から遺物発見通知が提出されて遺跡として周知された。しかしながら、この地点は、苫田ダム建設に伴う関連事業として道路の改良工事が計画されていたため、平成13年9月20日～10月4日に第一次調査を実施した。第一次調査は、道路の改良予定地に10本のトレンチを設定して調査を行った。調査の結果、地形的には、トレンチ1の地点が高く、西側、南側方向に下がっていた。基盤層は、吉井川が形成した砂層で、基盤層との間には間層が認められ、中世の時期を中心に弥生土器・土師器などが少量出土した。遺物は、トレンチ1での出土が多く、他のトレンチでは少量であった。遺構としては、トレン



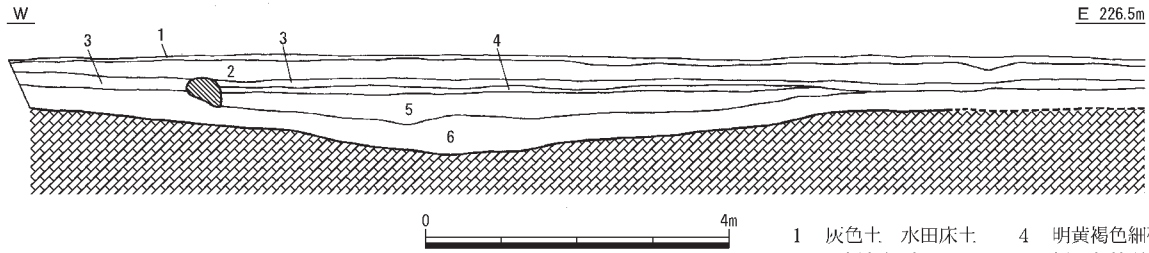
第1図 調査位置図 (1/2,000) ■第一次調査範囲

T 2



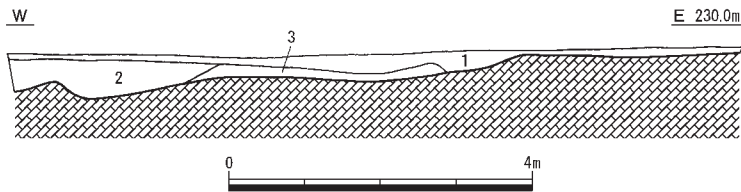
- 1 褐灰色微砂
- 2 黒褐色細砂
- 3 褐灰色細砂
- 4 オリーブ褐色粗砂

T 8



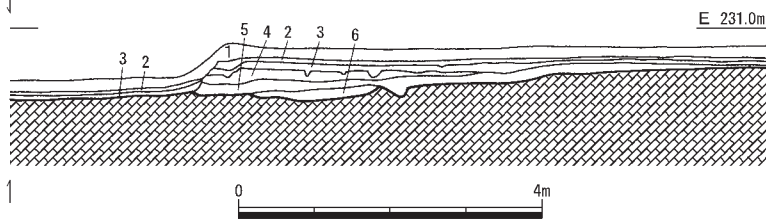
- 1 灰色土 水田床土
- 2 明褐色粗砂
- 3 褐灰色粘質土
- 4 明黄褐色細砂
- 5 褐灰色粘質土
- 6 褐色粘性砂質土

T 10西側



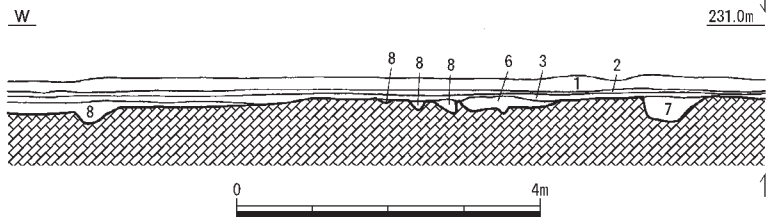
- 1 暗赤褐色粘質土
- 2 にぶい黄褐色砂質土
- 3 暗灰黄色細砂

T 12東側



- 1 灰色土(表土)
- 2 白灰色土
- 3 茶褐色土
- 4 暗黄褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黒褐色土(炭含む)

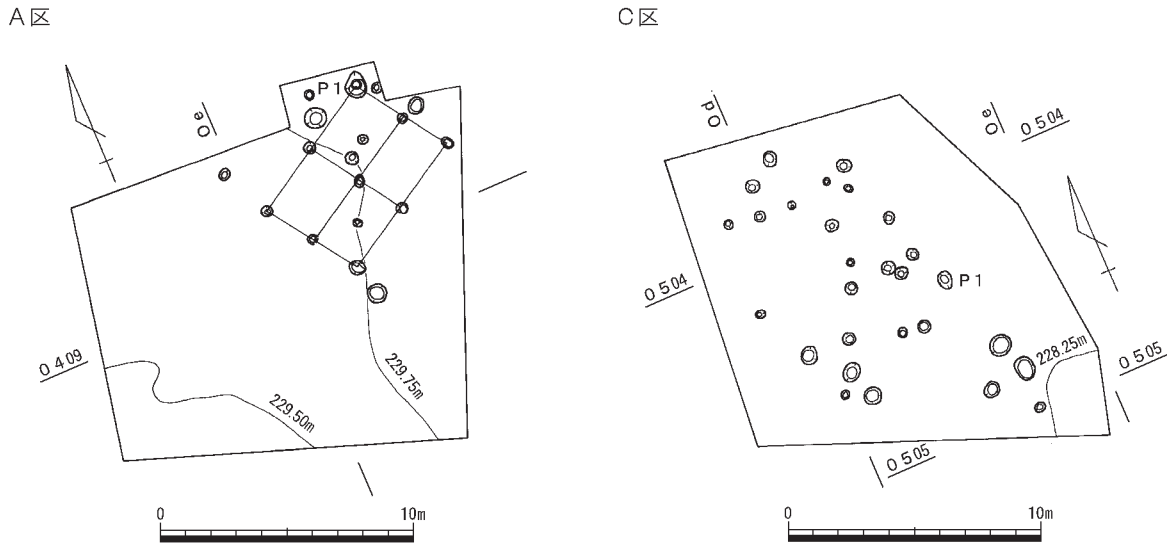
T 12西側



- 1 灰色土(表土)
- 2 白灰色土
- 3 茶褐色土
- 6 黒褐色土(炭含む)
- 7 暗褐色微砂
- 8 暗褐色細砂

第2図 トレンチ断面図 (1/100)

チ2・3・10で柱穴状の落ち込みを確認した。他のトレンチにも窪み状のもの、下がりなども若干確認されたがいずれも人為的のものとは認められなかった。この様なトレンチ調査の結果から、トレンチ2・3・10の周辺部をA・B・C区として平成13年10月18～11月28日に全面調査を実施した。あわせて、路線東側の関連用地にもトレンチ11・12を設定し、遺跡の広がりについて調査を行った。調査結果、トレンチ11・12では、たわみ状、溝状の落ち込みを確認したが、人為的なものではなかった。



第3図 A・C区遺構配置図 (1/300)

A区では、第3図のように2間×2間の掘立柱建物を1棟と柱穴を確認した。遺構は、調査区の北東部に偏っていた。B区は、トレンチ調査で柱穴状の落ち込みを検出していたが、調査の結果は、柱穴ではなく人為的なものではなかった。また、B区で溝状を呈する落ち込みが確認されたが、自然流路と判断された。C区では、柱穴状のものが30基近く検出されたが、B区と同様に吉井川の洪水層である基盤層の石の抜き取り穴である可能性が強いとその形状等から推察された。しかしながら、23の青磁が出土（P1）するような柱穴も数基存在した。

以上のように、第一次調査、全面調査の状況からみて、地形の良好なA区の北西部に遺跡が展開すると考えられる。(中野)

第2節 中・近世の遺構と遺物

掘立柱建物1（第3・4図、図版1）

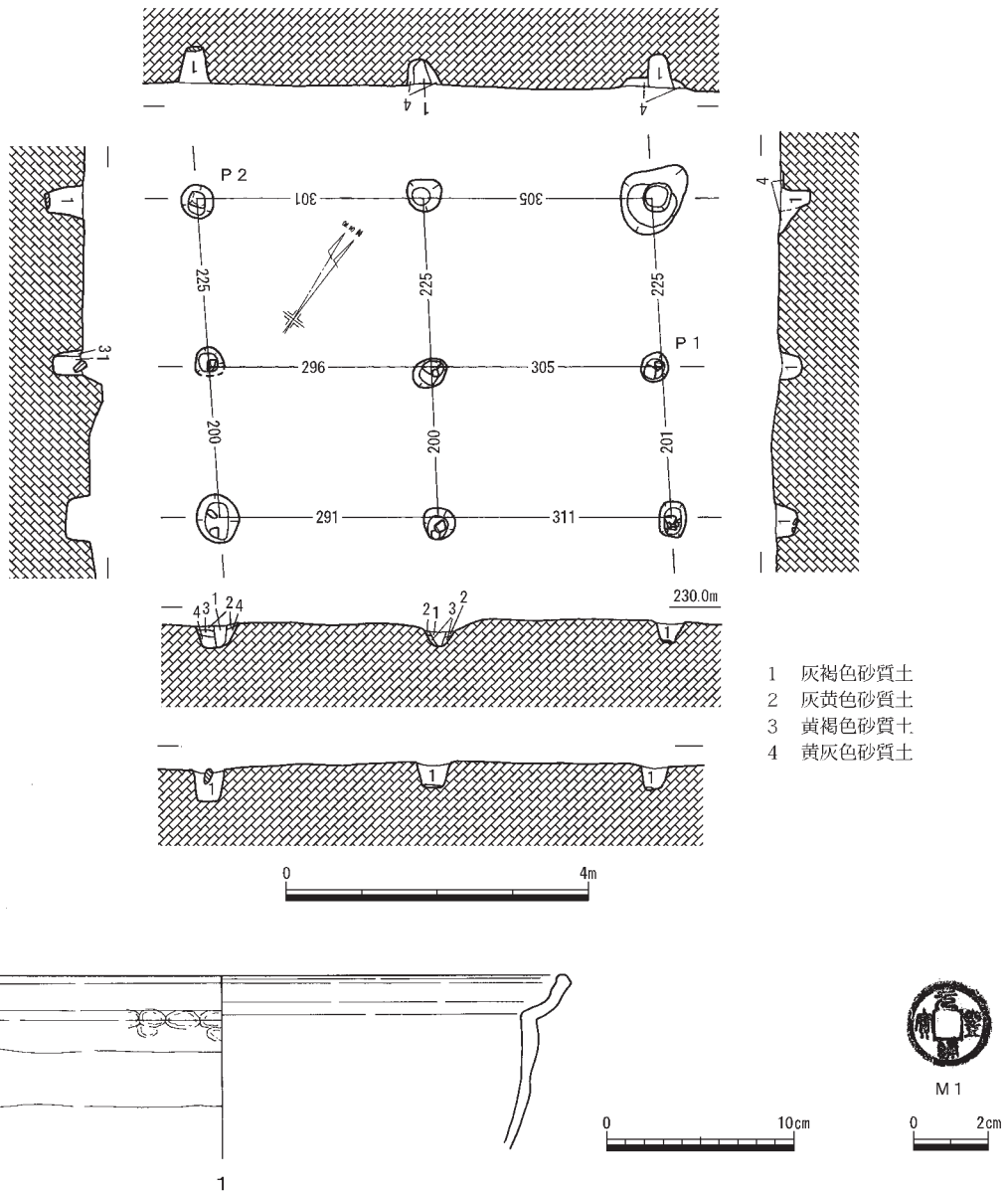
この建物は、A区の北西部に検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物である。棟方向は、南西から北東で、N-60°-Eである。規模は、桁行602～606cm、梁行約425cmで、床面積は25.5㎡を測る。なお、建物は、桁行が調査区外の北東に延びる可能性もある。柱穴間の距離は、桁行291～311cm、梁行200～225cmを測る。柱穴は、径40～80cmで、深さは35～50cmであった。柱穴の底部はほぼそろっている。

出土遺物としては、P1から1の瓦質の受け口の口縁部をもつ鍋が検出され、外面全体に煤が付着していた。また、M1の「元豊通寶」がP2から出土している。建物の時期は、1の特徴から室町時代と考えられる。

柱穴（第3図）

A区では、建物を構成する柱穴以外の柱穴も形状など明瞭であったが、建物を構成するには至らなかった。P1からは、M2の「天禧通寶」が検出された。

C区では、形状等の明瞭な柱穴は少なかったが、P1からは23の先端部が丸味の連弁が付く青磁碗



第4図 A区掘立柱建物1 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/2)

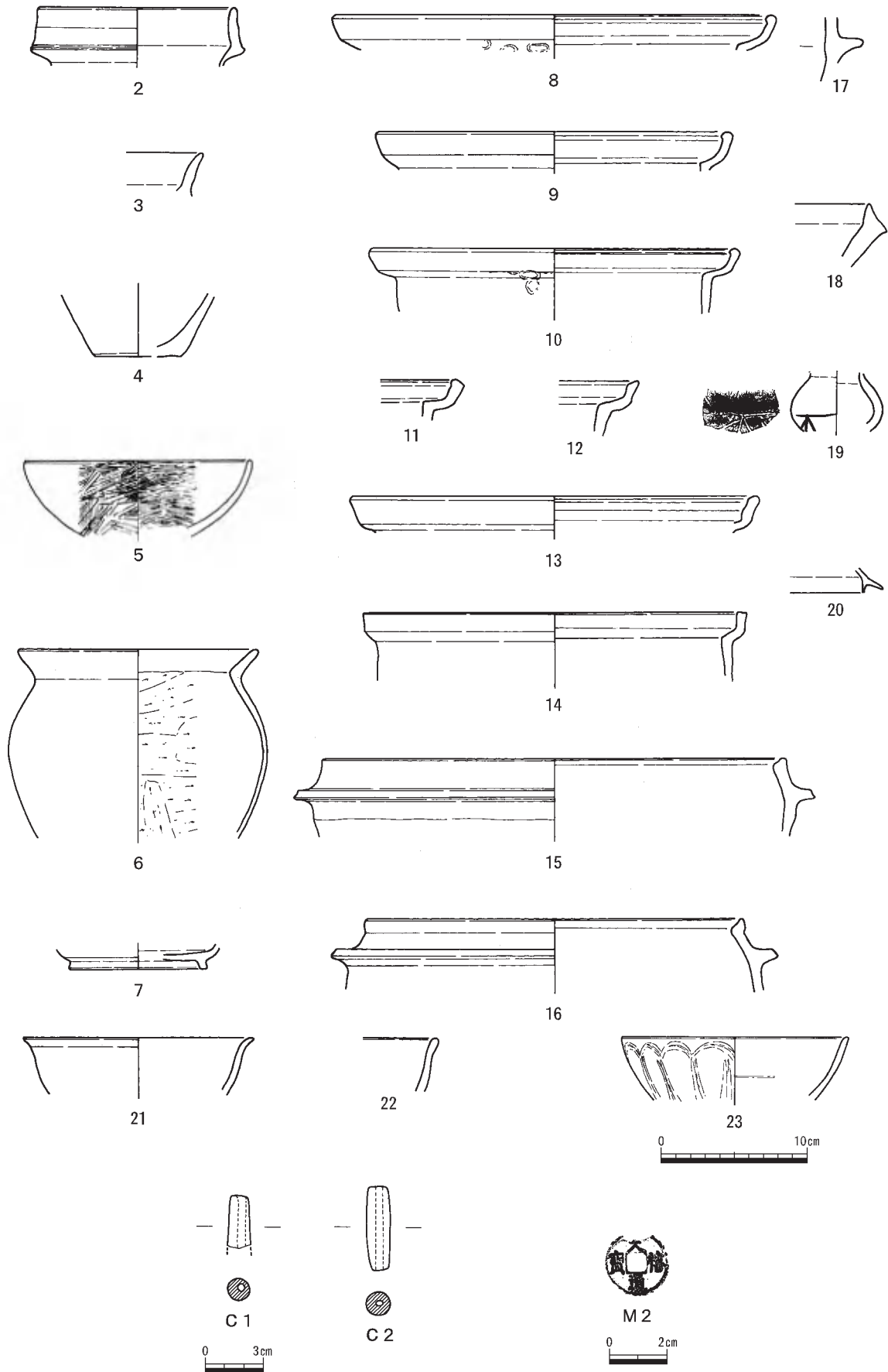
が出土している。

遺構に伴わない遺物 (第5図、図版1)

第一次調査・全面調査では、包含層を中心に弥生時代～中・近世の遺物が若干量出土したが、いずれの遺物も小片であった。これらの遺物は、室町時代のものが中心で、弥生時代～古代ものは少なかった。

弥生・古墳時代のものとしては2～6がある。2・3は、頸部から大きく外反し、上方に立ち上がる口縁部をもつ甕である。5の鉢は、内外面を丁寧にヘラミガキを施している。また、内外面に赤色顔料が付く。古代では、7の奈良時代の須恵器の杯身が1点ある。8～16は、いずれも瓦質で、受け口の8～14の鍋、羽釜の15・16がある。17は土師器の羽釜である。18～20は備前焼である。18の播鉢は南北朝時代。19の小壺は、体部下半に線刻が付く。21・22は、青磁碗で口縁部を外反する21、口縁部を肥厚させる22がある。時期は14世紀代。また、C1・C2の土錘も出土しているが時期は不明である。

(中野)



第5図 柱穴・包含層出土遺物 (1/4, 1/3, 1/2)

第3節 まとめ

遺跡の周辺には、吉井川左岸のすぐ上流の杉地区、対岸の西屋地区に広範な平地部が存在しており、縄文時代以来の集落が明らかになっている。また、遺跡の位置は、吉井川によって形成された小規模な平地部で、吉井川の流路の攻撃面にあたり、地形的には良好な位置とは言い難い。

今回の調査では、遺構としては室町時代と考えられる掘立柱建物1棟と柱穴10数基を検出したに留まった。遺跡は、地形的に掘立柱建物の存在する地点より北西部に広がる可能性が考えられた。出土した遺物は少量であったが、中世のものがその大半を占めた。このような状況からみて、遺跡は大規模な集落を構成していたとは考えられず、室町時代を中心に小規模な集落が営まれていたと考えられる。また、この集落の性格は、吉井川の対岸の西屋地区に存在する西屋城、さらには遺跡の東の丘陵上に位置する西屋城の出城と考えられている天狗山城があり、これらの山城との有機的な関連のなかで位置づけられる可能性が考えられる。(中野)

表3 土器観察表

掲載番号	掲載遺構名	山遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	特徴
					口径	底径	器高		
1	A区建物1	No.1-6	瓦質	鍋	(36.4)	—	—	黄灰色(2.5Y5/1)	外面全体に煤付着
2	B区包含層	包含層	弥生土器	甕	(13.2)	—	—	黄褐色(2.5Y5/3)	
3	T4	T-4	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	外面に黒斑
4	T1	T-1	弥生土器	甕	—	(5.8)	—	灰黄色(2.5Y6/2)	
5	包含層	トレンチ①③拡張	土師器	椀	(15.4)	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	
6	C区包含層	包含層	土師器	甕	(16.1)	—	—	褐色(7.5YR6/6)	外面全体に煤付着
7	T2	T-2	須恵器	杯身	—	(9.2)	—	灰黄色(2.5Y6/2)	
8	T2	T-2	瓦質	鍋	(29.8)	—	—	灰色(7.5Y5/1)	
9	T10	T-10	瓦質	鍋	(23.8)	—	—	暗灰黄色(2.5Y5/2)	
10	B区包含層	包含層	瓦質	鍋	(24.7)	—	—	灰黄色(2.5Y6/2)	
11	A区包含層	No.1周辺包含層	瓦質	鍋	—	—	—	灰色(5Y5/1)	
12	T10	T-10	瓦質	鍋	—	—	—	灰白色(5Y7/1)	
13	A区包含層	No.1周辺包含層	瓦質	鍋	(27.4)	—	—	暗灰色(N3/)	
14	A区包含層	包含層	瓦質	鍋	(25.1)	—	—	暗灰黄色(2.5Y5/2)	外面に煤付着
15	A区包含層	包含層	瓦質	羽釜	(31.1)	—	—	にぶい黄色(2.5Y6/3)	
16	T10	T-10	瓦質	羽釜	(25.5)	—	—	灰白色(7.5Y7/1)	
17	A区包含層	No.1周辺包含層	土師器	羽釜	—	—	—	浅黄褐色(10YR8/3)	
18	表採	表採	備前焼	播鉢	—	—	—	灰色(N4/)	
19	T5	T-5	備前焼	壺	—	—	—	にぶい橙色(5YR7/4)	外面に線刻
20	T8	T-8	備前焼	蓋	—	—	—	黒褐色(2.5Y3/1)	
21	T7	T-7	青磁	碗	(15.6)	—	—	オリーブ灰色(10Y6/2)	
22	T7	T-7	青磁	碗	—	—	—	淡黄色(2.5Y8/3)	
23	C区柱穴	P-1	青磁	碗	(15.4)	—	—	オリーブ灰色(10Y6/2)	

表4 土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	色調	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
C1	A区包含層	鍾	—	(12)	(12)	3.70	黄灰色(2.5Y4/1)		
C2	B区包含層	鍾	43.5	12	12	6.87	黄灰色(2.5Y4/1)		

表5 金属器一覧表

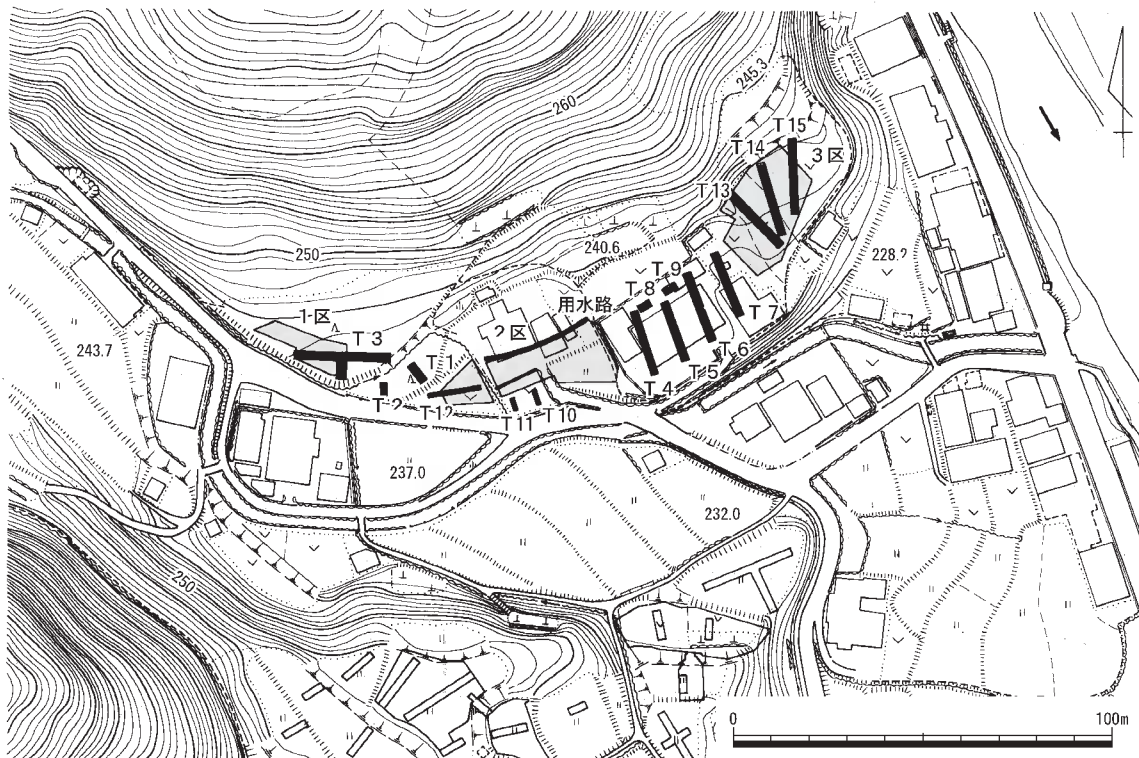
掲載番号	掲載遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	A区建物1	銭貨	—	25	—	2.89	銅	中世	元豊通寶(北宋1078年) 篆書
M2	A区柱穴	銭貨	—	21.5	1.22	1.84	銅	中世	天禧通寶(北宋1017年)

第4章 箱E遺跡

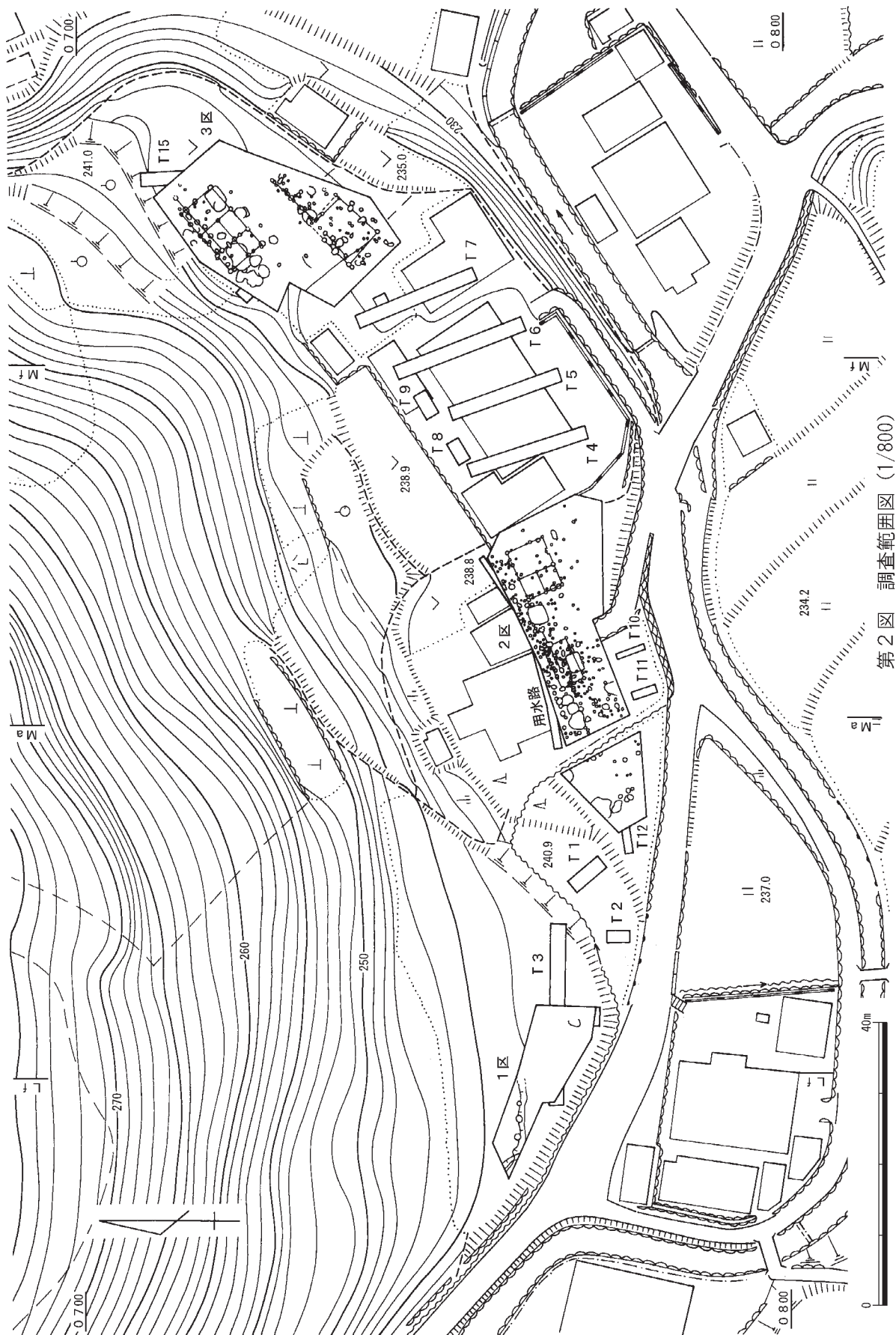
第1節 遺跡の位置と調査の概要

箱E遺跡は吉井川の西岸で、支流の箱川との合流地点を望む尾根上に立地する。この尾根は、背後は急斜面であるが先端は南向きのゆるやかな平坦地である。平坦地は調査前まで宅地や畑として利用されていた。眺望は良く、南に旧箱川の村落が広がっている。平成6年の分布調査で少量の鉄滓の散布がありサヌカイト剥片が拾われたことから、縄文時代の集落および製鉄関連の遺跡として認識された。箱川をはさんで対岸がかなぼれB遺跡である。尾根を回って北側には「箱岩」と呼ばれる自然の巨岩があり、その南に祠が建っていた。箱岩には伝説もあり、奥津町の天然記念物に指定されている。

ここに県道湯原・奥津線が付け替えになり、その範囲内を調査する必要が生じた。まず平成8年度末に用水路部分の立会調査があったが、この際柱穴が確認された。平成11年度に未買収の北東端を除いた工事範囲内の遺跡の広がり追求するため、第一次調査としてT1～T12のトレンチを設定した。その結果、遺構の存在と遺物包含層の堆積を確認したT3・T12および用水路部分の南側平坦面で、全面調査へ移行した(1・2区)。さらに、平成13年度には買収の完了を受けてT13～T15の調査を追加し、ほぼ全面が遺跡であることを確認したので翌平成14年度に全面調査に入った(3区)。3区先端部はそこにあった祠と祠への通路を確保するために調査できなかった。

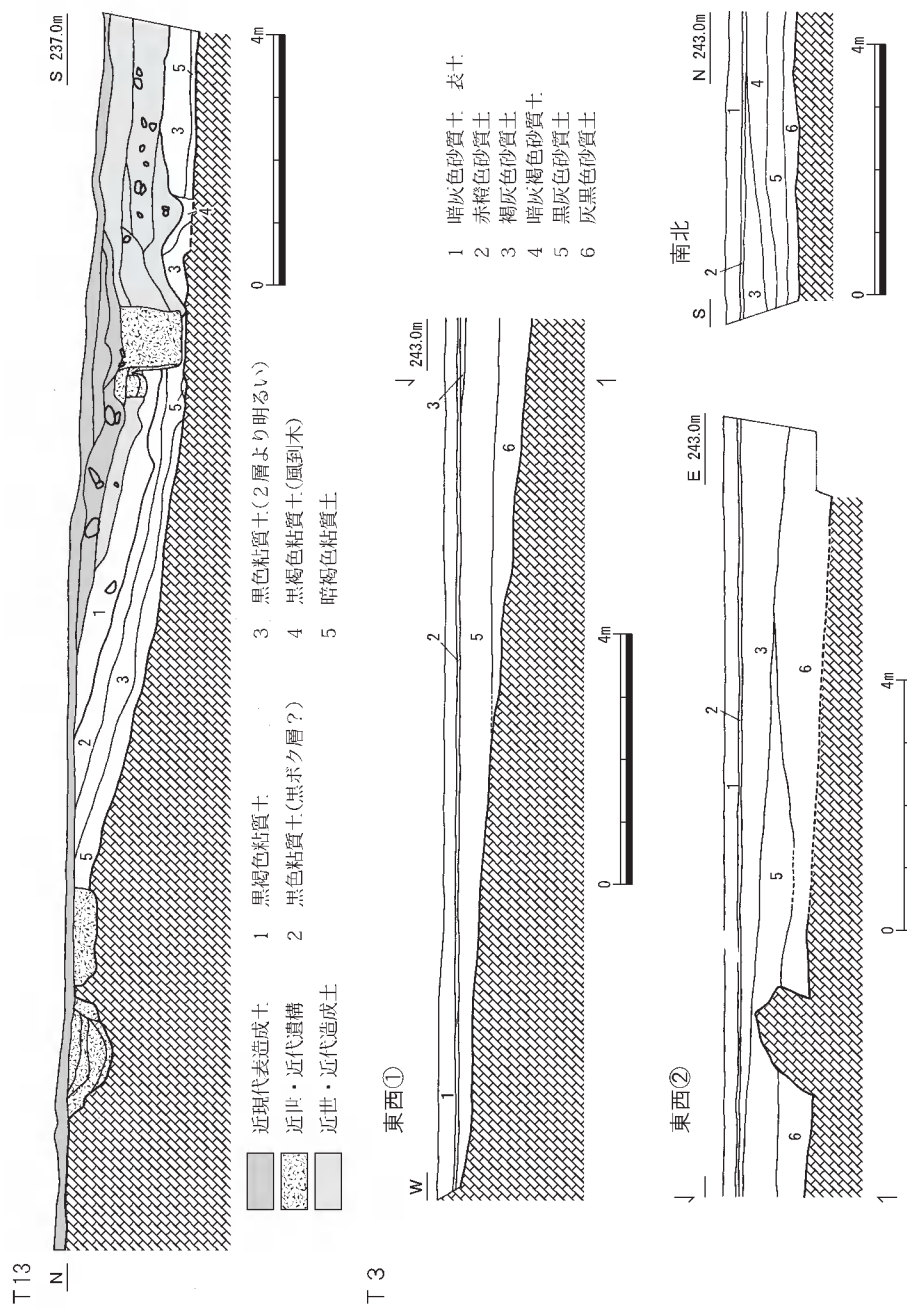


第1図 調査位置図 (1/2,000) ■第一次調査範囲



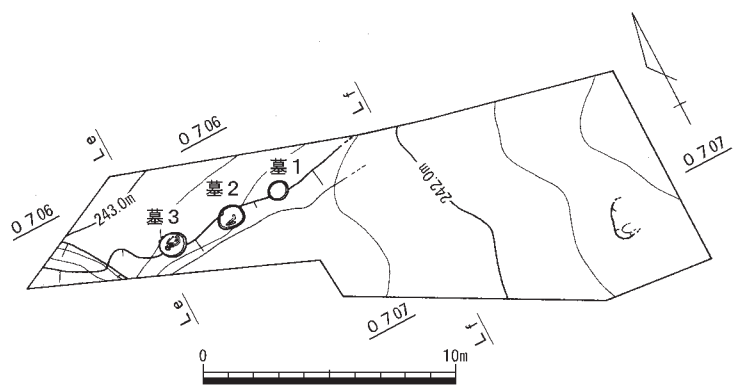
第2図 調査範囲図 (1/800)

調査の成果であるが、1区西側では近世土壇墓3基と南東への下がりを検出した。下がりの部分から鉄滓や炉壁を多量に含む層が確認でき、その層の下に近世墓が認められた。近世墓の下層で縄文土器包含層が存在した。東側では、東へ緩やかに下がる地形に縄文土器包含層を確認した。包含層はT3断面図の3層から6層までの範囲にあたる。ただし、T3東側ではこれらの層に縄文土器をほとんど含まなかったため、全



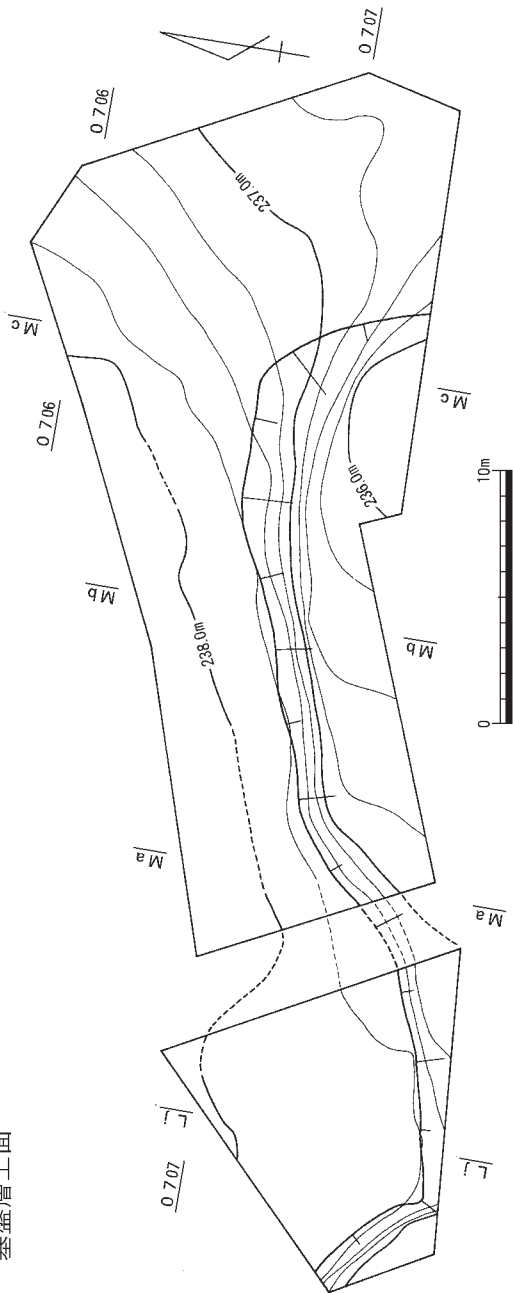
第3図 トレンチ断面図 (1/120)

面調査範囲からは除外している。2区は用水をはさんでT12のあった西側と、用水路部分南の東側に分けて調査した。両調査区では近世遺構と南東方向の下がりを検出した。近世遺構は掘立柱建物2棟、柱穴列2列、土壇8基、柱穴多数であった。下がりでは縄文時代早期～晩期土器の包含層が存在した。また、T10でもこの続きと思われる縄文土器包含層を確認したが、

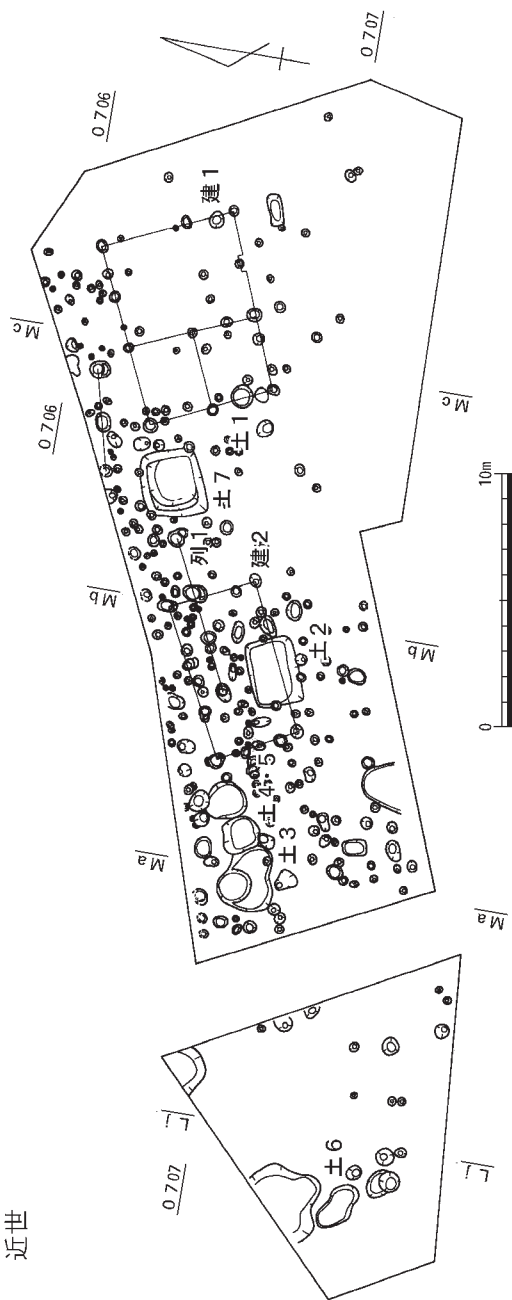


第4図 1区全体図 (1/300)

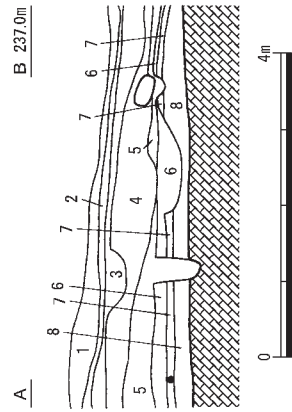
基盤層上面



近世

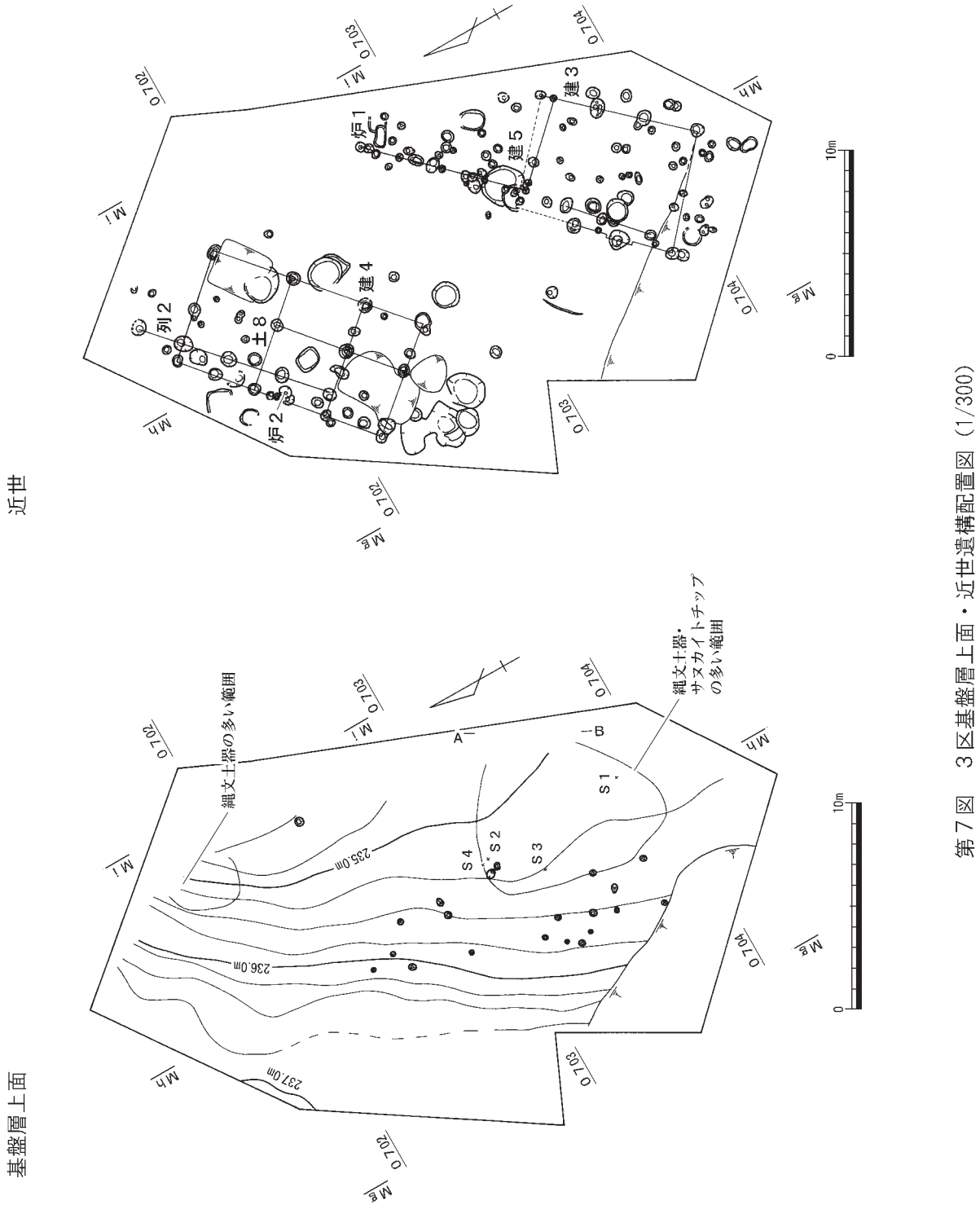


第5図 2区基盤層上面・近世遺構配置図 (1/300)



- 1 黄灰色砂 表土
 - 2 浅黄色砂 现代造成土
 - 3 黑色土 旧表土
 - 4 にぶい黄色土 近現代造成土
 - 5 オリーブ黒色土 近世造成土
 - 6 黒褐色粘質土 弥生～近世包含層
 - 7 黄褐色土 縄文包含層
 - 8 船灰黄色粘質土 縄文包含層
- はテラ分析 試料採取地点

第6図 3区東壁断面図(1/100)

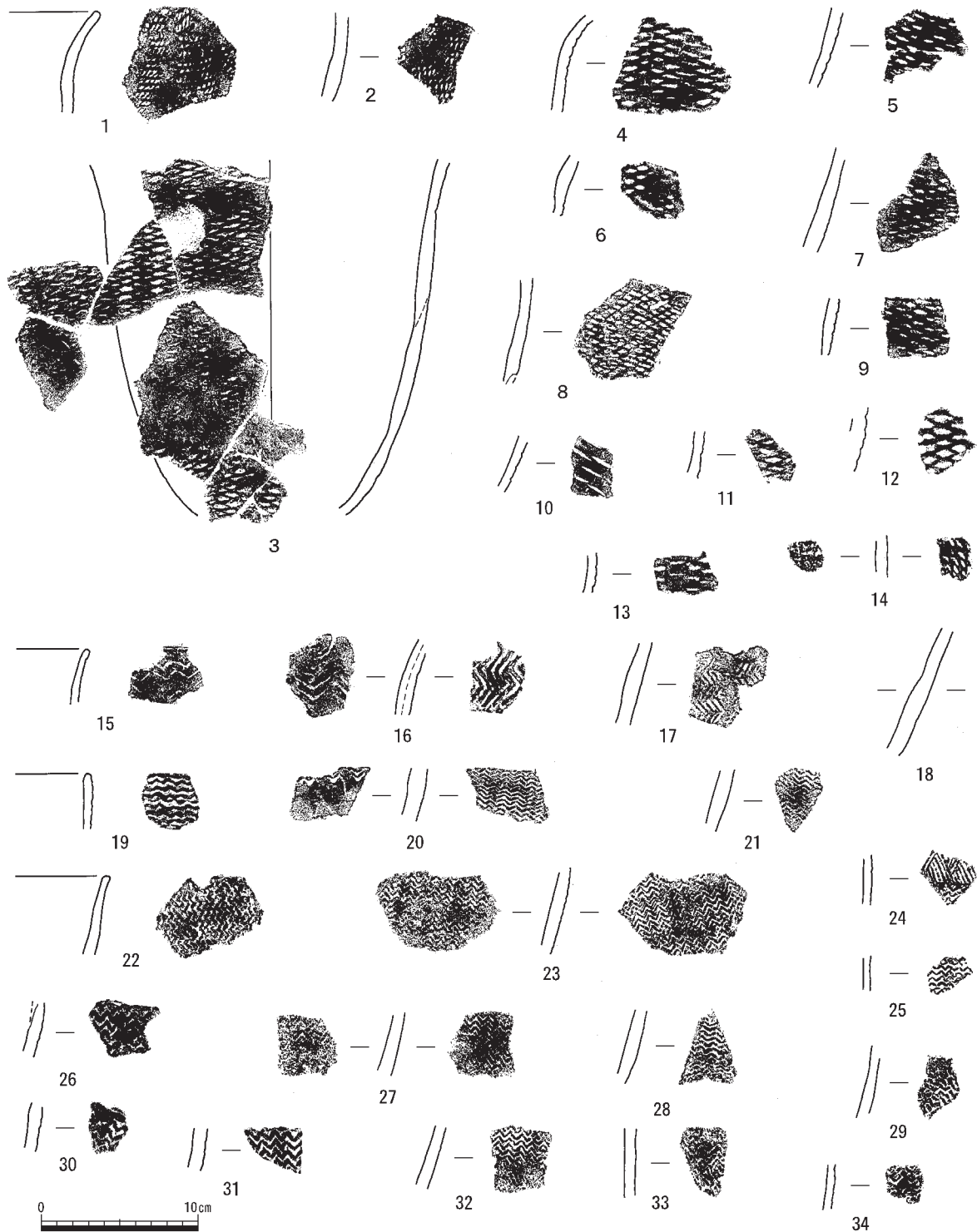


第7図 3区基盤層上面・近世遺構配置図 (1/300)

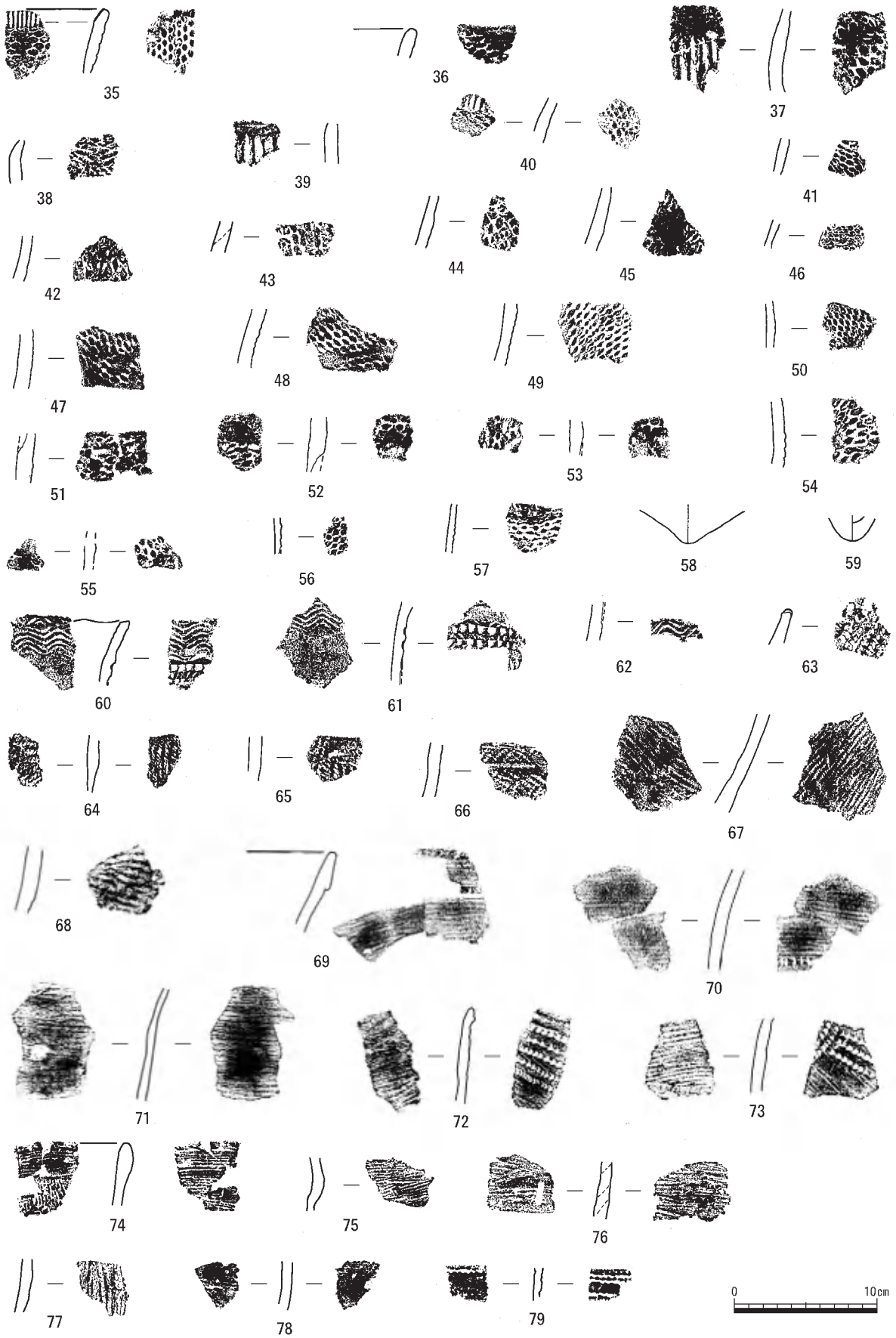
土器量は少量であった。2区と3区の間は宅地により攪乱されていて、遺構は存在しなかった。3区では、近世遺構と弥生時代中期の包含層、さらに縄文時代の包含層を確認した。近世は、斜面の上下を二段に造成して屋敷地としている様子が窺え、掘立柱建物3棟の他に柱穴列・土塙・炉とのつぼを検出した。弥生時代中期の土器は調査区中央部、近世の上段と下段の間に堆積層を確認した。その下層に縄文早期～前期、晩期の包含層があり、さらに基盤層との境で4点の石器を検出した。3点は尖頭器、1点はスクレイパーである。(氏平)

第2節 縄文時代の遺構と遺物

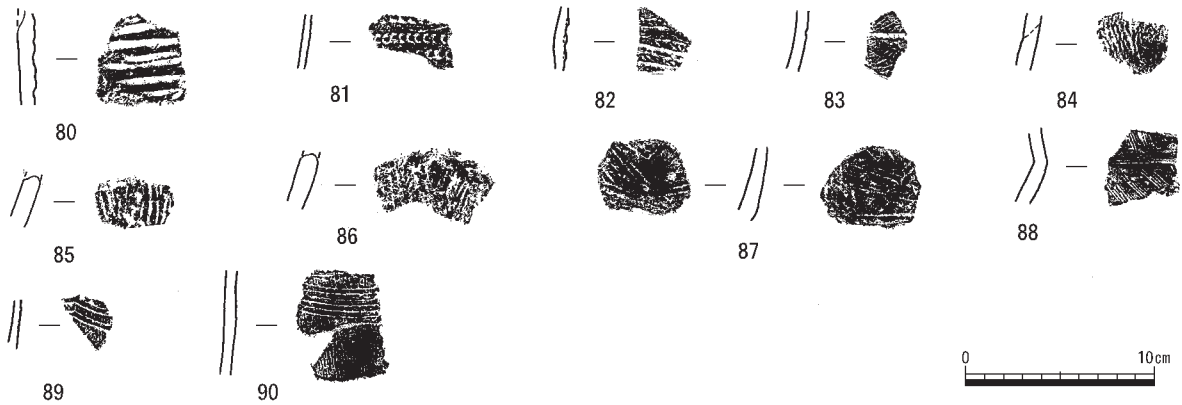
縄文時代では、1・2区では遺構は確認できなかったが、3区で柱穴状の穴を検出した。第7図左に図示しているが、掘り方が垂直ではなく斜めであったり、途中で曲がったりしていることから、木の根の痕跡の可能性が高い。3区では調査区南部に南北11m、東西7mの範囲で平坦面があり、ここ



第8図 縄文時代の遺物① (1/4)



第9図 縄文時代の遺物② (1/4)



第10図 縄文時代の遺物③ (1/4)

を中心として尖頭器を始めとする石器とチップ、縄文土器が集中して出土した。また、これとは別に3区北端で縄文土器の集中部分を確認している。

縄文土器は全て包含層出土で、1～3区とT10で包含層を確認している。3区の包含層は北端と南端にある。厚さは北端で60cm、南端で30cmになるが、遺物は希薄で小片が多い。1・2区では南～南東側の斜面に包含層を確認した。厚さは最大50cmになる。出土遺物の傾向としては、ネガティブ押型文土器が包含層の下層に近い部分から検出されているが、それ以外は必ずしも遺物の時期と層位の上下が一致しているとは言い難い。

以下に、文様・形態別に分類を試みる。

刺突文・ネガティブ押型文土器 (第8図1～14、巻頭図版1・2、図版5)

主に2区で出土した。1・2は2枚貝の連続刺突を施す口縁と胴部である。出土状況と形状からネガティブ押型文土器に近い時期の可能性はある。14は斜めに刺突を施しているもので、縄文草創期の刺突文土器の可能性はある。それ以外は原体の回転押捺により文様をつけるネガティブ押型文土器で、神宮寺式に相当する。押型文最古である関西の大川式に後続し、早期前半にあたる。柳葉状でまばらな施文の10、木葉形でやや密な3～7・11～13、鱗状で密な施文の13がある。胴部が復元できた3では口縁は緩やかに外反して胴部に連なり、底部も緩やかにすぼまる。

押型文(山形文)土器 (第8図15～34、巻頭図版2、図版5)

縄文時代早期中葉～末葉にあたる。15は口縁部で、外面に山形文が施される。黒色で緻密な胎土を持つ。16～18は横位にも施文するものである。18は施文がないが、胎土・色調が17と似るので同一個体であろう。押型文最終末の穂谷式併行の可能性はある。20～34は黄島式の山形文であろう。24の鋸歯文と山形文の組み合わせも黄島式の範疇であろうか。

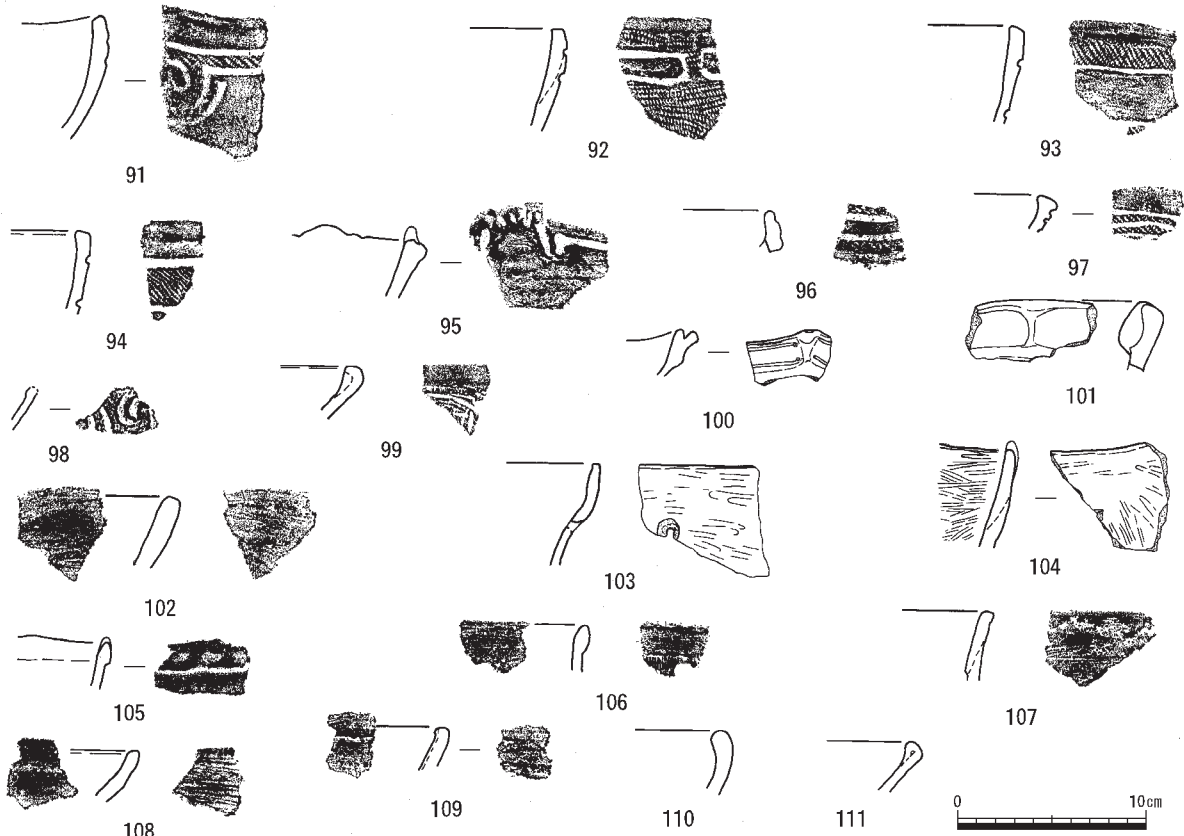
ポジティブ押型文土器 (第9図35～57、巻頭図版2、図版5)

縄文時代早期後葉にあたり、全て黄島式である。主に3区で出土した。薄手(41・46・50・56・57)と厚手の個体が存在する。56・57は同一個体の可能性があり、数珠状の施文を見せる。近接する奥津町箱峠遺跡⁽¹⁾で類似する文様を施す口縁部の破片がある。

底部 (第9図58・59)

押型文土器の底部と考えられる、尖底のものを2点確認している。58は内面が剥離していて、厚さが不明である。

山形文+押引文土器 (第9図60～62、巻頭図版2)



第11図 縄文時代の遺物④ (1/4)

口縁部の内外面に山形文を施し、外面ではその下に押引文を施す土器である。T 10から出土し、同一個体と考えられる。16~18と比べ焼成が甘く黒色の色調を呈する。類例としては中山西遺跡・恩原2遺跡⁽³⁾の出土のものがある。穂谷式に類似し、早期後葉に位置するものであろう。

縄文土器 (第9図63~68、図版5)

縄文地の破片である。ほとんどが単節の原体で施文している。63は口縁端部の破片で、端部に刺突が見られる。66は沈線が2条施されている。胎土に繊維を含み、早期後半代の繊維土器群⁽⁴⁾に相当するものであろう。

条痕文土器 (第9図69~78、図版5・6)

69~71は巻貝条痕で調整し、口縁端部は肥厚する。70は胴部にかけての破片で、外面に刺突文が施される。72・73は条痕地に押引文が施される。69~73は西川津式に含まれる。74~77は二枚貝条痕地で、74の口縁端部は肥厚する。75は胴部にかけての破片で、外面に刺突文が施される。

早期~中期土器ほか (第9図79・第10図、図版6)

79は带状施文の山形文の可能性が有る。神宮寺式の後、黄島式の前に位置づけられるのではないだろう⁽⁵⁾。80は厚手で沈線を施し、刺突はないが帝釈峽弘法滝洞窟遺跡出土⁽⁶⁾の穂谷式併行とされる破片と類似する。81は逆C字の連続刺突文があり、羽島下層式に相当する。82は突帯の上に縄文を追加する。84~87は前期の条痕文土器と比較すると、器壁がやや厚手で多方向の貝殻条痕を施すものである。88は条痕を屈曲部分では横方向その他は斜め方向に施すなど装飾的に用いる。89・90は撚糸文地に沈線で装飾するもので、中期後半の里木Ⅱ式土器である。

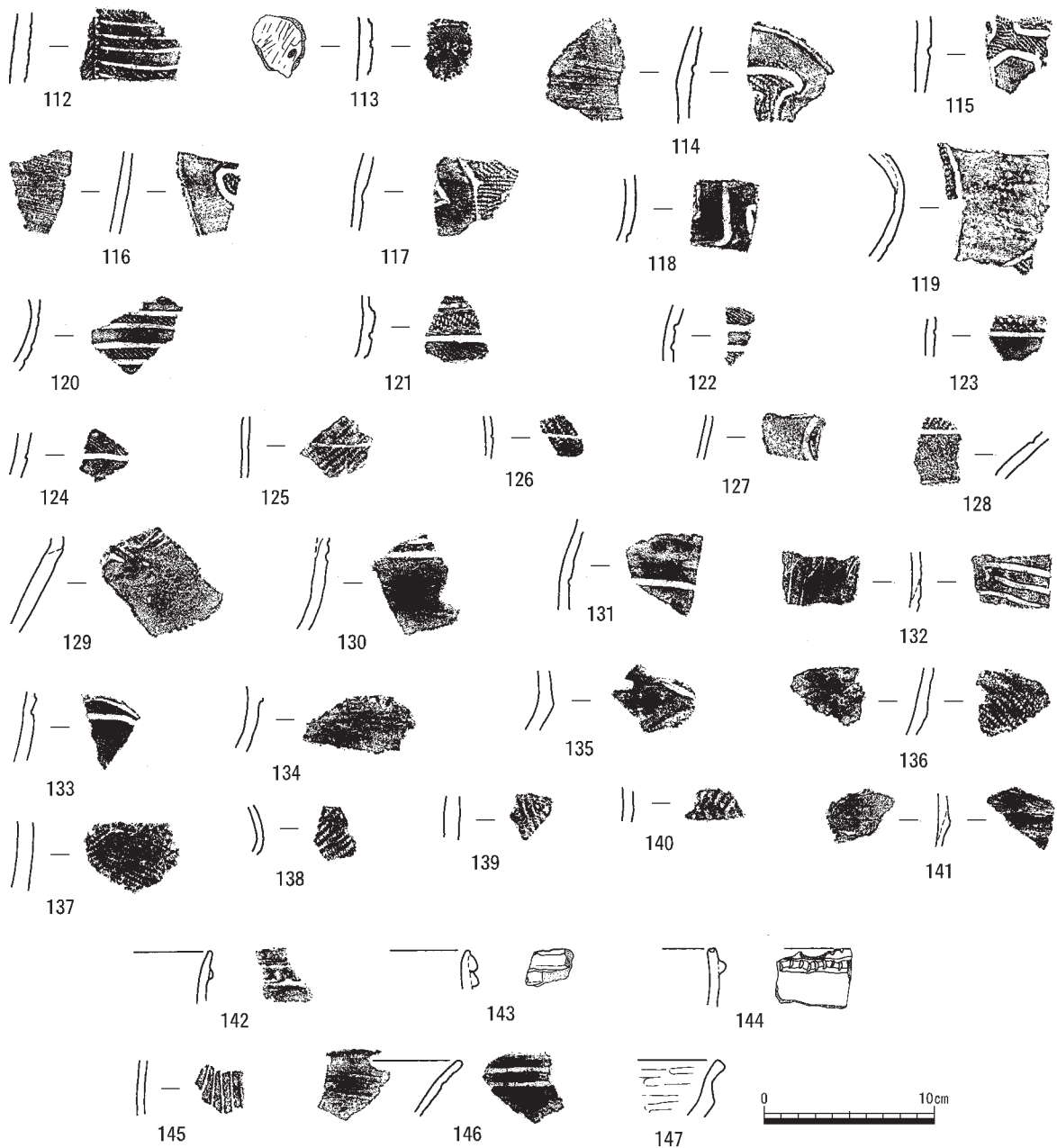
磨消縄文土器・精製土器など (第11図・第12図112~141、図版6)

第11図は口縁部片である。第11図91～101は磨消縄文と沈線文の深鉢・浅鉢、102～111は精製土器と糸痕調整のみの深鉢・浅鉢である。91～94、96・97はいずれも後期初頭の中津式に当たる。100は後期後葉の元住吉山式に類似する。103・106には穿孔がある。

第12図112～141は胴部片である。第12図112～135は磨消縄文と沈線文の深鉢・浅鉢、136～140は縄文のみである。114～119は後期初頭の中津式に当たる。112・120のように縄文帯が細いものは福田K II式であろう。137は羽状縄文が施されている。139・140は縄文原体が大きめで、早期にさかのぼるものかもしれない。

突帯文土器（第12図142～147、図版6）

1区周辺と3区で少量存在した。142～145は深鉢、146・147は浅鉢である。145は胴部で線刻がある。浅鉢の形状に疑問が残るが、いずれも晩期後葉に位置づけられる。

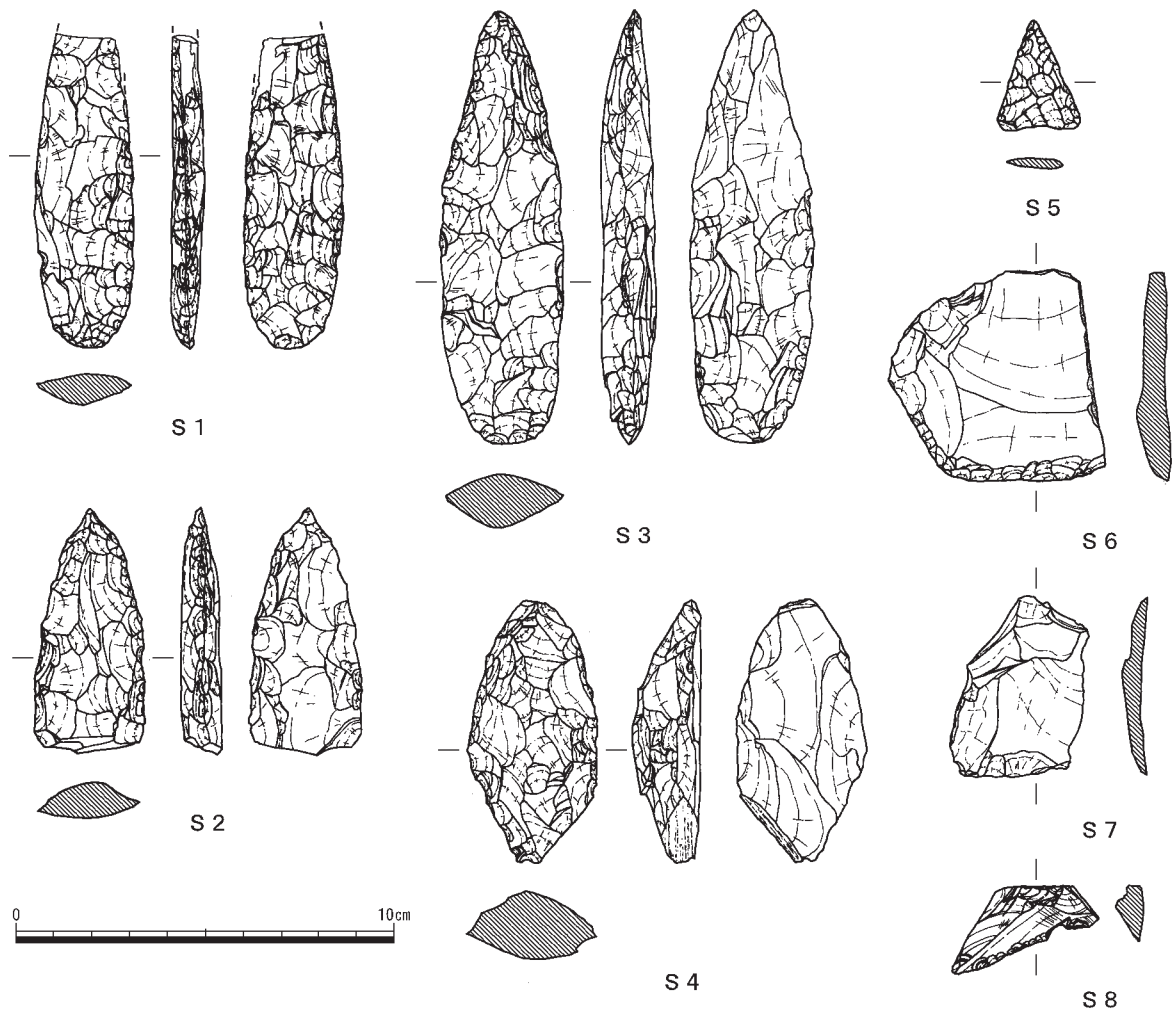


第12図 縄文時代の遺物⑤ (1/4)

石器（第13図、巻頭図版1、図版7）

石器は、S 8が1区から、それ以外は3区から出土した。S 1～S 4は第7図左に出土位置を挙げている。出土層位は基盤層直上に近いが、包含層中である。S 1の尖頭器は地面に対し垂直、つまり側面を立てた状態で出土した。先端部を欠損する。S 2の尖頭器は側面が斜めになった状態で出土した。先端部のみで基部を欠損しているが、このままでも使用可能である。S 3の尖頭器は地面に対し水平な状態で出土した。完形品であるが、先端部の側縁と中央～基部の側縁がなめらかに連続していないので、使用中に折れたものを先端部のみ補修している⁽⁷⁾。S 4はスクレイパーで、地面に対し水平な状態で出土した。完形品で、基部に一部自然面を残す⁽⁸⁾。尖頭器S 1～S 3の特徴をまとめておくと、剥離は両面・両側縁から均等に行い、その結果断面は菱形になる。基部の作りは非常に精巧で、楕円形に成形するため細かい剥離を行っている。製品の大きさは補修を受けたS 3で長さ11.5cm、幅3.2cmであり、補修以前の長さはさらに長かったはずである。S 1・S 2についても幅が3cm程度であるから、S 3と同様の縦横比ならば長さも10cm以上であった可能性が高い。なお、石材は鑑定の結果S 1～S 3が金山産サヌカイトでS 4が国分台産サヌカイトと器種で分かれた。

S 5の石鏃は3区南壁で包含層から出土した。風化が著しいが、弥生時代の可能性が高い。S 6のスクレイパーは図面向かって右側に自然面が残る。S 7の使用痕ある剥片は表採である。S 8は石器の中で唯一の黒曜石製で、1区西側で出土した。（氏平）



第13図 縄文時代の遺物⑥ (1/2)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代は、2区東側で土壇1基と3区で包含層を確認した。

土壇1 (第14図)

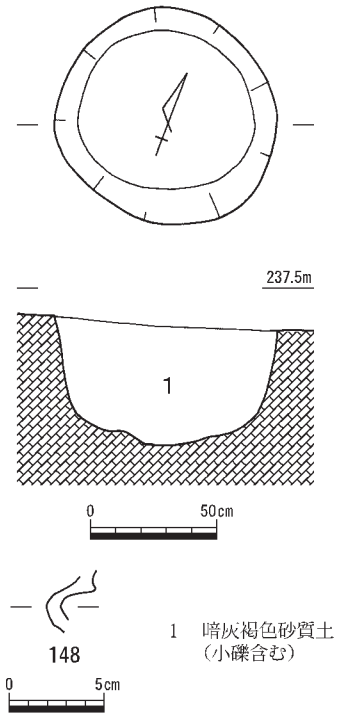
2区の0706Mb区において検出した。平面形は、径約85cmの円形で、深さは約50cmを測る。埋土は1層のみで、遺物は土器の小片が出土しており、時期は弥生時代と考えている。(平井)

包含層出土土器 (第15図、図版7)

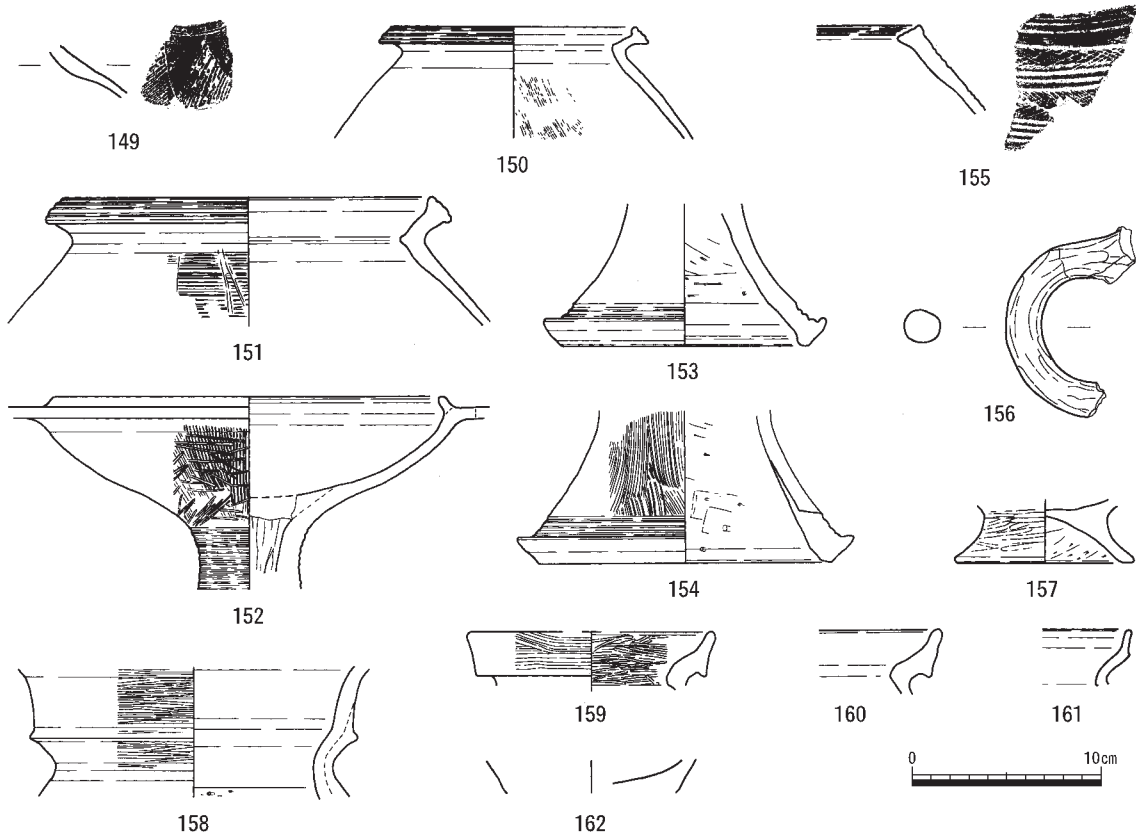
149~158は3区、159・160は2区、161・162は1区出土である。149~156・162は中期後葉で残りは後期の土器である。

149は壺の肩部であろう。沈線と鋸歯文が廻る。150・151は甕で、口縁端部を肥厚する。底部には162がある。152~154は高杯で、152は水平に張り出す口縁端部を持つ。この地域では中期後葉まで残る形態である。153は透かしのない脚端部、154は透かし孔が4方向に開く可能性がある。155は台付鉢の口縁部で、156の把手は横長に装着されるものであろう。

159~160は山陰系の甕口縁である。160は内外面をヨコナデで調整する。161は瀬戸内系の甕で、内外面はヨコナデである。(氏平)



第14図 土壇1・出土遺物 (1/30, 1/4)



第15図 弥生時代の遺物 (1/4)

第4節 中・近世の遺構と遺物

1 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第16図)

0706Mb~Mc区において検出した。規模は、東西3間、南北2間で、内部に一か所柱穴を想定している。柱穴の規模は、径30~50cmで、深さは最大で約60cmを測る。なお、南側の柱穴は、地山面まで下げて検出したため、残存状況は良くなかった。

時期は近世ではないかと考えている。

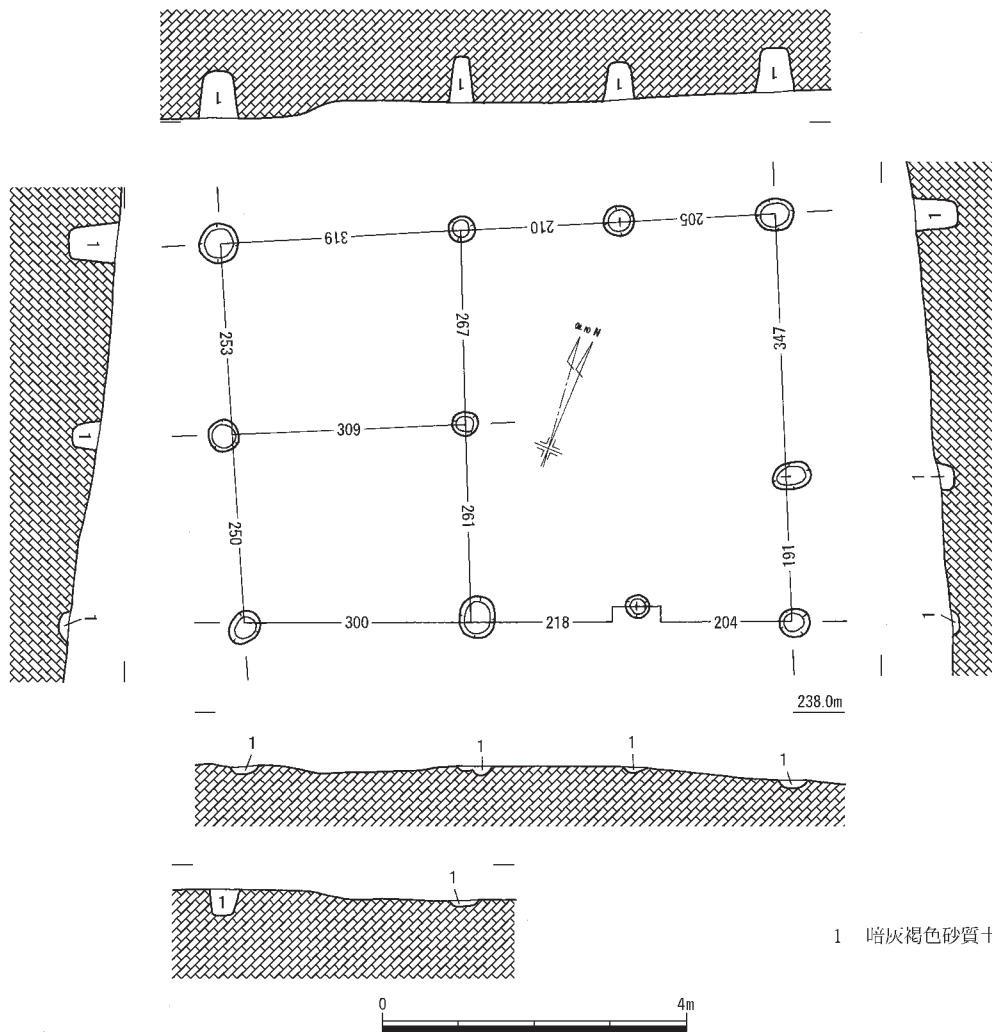
(平井)

掘立柱建物2 (第17図)

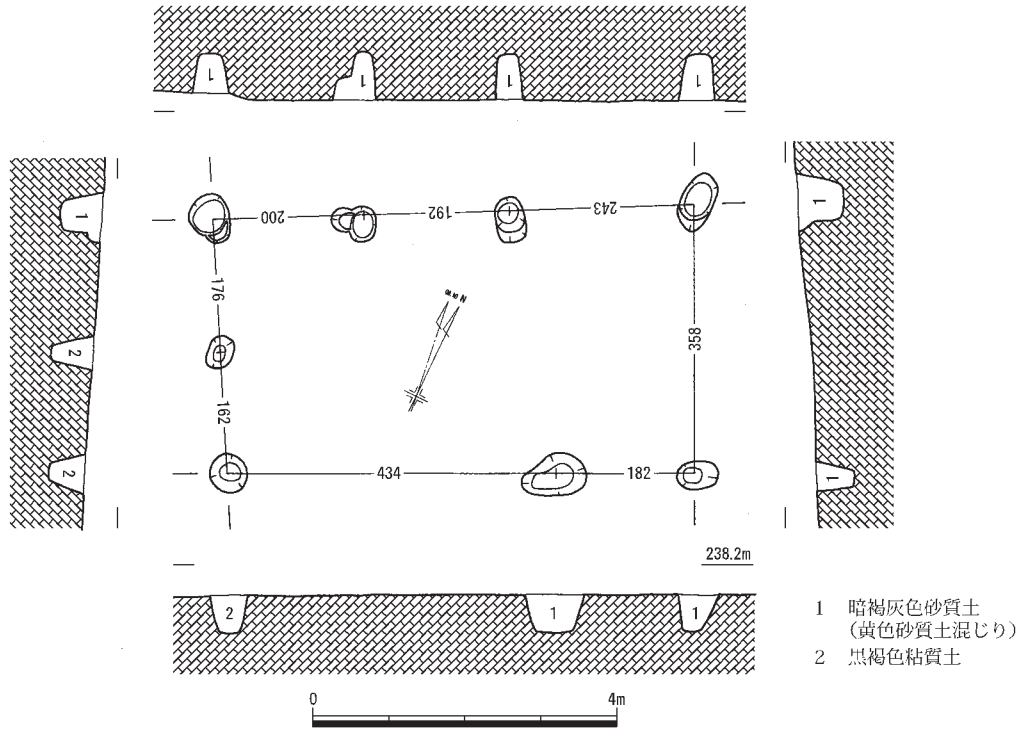
建物1から西7mの位置で検出した桁行4間、梁行2間の建物である。南側の柱のうち1本は土壌2によって消滅していると想定しているが、東側梁間の柱穴については本来存在していなかったと考えられる。柱穴の大きさは、直径50cm、深さ60cm前後である。

時期は、埋土の状況などから近世と考えられる。

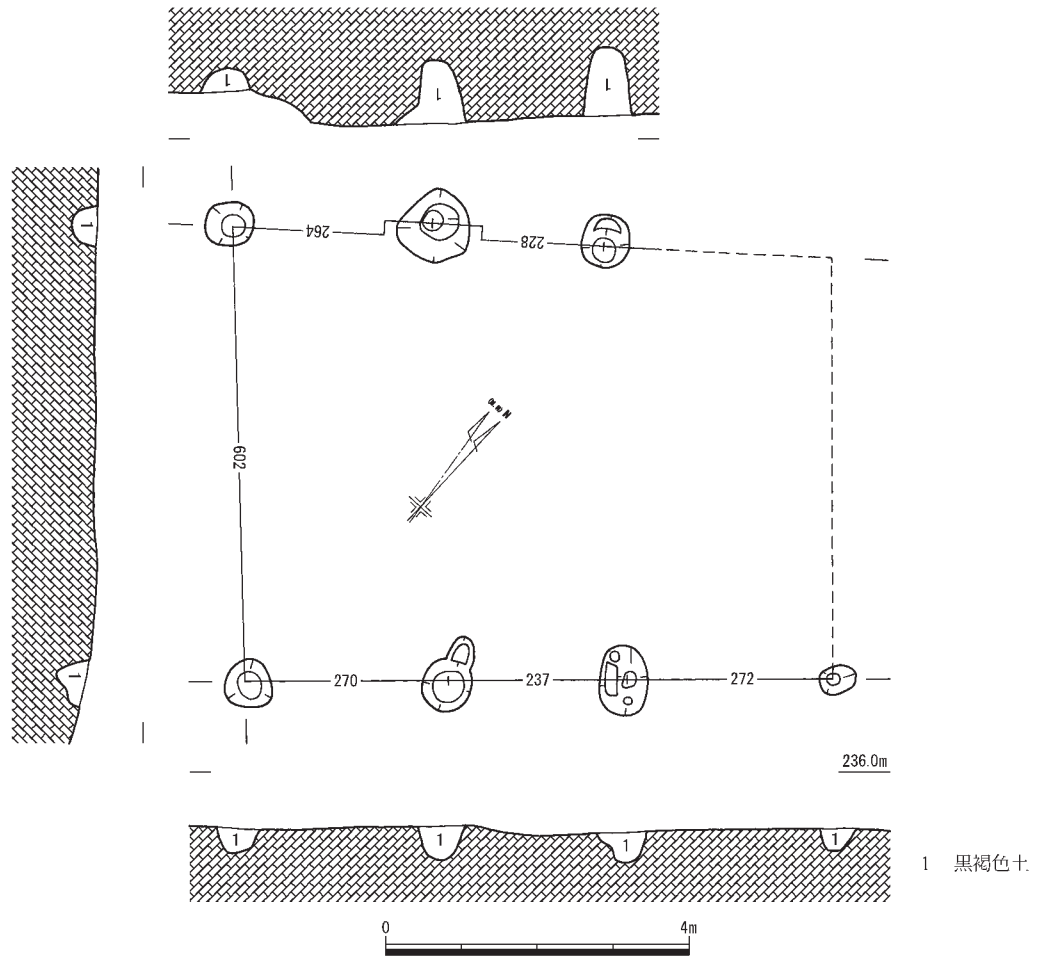
(平井)



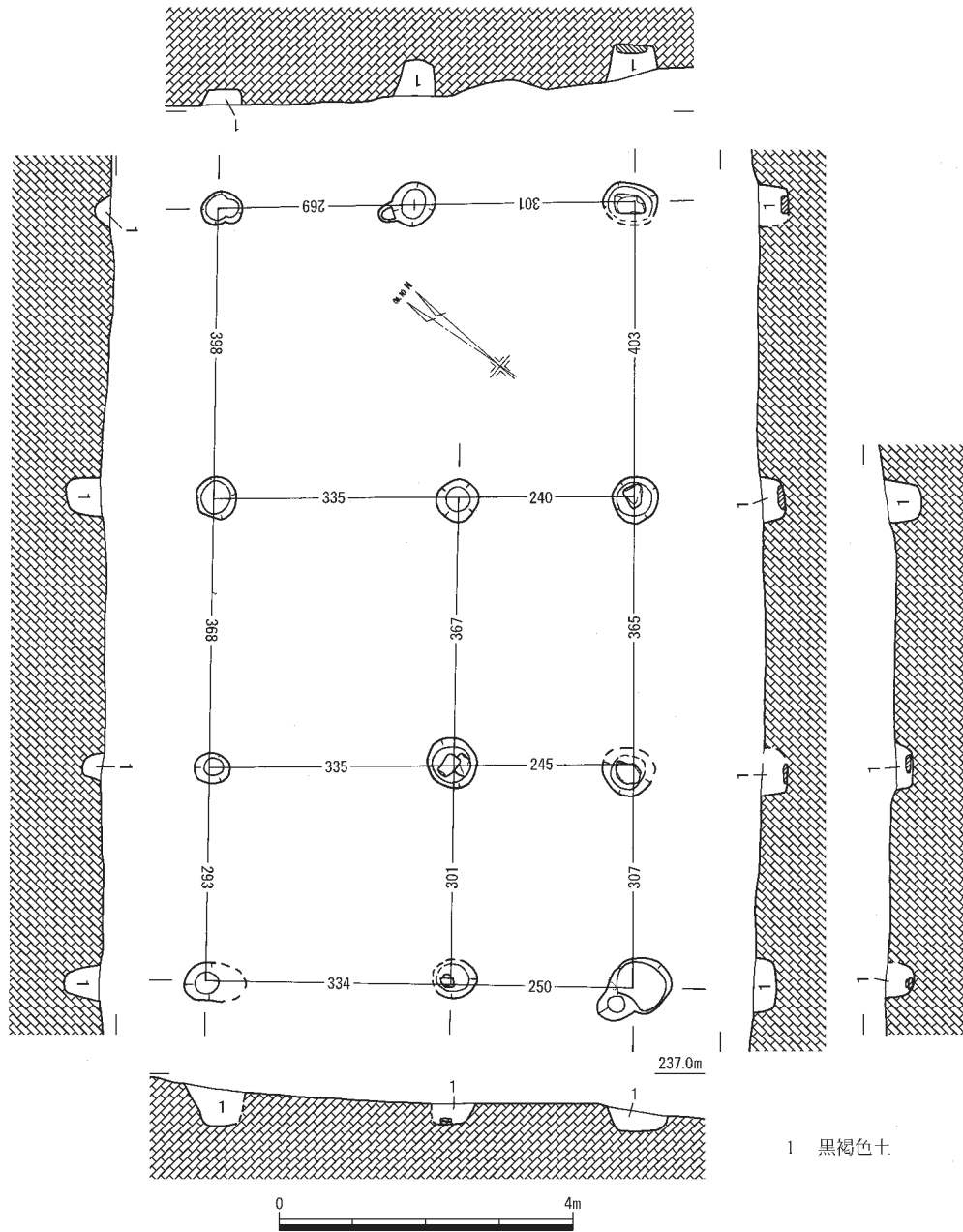
第16図 掘立柱建物1 (1/100)



第17図 掘立柱建物2 (1/100)



第18図 掘立柱建物3 (1/100)



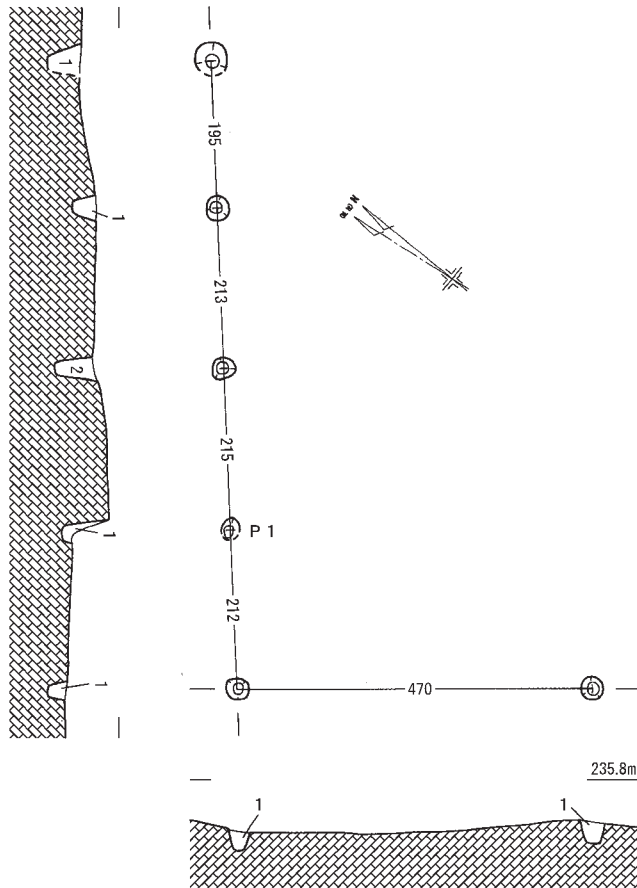
第19図 掘立柱建物4 (1/100)

掘立柱建物3 (第18図)

3区北東よりに位置する。ほぼ780×600cmの範囲で1×2間の掘立柱建物を確認した。棟方向はN-56°-Eを測る。3区近世建物群の下段に位置し、上段には建物4がある。柱穴の出土遺物は備前焼片があるが、少量である。出土遺物と周辺の状況から、遺構の時期は近世である。(氏平)

掘立柱建物4 (第19図・図版4)

3区北西よりに位置する、2×3間の掘立柱建物である。梁行577cm、桁行1067cmで棟方向はN-67°-E、面積は61.5㎡を測る。3区近世建物群の上段に位置し、下段には建物3・5がある。柱穴の埋土は3区上段の基盤層と類似する。柱穴内からは遺物が出土しなかった。遺構の時期は、周辺の遺構との関連から近世前半である可能性が高い。(氏平)



- 1 黒褐色土
- 2 明黄褐色粘質土

第20図 掘立柱建物5・出土遺物 (1/100, 1/4)

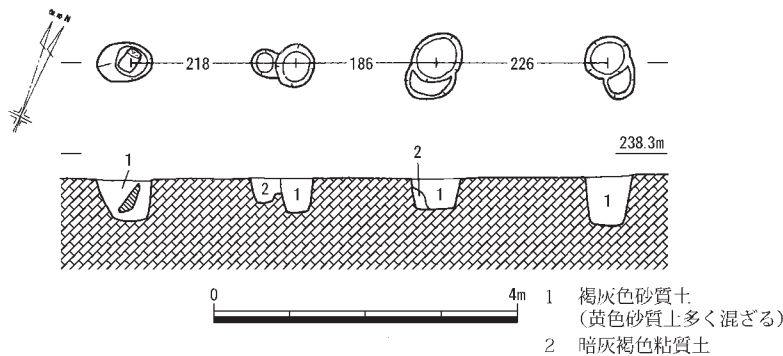
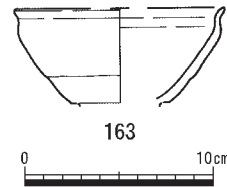
掘立柱建物5 (第20図)

3区北東にある、1間×3間以上で棟方向はN-55°-Eを測る掘立柱建物である。柱穴内から陶磁器片が出土した。P1出土の163は美濃の天目茶碗で、16世紀前半に位置づけられる。遺構の時期は近世であろう。(氏平)

2 柱穴列

柱穴列1 (第21図)

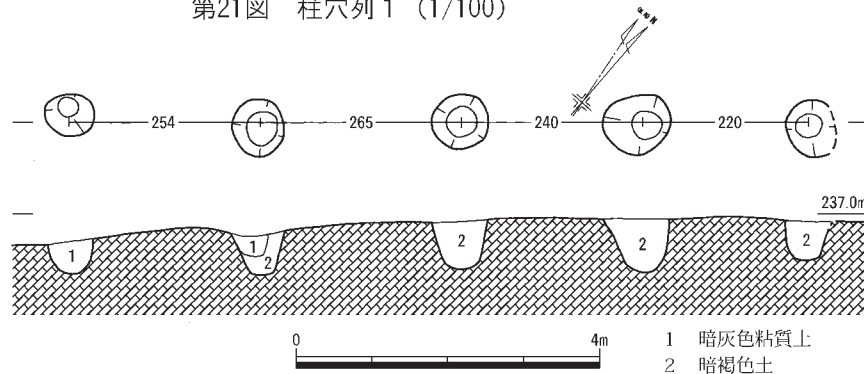
建物2と重複して検出した。東西3間分あり、おそらく北側に建物が広がるのではないかと考えている。柱穴の大きさは直径約50cmで、深さは約60cm残存していた。時期は近世と考えている。(平井)



第21図 柱穴列1 (1/100)

柱穴列2 (第22図・図版4)

3区北西に建物4と重複して検出した。建物4とは異なる柱間である。方向はN-56°-Eを測る。遺物は出土していないが、時期は近世であろう。(氏平)



第22図 柱穴列2 (1/100)

3 炉・土壙墓

炉1 (第23図)

3区東端に近接する。掘り方は102×48cmの方形、深さは7cmが残る。壁に熱影響、底面に炭が見られる。埋土第2層は炉壁である。遺物は近代陶器で、近世～近代の小鍛冶炉であろう。(氏平)

炉2 (第23図)

3区北東にある。掘り方は直径40cmの円形で、深さは3cmで元の形状を止めていない。底面に熱影響が残る。埋土下層は本来の埋土、上層が堆積土である。遺物は見られなかったが、近世の小鍛冶炉であろう。(氏平)

土壙墓1 (第23図)

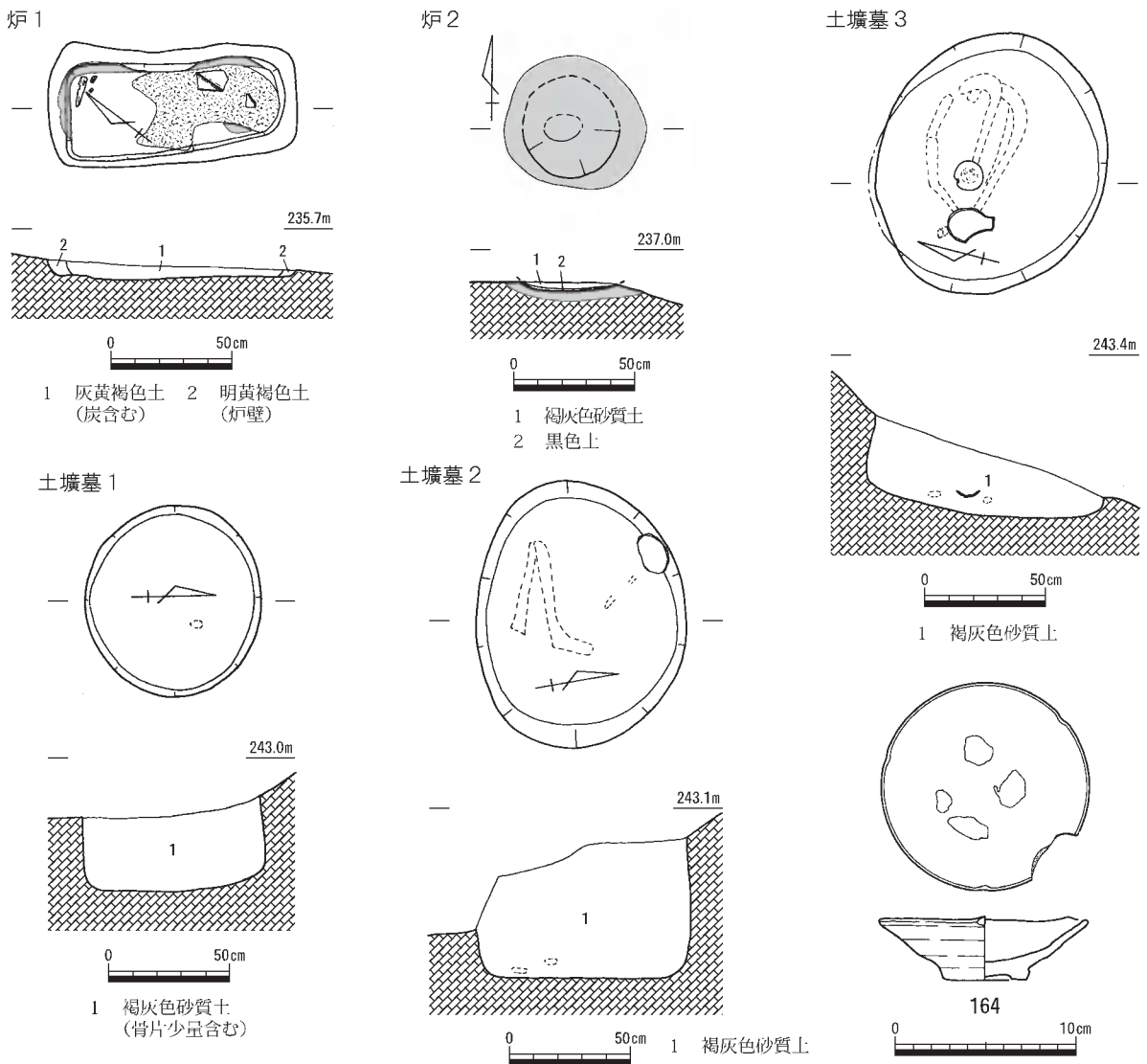
1区西半部の丘陵斜面において検出した。平面形は70×80cmのほぼ円形で、底面は平らである。深さは40cm残存しており、埋土は、褐灰色砂質土が一層のみであった。骨片が埋土中から出土したことや形状から土壙墓であると考えられる。近世であろう。(平井)

土壙墓2 (第23図)

土壙墓1の西隣りで検出した。平面形は110×90cmの楕円形で、底面は平らであった。深さは60cm残存しており、埋土は、褐灰色砂質土が一層のみであった。底面近くから人と思われる頭骨などの骨が出土しており、土壙墓であると考えている。時期は近世であろう。(平井)

土壙墓3 (第23図・図版4)

土壙墓2の西隣りで検出した。平面形は110×95cmの楕円形で、深さは30cm残存しており、埋土は



第23図 炉1、炉2、土壙墓1～3・出土遺物 (1/30, 1/4)

褐灰色砂質土が一層のみであった。底面近くから人と思われる頭骨などの骨と副葬品と考えられる砂目痕のある唐津焼（164）が出土していることから、近世前半の土壙墓であろう。（平井）

4 土壙

土壙2（第24図）

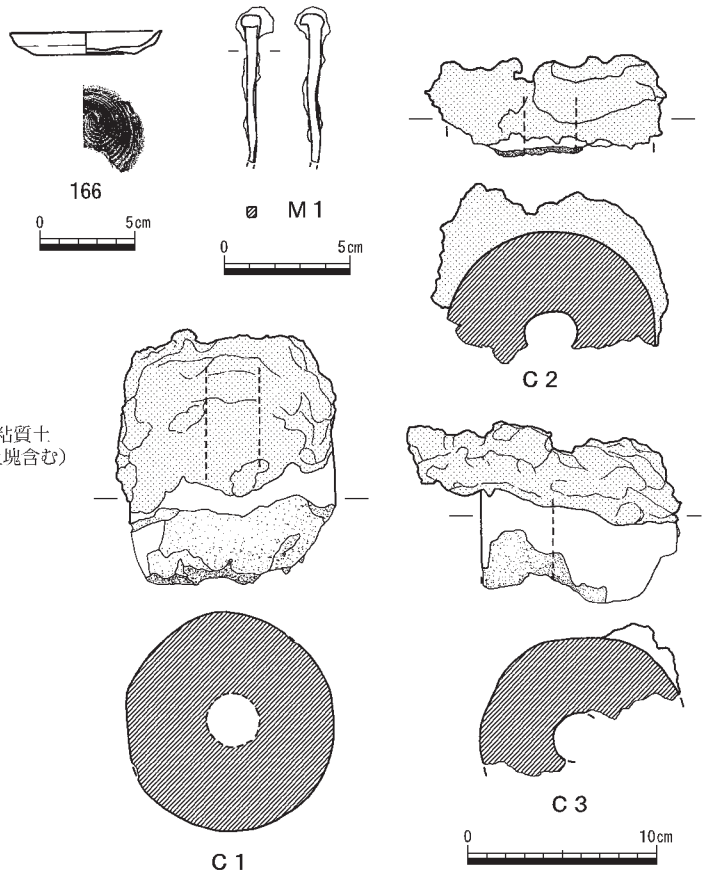
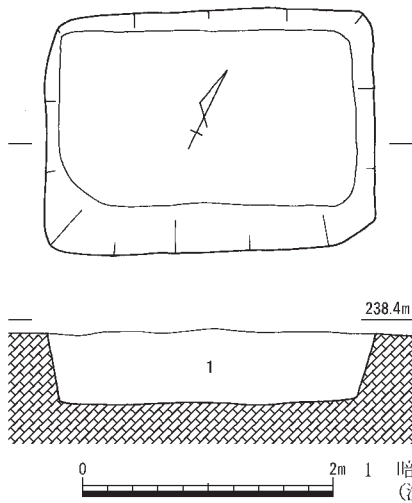
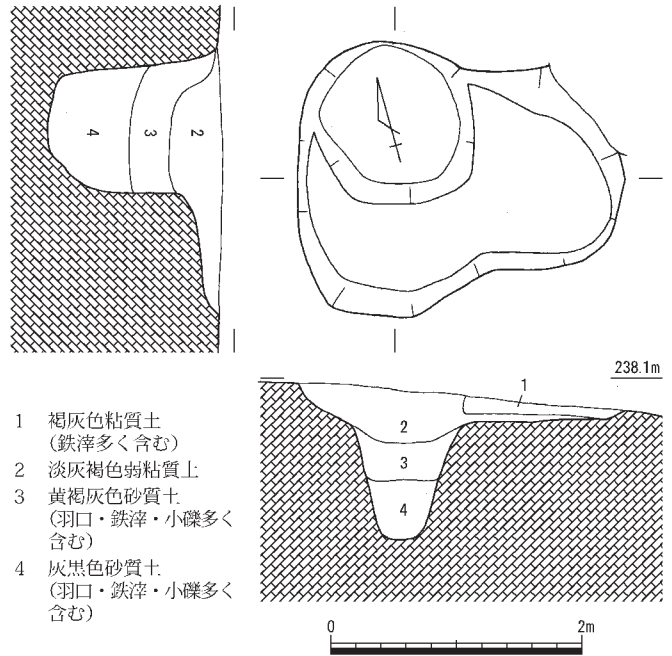
2区の中央部で検出した270×190cmの長方形の土壙である。深さは60cm残存しており、底面は平らである。埋土中から磁器（165）が出土しており、時期は近世と考えられる。

（平井）

土壙3（第25図、図版7）

2区の西半部で検出した。直径100cm、深さ130cmの筒状の穴と不整形な土壙が重なっている可能性もある。埋土中から、多くの羽口や鉄滓、或いは鉄釘が出土しているのが特徴で、鍛冶遺構関連遺物が廃棄されたと考えられる。時期は近世であろう。

（平井）



第24図 土壙2・出土遺物（1/60, 1/4）

第25図 土壙3・出土遺物（1/60, 1/4, 1/3）

土壙4・5 (第26図)

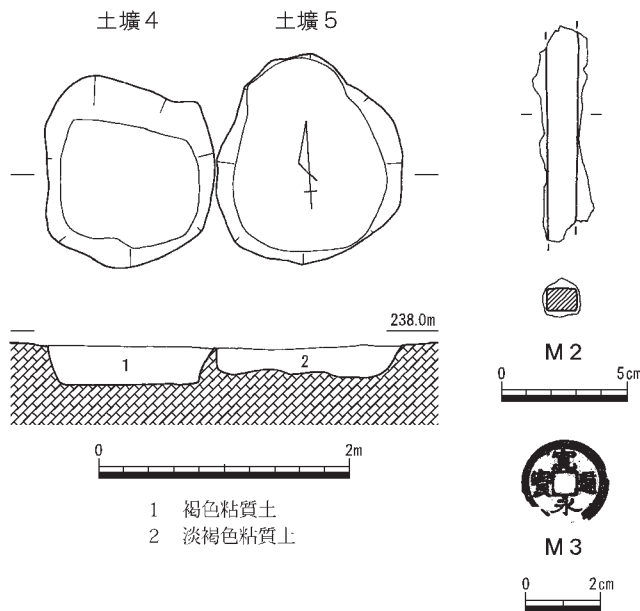
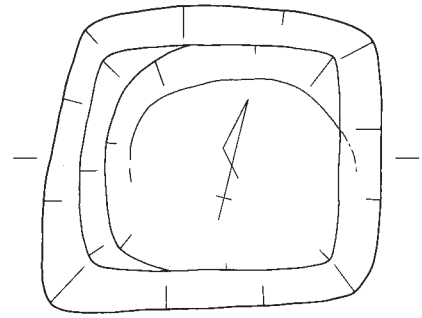
2区の西半部で検出した。ほぼ同じ大きさで、深さも共に約30cm残存していた。遺物は鉄釘(M2)と寛永通寶(M3)が土壙5から出土し、時期はいずれも近世であろう。(平井)

土壙6 (第27図)

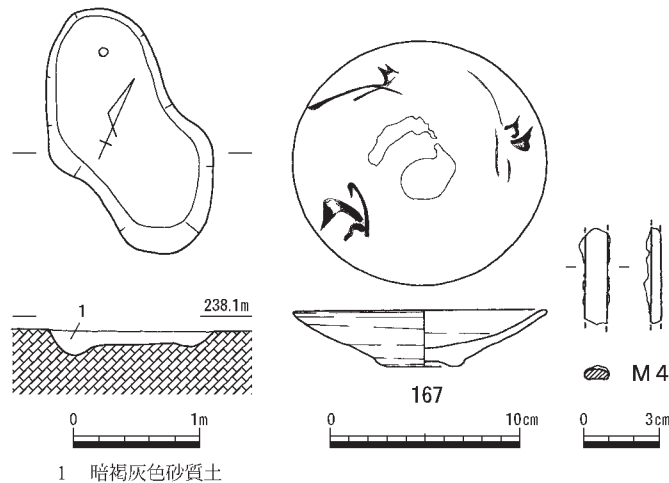
2区の西端部で検出した。平面形は約210×100cmの不整形で、深さは約20cm残存していた。埋土は暗褐灰色砂質土が一層のみであった。砂目痕のある唐津焼と鉄鑿?が出土しており、時期は近世であろう。(平井)

土壙7 (第28図)

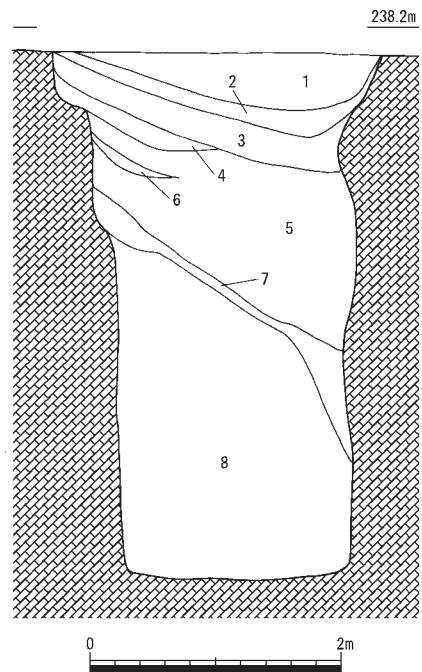
2区の東半部で検出した。平面形は270×240cmの方形で、深さは410cm残存していた。壁は垂直にちかく、底面はほぼ平らであった。湧水はなく、貯蔵庫としての機能を想定している。おもに最上層から肥前系磁器などが出土しており、時期は近世と考えられる。(平井)



第26図 土壙4、5・出土遺物 (1/60, 1/3, 1/2)



第27図 土壙6・出土遺物 (1/60, 1/4, 1/3)



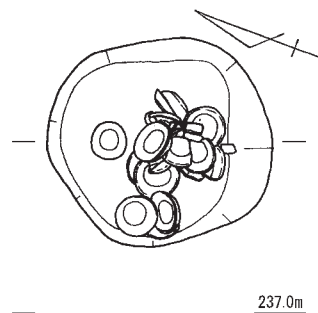
- 1 黒褐色粘質土 (出土遺物最も多い)
- 2 灰褐色粘質土
- 3 淡黄灰褐色粗砂
- 4 淡灰褐色粘質土
- 5 淡黄褐色粗砂
- 6 灰褐色粘質土
- 7 灰茶褐色粘質土
- 8 茶褐色砂質土



第28図 土壙7・出土遺物 (1/60, 1/4)

土壙8 (第29図、図版4)

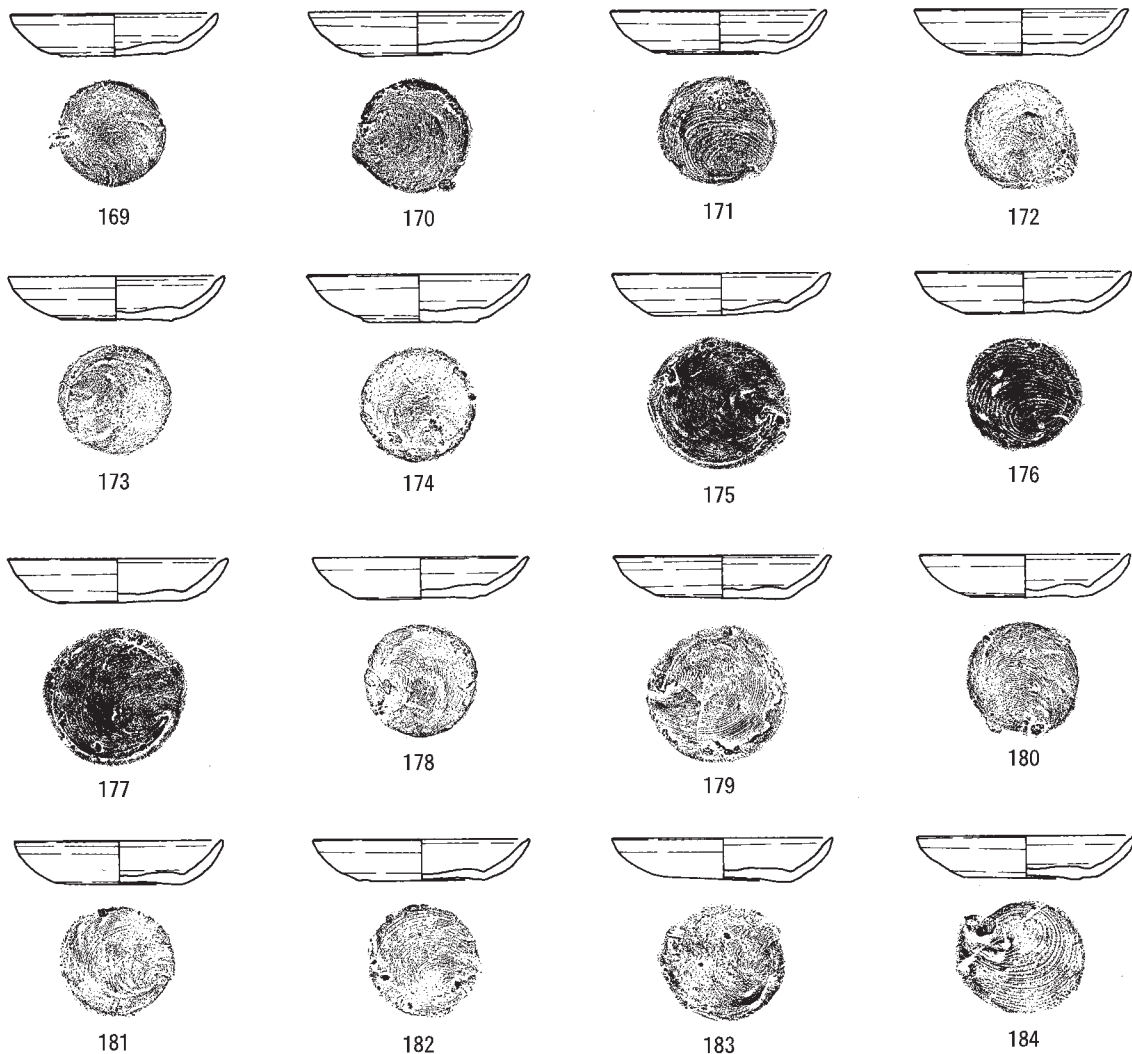
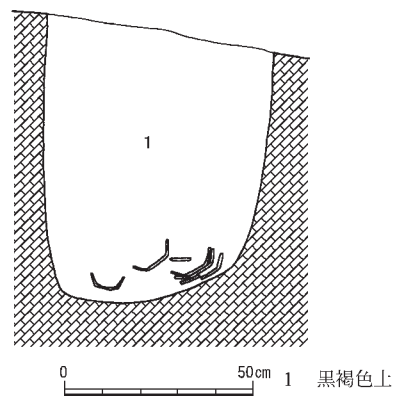
1区北東に位置し、掘り方は60×55cmの円形、深さ75cmを測る。底面に合計16枚の土師器皿が折り重なり出土した。土師器皿は、ほとんど完形、あるいは接合して完形になった。断面図に示したように、上を向いて出土したものが多く、掘り方の底面に接しているものは少ない。土師器皿はいずれも底面糸切りで、それらから遺構の時期は近世であろう。(氏平)



5 柱穴・包含層出土遺物

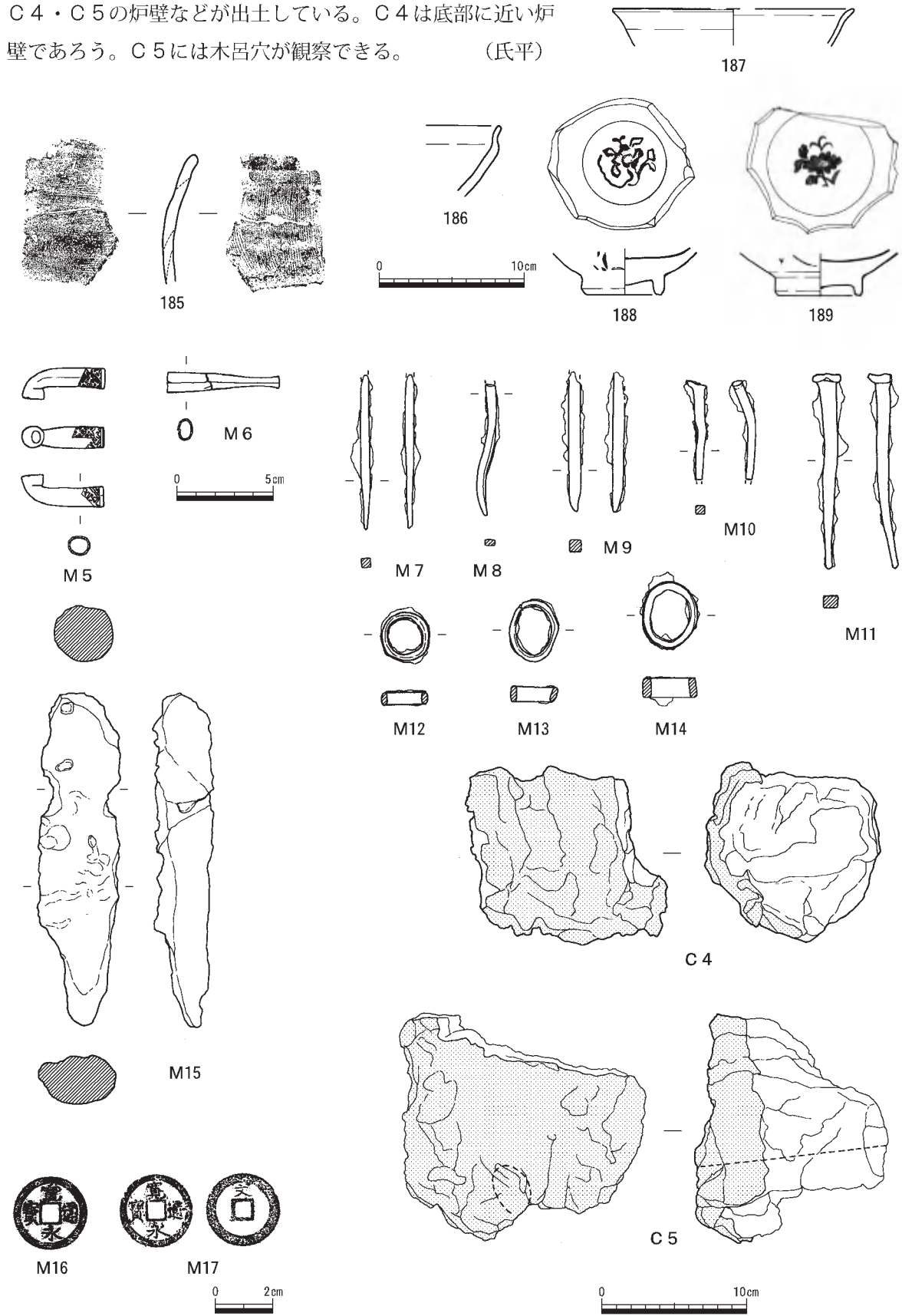
柱穴・包含層出土遺物 (第30図、図版7)

中～近世の遺物の量は第一次調査と1～3区合計で整理箱にして9箱程度である。中世は2区東側包含層出土で15世紀代の青磁187～189がある。近世～近代の陶磁器は、3区の造成土や最近のやられで多く出土した。186は3区柱穴出土の天目茶碗である。金属器は近世以降がほとんどで、煙管・銭貨・鉄釘などがある。製



第29図 土壙8・出土遺物 (1/20, 1/4)

鉄関連の遺物として、1区北端の鉄滓溜まりからM15の銑鉄、
C4・C5の炉壁などが出土している。C4は底部に近い炉
壁であろう。C5には木呂穴が観察できる。(氏平)



第30図 柱穴・包含層出土遺物 (1/4, 1/3, 1/2)

第5節 まとめ

1 尖頭器について

箱E遺跡・かなぼれB遺跡では尖頭器が合計4点出土し、1度の調査では県内でも有数の出土量となった。そこで、出土尖頭器について類例との比較を行い、どの時代に属するかを考えてみたい。

箱E遺跡の尖頭器は発見当初は縄文時代早期と考えていた。同一層の出土遺物では黄島式の押型文土器が主で、出土層が基盤層直上だったからである。しかし、尖頭器が含まれる層の直上層（第6図第7層）が、土壌の分析結果⁽⁹⁾によりアカホヤ火山灰の純層ではなく、アカホヤ火山灰の火山ガラスをごく少量含む地山流出土とされた。このことから尖頭器や押型文土器を含む層も2次堆積である可能性が高いと考えた。尖頭器自身の型式的な位置を追求する必要が生じたのである。

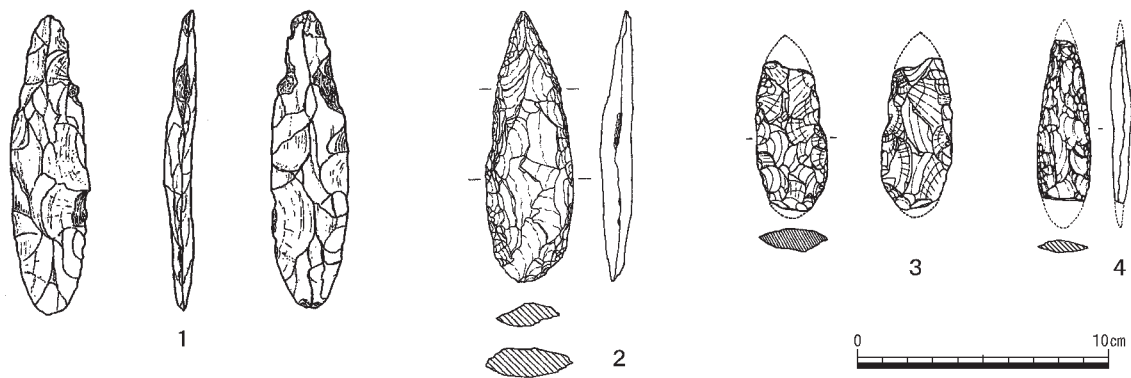
旧石器時代の尖頭器は、岡山県内出土例として中国山地の東遺跡（蒜山原東遺跡）⁽¹⁰⁾・瀬戸内の王子ヶ岳南麓遺跡⁽¹¹⁾・鷲羽山遺跡⁽¹²⁾などがある。東遺跡の尖頭器は平面形が弓形をしているものが多く、王子ヶ岳南麓遺跡でも同様の傾向がうかがえる。また、鷲羽山遺跡や香川県羽佐島遺跡⁽¹³⁾では左右対称で平面形が菱形のものが多い。このことから、東遺跡・王子ヶ岳南麓遺跡例→羽佐島遺跡・鷲羽山遺跡例と変遷していると言えよう。旧石器時代尖頭器に共通の特徴として、胴部最大幅が本体中央に置かれることと、断面が菱形でないものが時期の古い方に多く見られる。さらに、有舌尖頭器に比べ全長が短く、素材がサヌカイト以外のものも多いことも挙げられよう。かなぼれB遺跡の尖頭器は先端が左右対称ではなく、東遺跡のものに類似していることから、旧石器時代の可能性が高い。

縄文草創期の尖頭器には、大まかに分類して基部を抉って突出させる有舌尖頭器と丸く収める木葉形尖頭器がある。これらの尖頭器と共に土器が出土した遺跡として、中四国地方では広島県帝釈峡馬渡岩陰遺跡⁽¹⁴⁾、高知県十川駄馬崎遺跡⁽¹⁵⁾が有名である。有舌尖頭器は帝釈峡馬渡岩陰遺跡第4層で無文土器と共伴し、縄文草創期の石器器種の1つと考えられるようになった。木葉形尖頭器は十川駄馬崎遺跡で隆起線文土器と共に出土している。岡山県内の有舌尖頭器は、基部を直線的に加工し、両面に剥離が及ぶ。断面形は菱形で、胴部最大幅は基部付近の中央部より下部に置かれる。なお、木葉形尖頭器と有舌尖頭器の関係は、時期的に併行し、系譜が違うと考えるのが主流である⁽¹⁶⁾。

箱E出土の尖頭器の内、S1・S3は木葉形尖頭器である。類似する県内例として寺原遺跡⁽¹⁷⁾・六番丁場遺跡⁽¹⁸⁾がある。高屋B遺跡⁽¹⁹⁾・広高山遺跡⁽²⁰⁾例は基部を欠損するが同類であろう。これらの特徴は、両面を剥離し、断面が菱形に近く、全長が5cm以上になることである。このうち六番丁場遺跡例は押型文土器と同一層から出土とされているが、遺跡周辺の状況から鑑みるに、出土層は2次堆積で出土遺物は原位置を移動しているとするのが妥当であろう。このように県内で尖頭器と押型文土器が同時に出土する例はいずれも包含層で、原位置を保つものは見られない。箱E遺跡の尖頭器は、帝釈峡馬渡岩陰遺跡第4層出土例などを見る限り、草創期に位置づけるのがよいと考える。

2 縄文時代の箱E遺跡

箱E遺跡で出土した縄文土器を、従来の編年観に沿って並べると表のようになる。早期～前期前半、中期末～後期初頭、晩期後半の時期についてまとめた資料が得られた。



1 寺原A遺跡 2 六番丁場遺跡 3 高屋B遺跡 4 広高山遺跡

第31図 岡山県内出土木葉形尖頭器 (1/3)

表6 縄文時代の箱E遺跡及び周辺遺跡の変遷⁽²¹⁾

時期	型式名	遺跡名						
		恩原2	寺原A(寺原)	養野かなくそ (上養野)	箱E(本報告)	箱川流域 ⁽²²⁾	久田原	六番丁場
晩期	沢田							
	黒上B II							
	南方前池							
	原下層・谷尻							
	黒上B I							
	岩田							
後期	福田K III							
	彦崎K II							
	彦崎K I							
	福田K II							
	中津							
中期	里木II							
	船元IV							
	船元III							
	船元II							
	船元I							
前期	田井							
	里木I							
	彦崎Z I							
	磯の森							
	羽島下層	西川津	西川津・轟		西川津			
早期	繊維上器							
	穂谷							
	高山寺							
	黄島							
	神宮寺							
	(条痕文)							
草創期	刺突文							

※前期の羽島下層・西川津・轟は併行関係にあるものと考えている。

周辺の縄文遺跡についても時期別の出土状況をまとめてみた。この中で、久田原遺跡・六番丁場遺跡は大規模集落で、その他は小規模な短期滞在型の集落と位置づけられる。早期は黄島併行期で遺跡が増加し、前期は山陰の西川津式、九州の轟式と羽島下層式が混在する上養野遺跡もある。前期後半で遺跡が消え、中期前半に再び出現する。本格的な発展は中期末の里木Ⅱ式併行期からで、後期後葉から晩期では久田の平野部で集落が営まれ、同時に箱E遺跡などでも生活の痕跡が窺える。

箱E遺跡に限らず前期後半から中期初頭までの空白、後期中葉からの山間部遺跡の減少は注意すべき傾向であろう。特に後者は、山間部遺跡の停滞と平野部遺跡の隆盛が同時に発生した可能性を示唆している。その中でも箱E遺跡は山間部でもいち早く生活の場として利用され、縄文時代人にとって重要な遺跡であったことがこの表によりさらに鮮明になったと言えよう。(氏平)

註

- (1) 橋本惣司「苫田郡奥津町の縄文遺跡」『環瀬戸内海の考古学』一平井勝氏追悼論文集一 古代吉備研究会 2002
- (2) 下澤公明ほか「中山西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』岡山県教育委員会 1995
- (3) 稲田孝司編『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団 1996
- (4) 潮見 浩ほか「帝釈峡遺跡群1986～1994年度の発掘調査」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報X』広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室 1995
- (5) 角田徳幸ほか「板屋Ⅲ遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』島根県教育委員会 1998
- (6) 前掲註(4)
- (7) 稲田孝司氏のご教示による。
- (8) 藤野次史氏のご教示による。
- (9) 白石 純氏に顕微鏡下での観察をお願いしたところ火山ガラスが確認されたため、その同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- (10) 白石 純・小林博昭「蒜山原東遺跡の発掘調査」『自然科学研究所研究報告27』岡山理科大学自然科学研究所 2001
新谷俊典「東遺跡Ⅰ」『蒜山文化財調査報告1』蒜山教育事務組合教育委員会 2003
- (11) 藤原好二ほか「王子ヶ岳南麓遺跡」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第4集』倉敷埋蔵文化財センター 1995
- (12) 高橋 護「鷲羽山遺跡」『岡山県史 第18巻 考古資料』岡山県 1986
- (13) 藤好史郎ほか「羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅲ)』香川県教育委員会 1980
- (14) 潮見 浩『帝釈峡遺跡群』吉備考古ライブラリ3 吉備人出版 1999
- (15) 山本哲也・岡本桂典「十川駄馬崎遺跡発掘調査報告書」『十和村埋蔵文化財調査報告書第3集』十和村教育委員会 1989
- (16) 藤野次史氏のご教示による。
- (17) 前掲註(1)
- (18) 井上 弘ほか「六番丁場遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告165』岡山県教育委員会 2002
- (19) 松本和男「高屋B遺跡」『福田A遺跡・高屋B遺跡』落合町教育委員会 1983
- (20) 安川豊史「付載1 広高山遺跡採集の石器」『西谷遺跡』長船町教育委員会 1985
- (21) 文献は註(1)(3)(18)と江見正己ほか「久田原遺跡 久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184』岡山県教育委員会 2003
- (22) かなぼれB、上野寺、箱岨、箱上散布地を合わせて集計した。

表7 土器観察表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	備考
					口径	底径	器高		
1	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR6/4)	貝殻刺突か
2	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR6/4)	
3	2区	調査区東 南下がり掘り下げ中	縄文土器	深鉢	—	—	(22.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	
4	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	浅黄色(2.5Y7/3)	神宮寺式
5	2区	(東)南斜面最下層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄色(2.5Y6/3)	
6	2区	南斜面灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄色(2.5Y7/2)	
7	2区	調査区東 南下がり掘り下げ中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR6/4)	
8	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/3)	回転押捺の押型文(大川式)
9	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
10	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい赤褐色(5YR5/3)	
11	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	
12	2区	南斜面灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
13	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
14	3区	南東側茶褐色粘質包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
15	2区	調査区東 南下がり掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	黄灰色(2.5Y4/1)	
16	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい橙色(5YR6/4)	
17	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
18	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい赤褐色(5YR5/4)	
19	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/2)	
20	2区	調査区東No.18柱穴列P-3	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	
21	2区	調査区東最下層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	
22	3区	東端(No.11・12付近)褐色包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	浅黄色(2.5Y7/3)	
23	2区	南斜面灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	橙色(5YR6/6)	
24	3区	南側包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	灰黄褐色(10YR4/2)	
25	3区	南東側黒色包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	褐灰色(10YR4/1)	
26	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/4)	
27	2区	南斜面灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	橙色(5YR6/6)	
28	3区	南斜面灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	橙色(5YR6/6)	
29	2区	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰色(N5/)	
30	3区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
31	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/3)	
32	1区	南斜面灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	褐色(5YR6/6)	
33	2区	南斜面灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	褐色(5YR6/6)	
34	2区	調査区東 南下がり掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	明褐色(2.5YR5/6)	
35	2区	調査区北東下がり黒色包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(5YR7/4)	外面刺突、内面調整不明瞭。
36	3区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	浅黄褐色(10YR8/4)	
37	1区	調査区北東下がり黒色包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(5YR6/4)	
38	3区	南東側茶褐色粘質包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄褐色(10YR5/2)	
39	3区	調査区北東下がり黒色包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
40	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
41	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
42	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
43	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	
44	T3	T3南北トレンチ灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
45	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(5YR6/4)	
46	2区	調査区東 南下がり(斜面)掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
47	2区	調査区東 南下がり掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
48	2区	調査区東 南下がり掘下中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
49	2区	調査区東 遺構検出中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
50	3区	南東側黒色包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
51	3区	南東側茶褐色粘質包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
52	3区	南東側茶褐色粘質包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	浅黄褐色(10YR8/3)	
53	3区	南東側茶褐色粘質包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
54	3区	調査区北東下がり黒色包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	褐色(2.5YR6/6)	
55	3区	P-23	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
56	3区	東端(No.11・12付近)褐色包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
57	3区	東端(No.11・12付近)褐色包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
58	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	底部	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	内面剥離のため厚さ不明。
59	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	底部	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
60	T10	T10	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	
61	T10	T10	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	
62	T10	T10	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	
63	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄褐色(10YR4/2)	縄文単節LR、胎土中に繊維あり
64	3区	包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい赤褐色(5YR5/4)	縄文単節LR、胎土中に繊維あり
65	T3	T3排上中	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/3)	縄文単節LR、胎土中に繊維あり
66	T3	T3排上中	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/4)	縄文単節LR、胎土中に繊維あり
67	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(5YR6/4)	縄文単節LR、胎土中に繊維あり

表7 土器観察表

掲載 番号	掲載遺構 ・土層名	旧遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	備考
					口径	底径	器高		
68	1区	おもに褐灰色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	縄文単節RL、胎土中に繊維あり
69	3区	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	早期末 平椀(ひらがこい)式に近い
70	3区	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	早期末 平椀(ひらがこい)式に近い
71	3区	南側包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	褐灰色(10YR4/1)	
72	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
73	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	羽島下層IIか
74	1区	おもに褐灰色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
75	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/2)	
76	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
77	T3	T3南北トレンチ灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢?	—	—	—	黄灰色(2.5Y4/1)	
78	3区	南側包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄色(2.5Y6/3)	
79	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢?	—	—	—	褐色(2.5YR6/6)	
80	3区	南東側黒色包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
81	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR4/3)	
82	3区	北東端黒褐色包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
83	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
84	2区	調査区東 遺構検出中	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
85	T10	T10	縄文土器	深鉢	—	—	—	褐色(7.5YR6/6)	
86	T10	T10	縄文土器	深鉢?	—	—	—	褐色(7.5YR6/6)	
87	3区	南側包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
88	1区	おもに褐灰色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
89	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	淡黄褐色(7.5YR8/4)	
90	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	埴木II式
91	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	中津式
92	1区	おもに褐灰色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	擬縄文(ヘタナリ使用) 中津式に近い沈線の施文法 後期の古い段階
93	1区	おもに褐灰色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/3)	
94	1区	褐灰色砂質土(一部灰黒色砂質土含)	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
95	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
96	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
97	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
98	T10	T10	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
99	T3	T3南北トレンチ灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
100	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	暗灰黄色(2.5Y5/2)	
101	T3	T3周辺灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	暗灰黄色(2.5Y4/2)	福田KIII式
102	T3	T3周辺灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	
103	1区	おもに褐灰色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
104	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/4)	
105	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/2)	
106	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
107	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい褐色(5YR6/4)	
108	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(2.5Y7/2)	
109	T3	T3周辺灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
110	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	灰黄色(2.5Y6/2)	
111	2区	調査区東 遺構検出中	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
112	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	赤色顔料塗布 後期中葉
113	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
114	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
115	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
116	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄色(2.5Y6/3)	
117	1区	おもに灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	
118	1区	おもに灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/3)	
119	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/3)	
120	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	後期中頃 緑帯文崩れる
121	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(5YR7/4)	
122	1区	褐灰色砂質土(一部灰黒色砂質土含)	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
123	1区	おもに灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
124	1区	褐灰色砂質土(一部灰黒色砂質土含)	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
125	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/4)	
126	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
127	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
128	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	褐色(7.5YR7/6)	
129	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい赤褐色(5YR5/4)	
130	T3	T3南北トレンチ灰黒色砂質土	縄文土器	鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
131	2区	No6上墳	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	
132	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	暗灰黄色(2.5Y5/2)	
133	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	褐灰色(10YR5/1)	

表7 土器観察表

掲載 番号	掲載遺構 ・土層名	旧遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	備考
					口径	底径	器高		
134	1区	おもに褐灰色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄色(2.5Y6/3)	
135	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢?	—	—	—	にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	
136	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
137	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
138	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	125と同一個体か
139	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
140	3区	北東端黒褐色包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	黒褐色(10YR3/2)	
141	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
142	3区	弥生包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
143	3区	南東側黒色包含層	縄文土器	深鉢?	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	
144	T10	T10	縄文土器	深鉢	—	—	—	浅黄褐色(10YR8/3)	
145	T3	T3灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
146	1区	灰黒色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
147	1区	おもに褐灰色砂質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	
148	2区	No.15土壇	弥生土器	甃	—	—	(3.25)	浅黄褐色(10YR8/4)	外面に煤付着
149	T14	T14暗褐色土(黒ボク層の上層)	弥生土器	壺	—	—	—	灰色(5Y5/1)~にぶい黄褐色(10YR6/3)	
150	3区	東西包含層(茶褐色)	弥生土器	甃	12.85	—	(5.9)	にぶい褐色(7.5YR7/3)	
151	3区	包含層	弥生土器	甃	19.4	—	(6.6)	褐色(5YR6/6)	
152	3区	南東包含層(茶褐色)	弥生土器	高杯	20.2	—	(10.2)	にぶい黄褐色(10YR7/4)~ にぶい黄色(2.5Y6/3)	
153	3区	包含層	弥生土器	高杯	—	12.85	(7.5)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
154	3区	黒褐色土	弥生土器	高杯	—	15.4	(8.1)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	透かし孔(一部貫通)4方向か
155	3区	No.18(たわみ)	弥生土器	台付壺	—	—	—	灰オリーブ色(5Y6/2)	
156	3区	調査区南東包含層(近世含む)	弥生土器	取手	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR6/3)	
157	3区	包含層	弥生土器	台付鉢	—	9.2	(3.4)	褐色(5YR7/6)	
158	3区	排出上中	弥生土器	甃	—	—	(8.0)	にぶい褐色(7.5YR7/4)と 褐色(7.5YR7/6)の中間	
159	2区	調査区東 No.20柱穴列	弥生土器	甃	12.7	—	(3.1)	にぶい黄色(10YR7/3)	
160	2区	南斜面灰黒色砂質土	弥生土器	甃	14.6	—	(3.4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	外・内面ヨコナデ。
161	1区	褐灰色砂質土(一部灰黒色砂質土含)	弥生土器	甃	(13.2)	—	(2.95)	浅黄褐色(10YR8/3)	外・内面ヨコナデ。
162	1区	褐灰色砂質土+灰黒色砂質土	弥生土器	甃	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
163	3区	02年度pit18	陶器	大日茶碗	(11.0)	(5.2)	—	暗褐色(7.5YR3/3)	16世紀第2四半期 井上編年大窯期II A
164	1区土壇3	No.10土壇墓	唐津	皿	11.3	4.5	3.55	褐色(2.5YR7/6)	
165	2区土壇1	調査区東 No.3土壇	染付	椀	9.85	4.2	5.75	—	同一形状の別個体がもう1つあり
166	2区土壇2	調査区東No.9土壇	土師器	小皿	8.0	5.15	1.2	にぶい黄褐色(10YR7/3)	
167	2区土壇5	No.6土壇	唐津	椀	(11.1)	4.3	3.3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
168	2区土壇6	調査区東No.8土壇	染付	德利	—	—	(9.5)	灰白色(5GY8/1)	
169	3区土壇7	No.17土壇No.1	土師器	皿	10.8	5.55	2.25	褐色(2.5YR7/6)	
170	3区土壇7	No.17土壇No.2	土師器	皿	11.15	5.7	2.4	褐色(2.5YR7/6)	
171	3区土壇7	No.17土壇No.3	土師器	皿	11.2	5.8	2.3	淡赤褐色(2.5YR7/4)	
172	3区土壇7	No.17土壇No.4	土師器	皿	11.1	5.7	2.5	にぶい褐色(5YR7/4)	
173	3区土壇7	No.17土壇No.5	土師器	皿	11.25	5.8	2.35	にぶい褐色(5YR7/4)	
174	3区土壇7	No.17土壇No.6	土師器	皿	11.6	6.1	2.6	褐色(5YR7/6)~にぶい黄褐色(10YR7/4)	
175	3区土壇7	No.17土壇No.7	土師器	皿	11.4	6.6	2.2	にぶい黄褐色(10YR7/4)	
176	3区土壇7	No.17土壇No.8	土師器	皿	11.3	6.2	2.2	にぶい褐色(5YR7/4)	
177	3区土壇7	No.17土壇No.9	土師器	皿	11.5	6.7	2.3	にぶい褐色(5YR7/4)	
178	3区土壇7	No.17土壇No.10	土師器	皿	11.25	5.15	2.25	褐色(5YR7/6)	
179	3区土壇7	No.17土壇No.11	土師器	皿	11.25	5.85	2.3	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
180	3区土壇7	No.17土壇No.12	土師器	皿	11.0	5.75	2.3	浅黄褐色(7.5YR8/6)	
181	3区土壇7	No.17土壇No.17	土師器	皿	10.9	6.1	2.35	褐色(2.5YR7/6)	
182	3区土壇7	No.17土壇No.14	土師器	皿	11.3	5.5	2.2	褐色(5YR7/6)	
183	3区土壇7	No.17土壇No.15	土師器	皿	11.5	6.7	2.35	褐色(2.5YR7/6)	
184	3区土壇7	No.17土壇No.17	土師器	皿	11.4	6.05	2.3	褐色(5YR7/6)	
185	1区	灰黒色砂質土	土師器?	甃?	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR7/4)	
186	3区	02年度pit3	陶器	大日茶碗	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR4/3)	16世紀第3四半期 井上編年大窯期II B
187	2区	調査区東 遺構検出中	青磁	椀	(16.5)	—	(2.6)	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	
188	2区	調査区東 遺構検出中	青磁	椀	—	5.2	(3.3)	オリーブ灰色(10Y6/2)	
189	2区	調査区東 遺構検出中	青磁	椀	—	5.65	(2.9)	該当色なし	

表8 土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	器種	計測値(cm)			重量(g)	色調	時期	備考
				最大長	最大幅	孔径				
C 1	2区土壇2	Ⅲ区No. 9土壇	羽口	(13.4)	11.55	2.8	1641	灰白色(10YR8/2)	近世	
C 2	2区土壇2	Ⅲ区No. 9土壇	羽口	(4.7)	11.0	3.0	431	にぶい黄橙色(10YR6/4)～ 浅黄橙色(7.5YR8/4)	近世	
C 3	2区土壇2	Ⅲ区No. 9土壇	羽口	(8.7)	10.3	—	599	にぶい橙色(7.5YR7/3)	近世	
C 4	1区	Ⅱ区鉄滓溜り	炉壁	11.3	11.0	—	1423	にぶい橙色(7.5YR7/4)	近世	粘土塊1つ分
C 5	1区	Ⅱ区鉄滓溜り	炉壁	(12.5)	16.3	—	1969	にぶい橙色(7.5YR7/4)	近世	木呂孔1つ残存

表9 石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
S 1	3区	南東茶褐色包含層(褐色包含層の下)尖頭器1	尖頭器	(83.0)	26.5	9.0	21.10	サヌカイト	縄文時代	先端欠損。金山産?
S 2	3区	中央東茶褐色粘質包含層 尖頭器2	尖頭器	65.5	29.5	11.0	22.01	サヌカイト	縄文時代	基部欠損、再利用。金山産?
S 3	3区	中央南東茶褐色粘質包含層 尖頭器3	尖頭器	115.0	32.0	14.5	53.87	サヌカイト	縄文時代	先端を再加工か。金山産?
S 4	3区	尖頭器4	スクレイパー	69.5	34.5	18.0	14.50	サヌカイト	縄文時代	未製品ではなく、製品。国府台産?
S 5	3区	中央東側包含層	石鏃	29.0	21.5	3.5	1.67	サヌカイト	縄文時代?	風化著しい。金山産?
S 6	3区	南側包含層	スクレイパー	57.0	56.0	9.0	34.50	サヌカイト	縄文時代?	向かって右側に自然面残る。
S 7	3区	表採	使用痕ある剥片	36.5	48.5	6.5	8.96	サヌカイト	縄文時代?	
S 8	1区	Ⅱ区 褐灰色砂質土と灰黒色砂質土	調整剥片	39.0	23.0	7.5	3.68	黒曜石	縄文時代	

表10 金属器一覧表

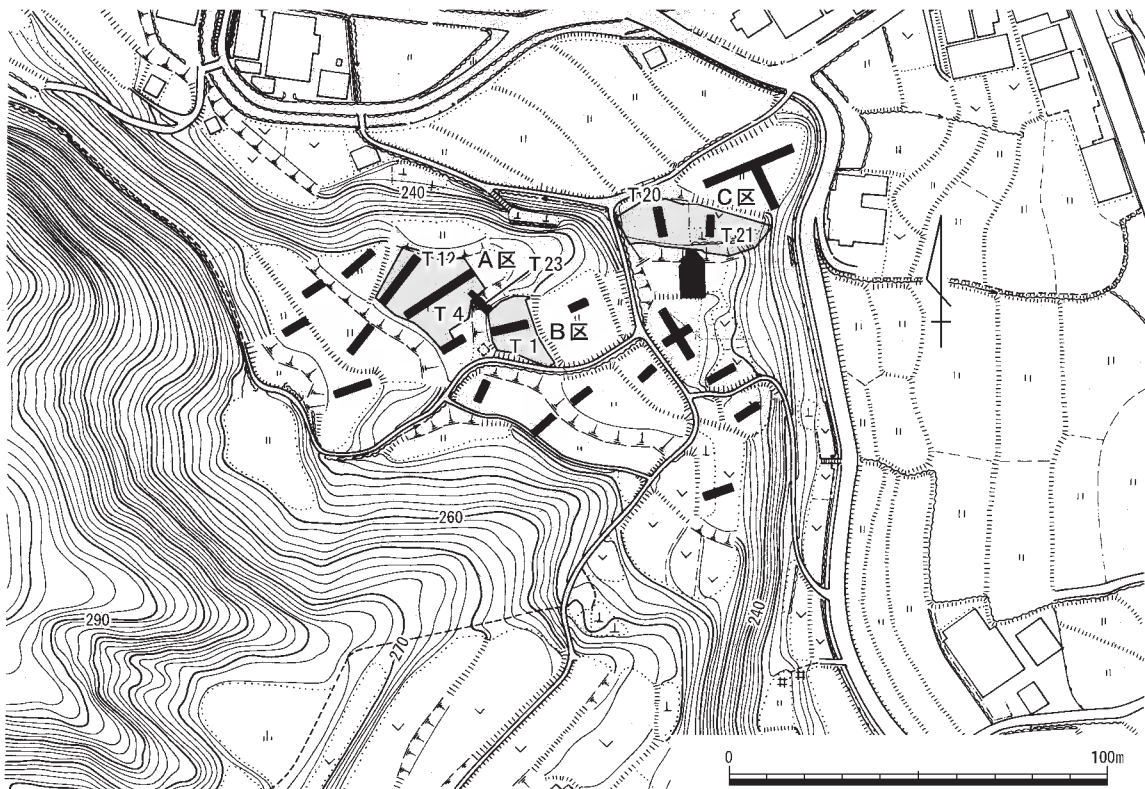
掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M 1	2区土壇3	Ⅲ区No. 9土壇	釘	(59.0)	9.5	7.5	5.78	鉄	近世	
M 2	2区土壇4・5	Ⅲ区No. 5土壇	釘	(86.0)	12.0	9.0	35.95	鉄	近世	
M 3	2区土壇4・5	Ⅲ区No. 5土壇	銭貨(寛永通寶)	20.5	23.2	1.05	1.65	銅	近世	
M 4	2区土壇6	Ⅲ区No. 6土壇	懸?	(3.75)	8.0	4.0	3.86	鉄	近世	
M 5	T 13	T 13近現代埋土	雁首	42.5	11.5	10.5	6.40	銅	近世	近現代の造成土中より出土。
M 6	T 13	T 13近現代埋土	吸口	58.0	12.0	7.5	3.12	銅	近世	近現代の造成土中より出土。
M 7	2区	Ⅲ区p 7	釘	(80.0)	4.5	4.5	6.72	鉄	近世	
M 8	3区	02年度pit12	釘	(68.0)	5.0	3.0	4.87	鉄	近世	
M 9	3区	02年度pit21	釘	(72.5)	6.5	6.5	9.88	鉄	近世	
M 10	3区	02年度pit 5	釘	(52.0)	5.0	9.5	4.76	鉄	近世	
M 11	3区	02年度pit17	釘	111.0	15.0	12.5	20.02	鉄	近世	
M 12	3区	02年度No. 9土壇	円環状鉄器	24.5	23.5	6.5	4.55	鉄	近世	
M 13	3区	02年度No. 12土壇	円環状鉄器	32.0	25.0	7.0	6.24	鉄	近世	
M 14	3区	02年度No. 12土壇	円環状鉄器	34.0	28.0	10.0	11.72	鉄	近世	
M 15	1区	Ⅱ区鉄滓溜り	銹鉄	173.0	42.0	27.5	398.70	鉄	近世	製鉄炉から最初に流れた銹鉄か。
M 16	3区	02年度pit	銭貨(寛永通寶)	25.5	25.4	1.62	3.00	銅	近世	
M 17	3区	02年度pit 1	銭貨(寛永通寶)	25.2	25.3	1.65	2.85	銅	近世	

第5章 かなぼれB遺跡

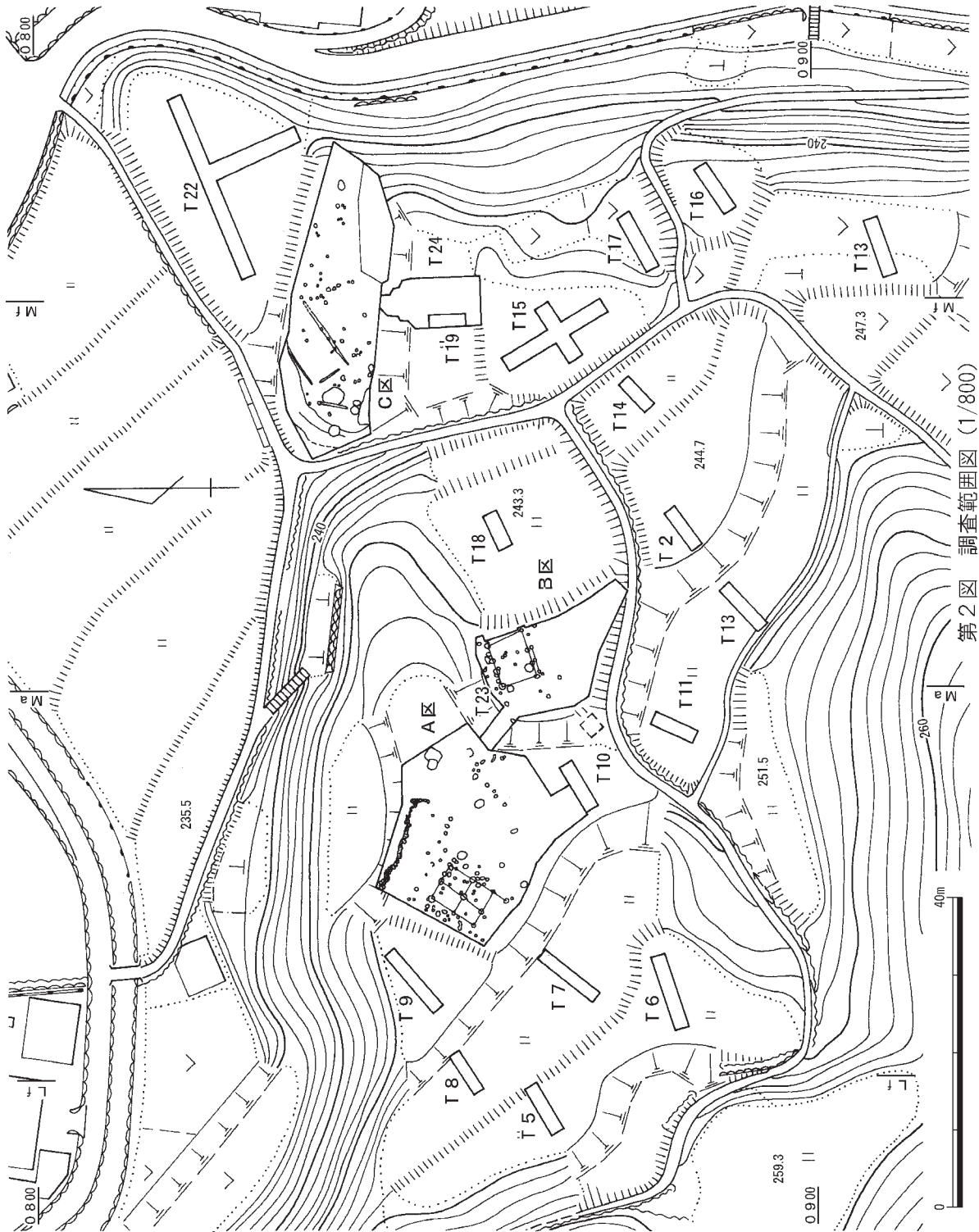
第1節 遺跡の位置と調査の概要

かなぼれB遺跡は吉井川の西岸で、その支流の箱川との合流地点を望む尾根上に立地する。この尾根は北に向かって緩やかに延び、箱川へと続いている。尾根上には現在はすきまなく水田が開墾されている。眺望は良く、北に西屋集落を望み、旧箱川の村落が北から西に見渡たせる。平成6年の分布調査で切り通しになった道の法面などから鉄滓が拾われたことから、製鉄関連の遺跡として認識された。尾根を越えた南には、鎌倉時代創建とされる古刹の明徳山上野寺がある。境内には縄文時代早期から後期の土器が出土した上野寺遺跡があり、寺の裏山からかなぼれB遺跡のある丘陵へ向けては鉄穴流しの跡が良好な状態で残っている。

ここに箱川付け替えのための水路が通ることになり、その範囲内を調査する必要が生じた。工事範囲内の遺跡の広がりを目指すため、まず第一次調査としてT1～T13のトレンチを設定した。さらに、当初の路線外ではあるが工事の及ぶ可能性があるとしてT14～T22の調査を追加した。これらを掘り下げてみると、ほとんどの地点で水田に伴う近世～近代の造成土が確認できた。T7のように造成上の下部に僅かな包含層が見られる地点もあったが、近代の水田のために切り盛りして平坦面を造成しているため、近世以前の地形が残っていない場合がほとんどであった。たとえば、遺構の存在が



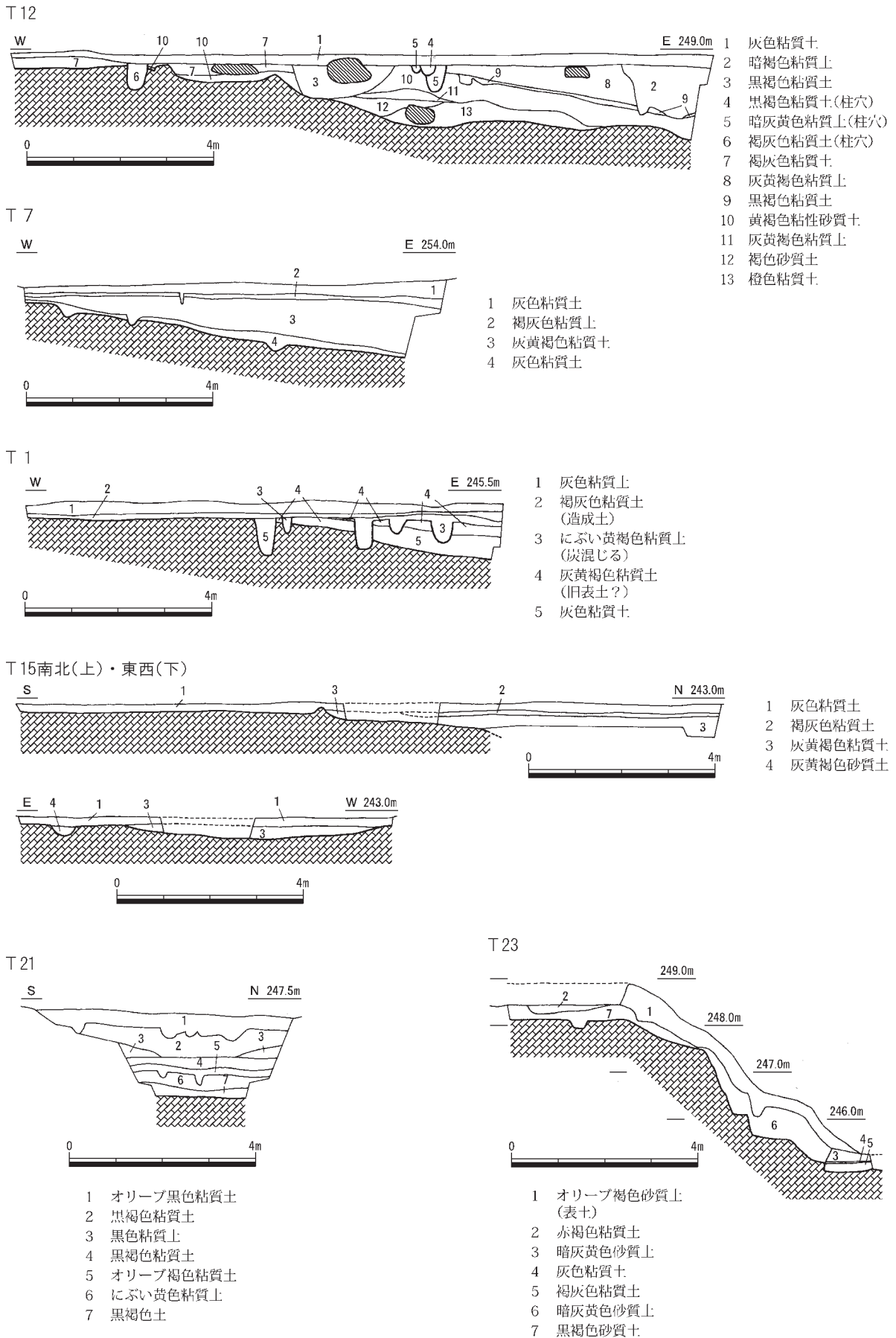
第1図 調査位置図 (1/2,000) ■第一次調査範囲



予想されたT15では、現水田層直下は第3層の1m近い礫を含む自然層がむき出しで、遺構は残っていなかった。T22は現水田層直下で岩盤となり、T13は墓地で攪乱を受けていた。

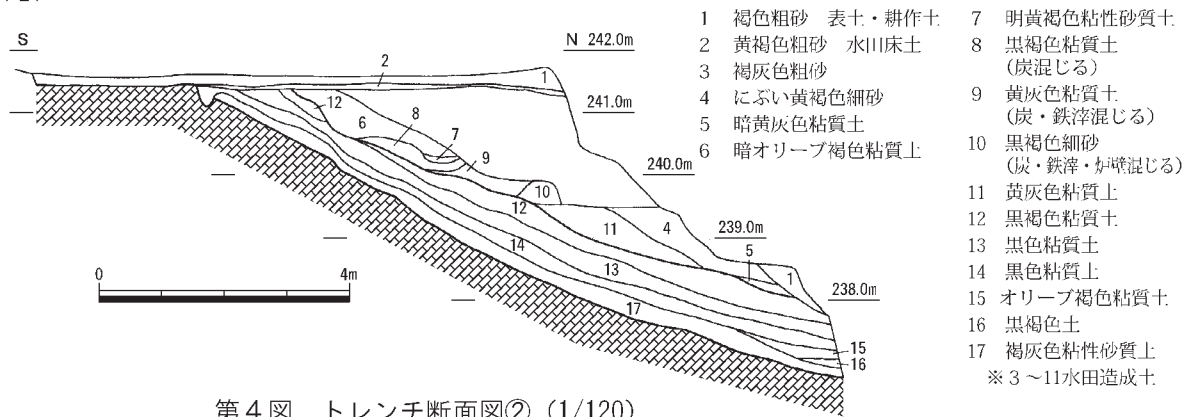
こうした中、T1・T4では造成面の上で柱穴が、T20でも遺構が認められ、T21では近世以外にも縄文土器・土師器が確認され遺構の存在が予想された。そこでT1・T4・T21を設定した平坦面をそれぞれA・B・C区として全面調査を行った。

T23はA・B区の関係を追求するため、A・B区間斜面に設定した。斜面が掘削された後B区の造

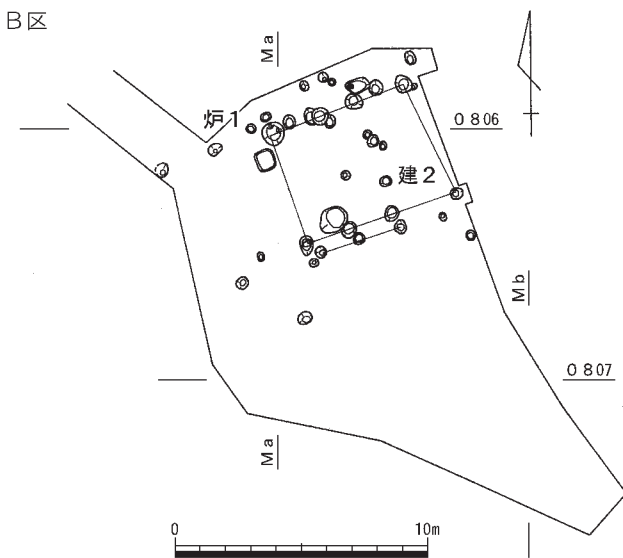


第3図 トレンチ断面図① (1/120)

T 24



第4図 トレンチ断面図② (1/120)



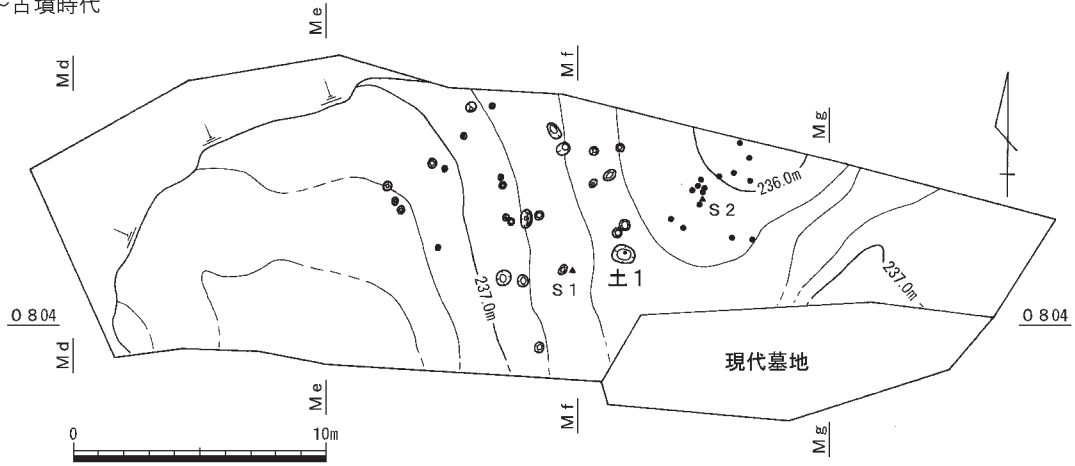
第5図 A・B区遺構配置図 (1/300)

成が行われたことが判明した。

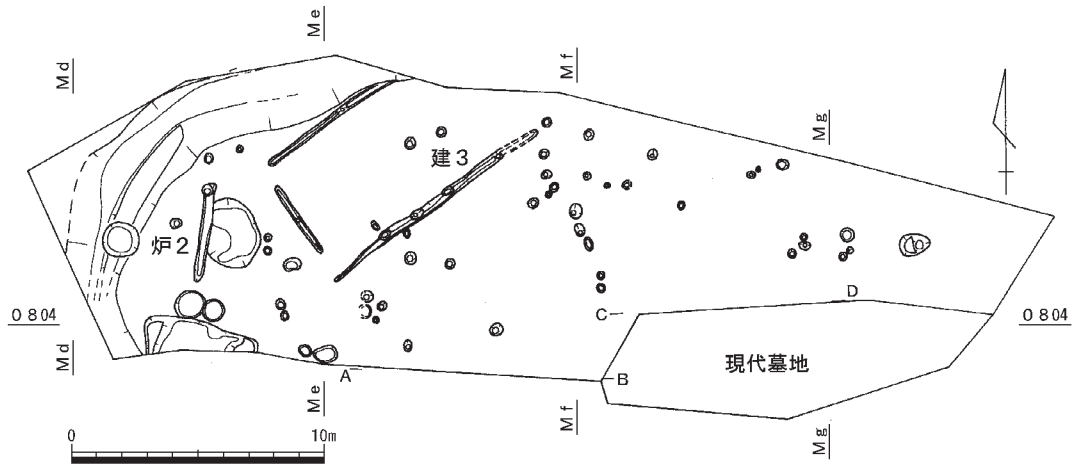
T 24はC区とT 19・T 21で鉄滓堆積が認められたことから、C区との関連を追及するため設定した。水田造成土中に鉄滓・炉壁の堆積があったが、その下は自然堆積であった。自然堆積層からは縄文土器は確認できなかった。また、遺構の存在が予想されたT 18では、造成土の下に急激な落ち込みが見られた。この落ち込みはB区東端から始まり、東へ向かう鉄穴流し跡と想定した。鉄穴流し跡は、C区西端の農道に接する部分とC区北側にも存在した。

たたら本体である高殿の存在を示す証拠は、第一次調査・全面調査を通じて確認できなかった。あえて挙げれば、C区およびT 19・21・24の鉄滓堆積からT 15周辺に高殿があった可能性がある。しかし、出土鉄滓の大きさは20cmまでであり、堆積も二次的で、C区とT 24で確認した鉄滓が整理箱7箱程度と短期間の操業にしてもあまりにも鉄滓の数が少なすぎる。鉄穴流しによる大幅な地形変化があったとしても、高殿が位置したとは想定しにくい状況である。(氏平)

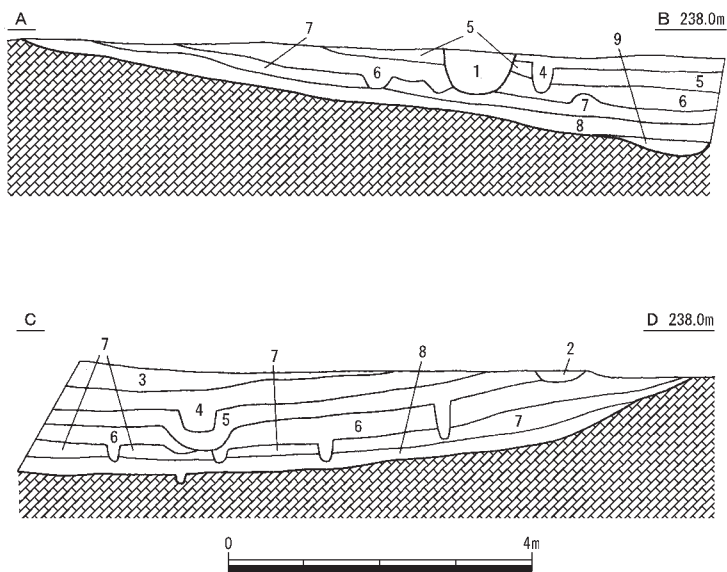
縄文～古墳時代



近世



第6図 C区縄文～古墳時代・近世遺構配置図 (1/300)



第7図 C区東西断面図 (1/100)

第2節 縄文～古墳時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、C区に土壇1基が確認できたのみである。第6図上段の遺構はほとんど弥生時代後期～古墳時代前期の可能性が高い。地形測量図で示したのはT21の第6層上面（地山類似のにぶい褐色土層）であるが、中央が低い窪地になっている。古墳時代までの遺物は、一部を除いてほとんどがC区からの出土である。

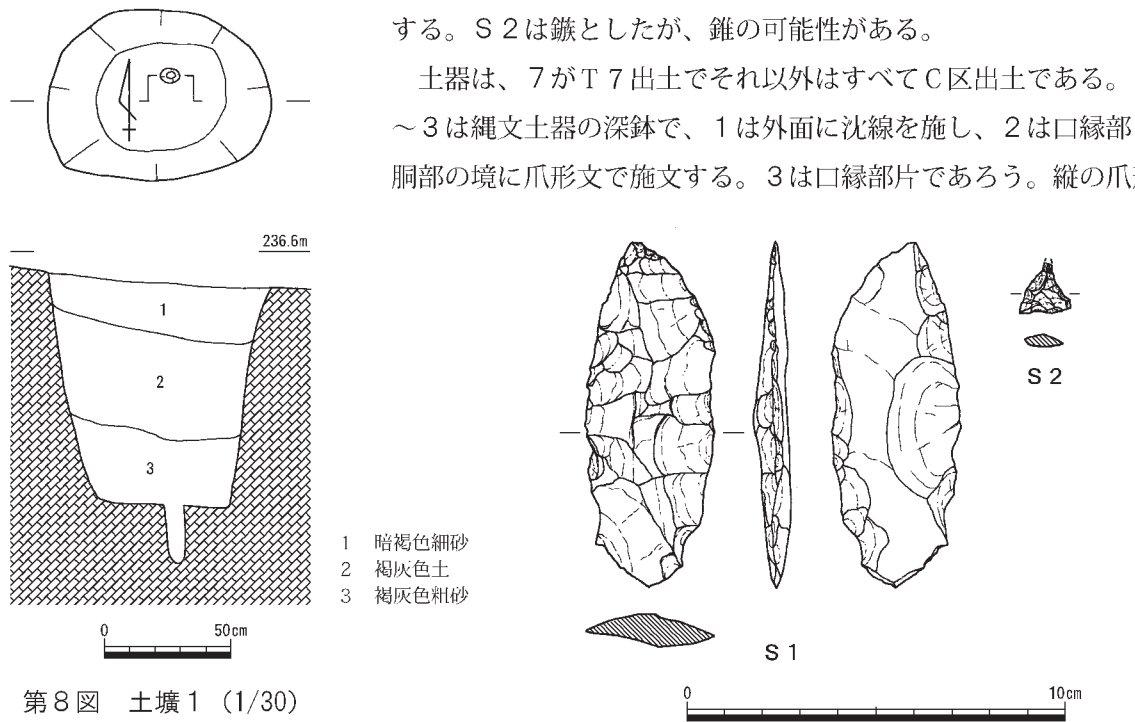
土壇1（第8図、図版8）

C区中央部で検出した、平面楕円形の土壇である。長径88cm、短径68cm、深さ88cmを測る。底面に直径8cm、深さ22cmの穴が1つ開いている。出土遺物はない。形状から、落とし穴であろう。

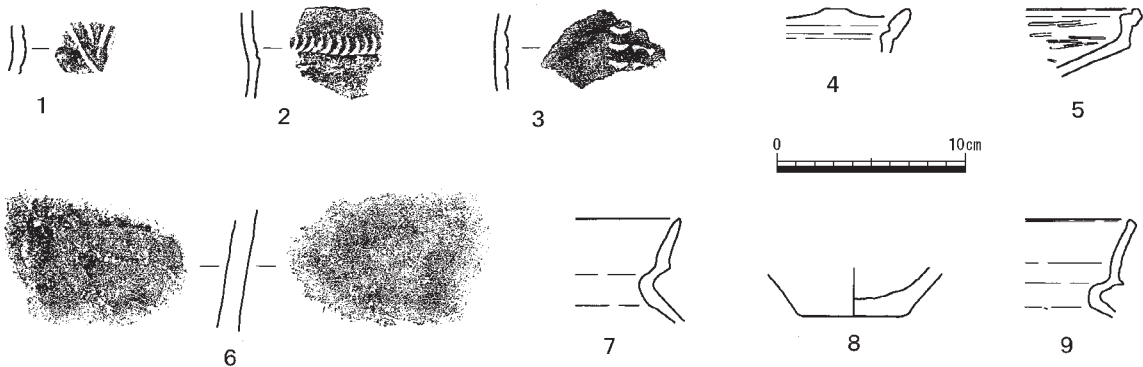
縄文～古墳時代の遺物（第9図、図版10）

S1はC区第6図上段中央の▲の位置で出土した。出土層位はT21の第4層で、標高は236.78mである。尖頭器で、剥離が大きいことと形状から旧石器時代末に属する。S2は鏃としたが、錐の可能性もある。

土器は、7がT7出土でそれ以外はすべてC区出土である。1～3は縄文土器の深鉢で、1は外面に沈線を施し、2は口縁部と胴部の境に爪形文で施文する。3は口縁部片であろう。縦の爪形



第8図 土壇1 (1/30)



第9図 縄文～古墳時代の遺物 (1/4, 1/2)

文が確認できる。これらの特徴は、縄文晩期中葉の「谷尻式」に相当する。4・5は縄文晩期の浅鉢口縁である。6は胎土が荒くもろい土器で、内外面をナデで調整しているが文様はない。第6図上段の●から同一個体が出土している。1～5より下層から出土したものだが、時期は不明である。

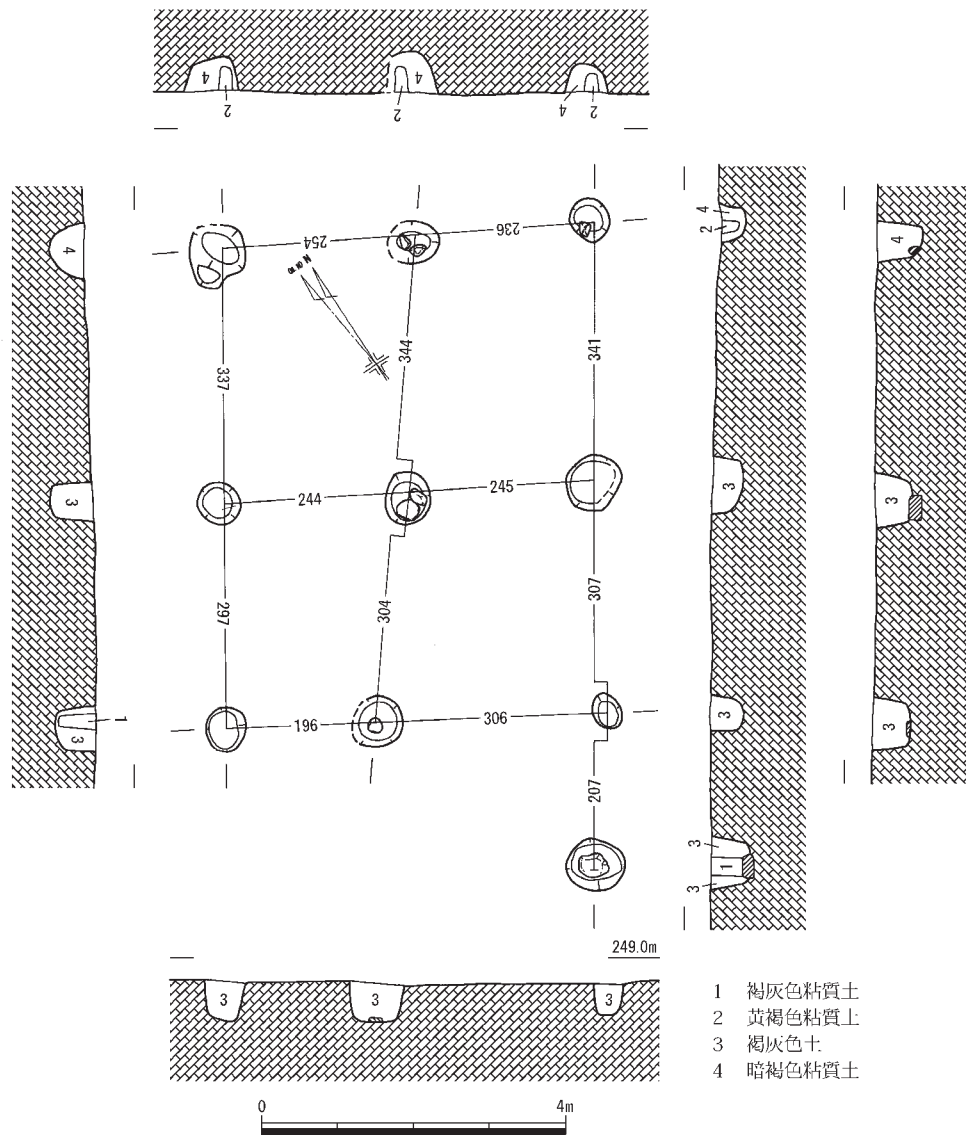
7は弥生時代後期の甕、8は同じく後期の甕底部で9は土師器の甕である。 (氏平)

第3節 中・近世の遺構と遺物

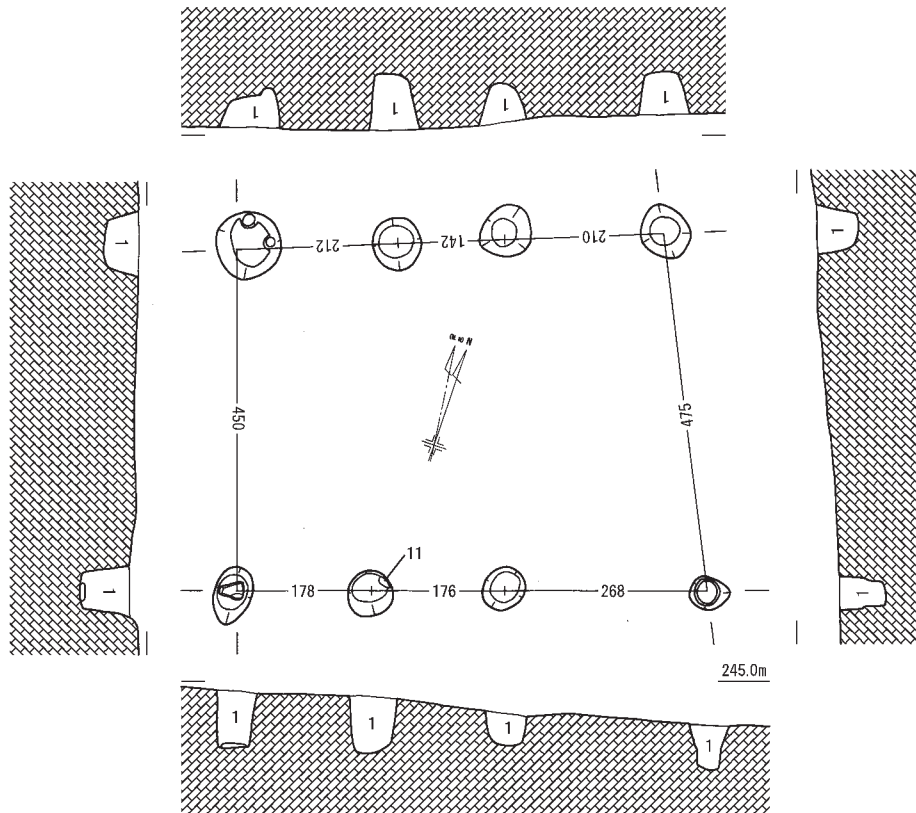
A区では掘立柱建物1棟・石垣と土壇、B区では掘立柱建物1棟・柱穴列1列・炉1基と土壇、C区では掘立柱建物1棟・炉1基と土壇を確認した。A区の石垣は裏籠めもほとんどなく、前面は腹がせり出した状態で埋められていた。現代水田の法面と平行し、調査区中央部で南へわずかに曲がり切れている。B区の柱穴列は掘立柱建物2と並行する形で存在した。 (氏平)

掘立柱建物1 (第10図、図版9)

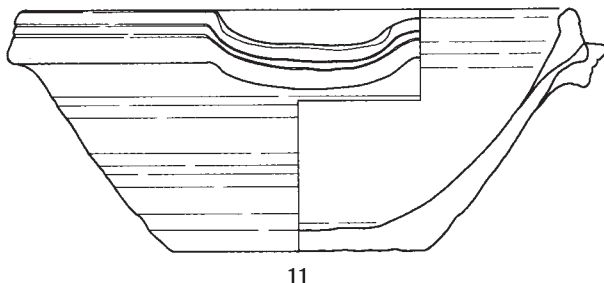
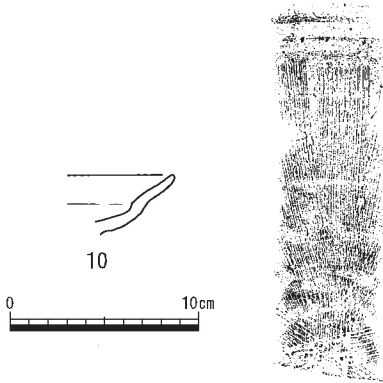
建物1はA区の西側に位置する2×2間の掘立柱建物である。南側へ他の柱穴と同様の規模の柱穴が1個存在し、そちらへ1間延びる可能性がある。また、西側に庇を持つ可能性が指摘できる。北側・東側については、柱穴は存在するがこの建物との関連は不明である。梁行は502cm、桁行は648cmで棟方向はN-37°-E、面積は31.3㎡を測る。出土遺物は見られなかった。遺構の時期は、近世の後半である



第10図 掘立柱建物1 (1/100)



1 にぶい黄褐色粘質土
(炭含む)



第11図 掘立柱建物2・出土遺物 (1/100, 1/4)

熱影響が見られる。埋土は2層に分かれ、下層が炭を多く含む炉床の残り、上層が使用後に堆積した土である。掘り方内部を炭で充填して炉の下部構造としたもので、使用後の様子をよく残している。遺物は見られなかったが、近世の小鍛冶炉と言えよう。

うか。(氏平)

掘立柱建物2
(第11図、図版10)

B区の西側に位置する1×3間の掘立柱建物である。梁行は最大475cm、桁行最大622cmで棟方向はN-78°-E、面積は27.4㎡を測る。出土遺物は10の陶器皿片、11の播鉢がある。11はこの調査区の造成土出土の破片と、接合している。遺構の時期は、掘立柱建物1と同様近世の後半にあたる。(氏平)

掘立柱建物3 (第12図)

C区中央やや西よりに位置する。東西996cm、南北548cmの範囲で、幅最大40cm、深さ最大51cmの溝が四方に掘削されている。溝中には何か所か窪みが確認できる。溝内の窪みに柱を立て、壁で囲んだ大壁建物を想定した。出土遺物は12の備前焼小壺、13の陶器碗である。12には口縁にゆがみがあるので、片口の可能性がある。また、埋土には鉄滓を含んでいる。遺構の時期は、近世である。(氏平)

炉1 (第13図)

B区建物2の東に近接する。掘り方は35×34cmの円形で、深さは17cmが残っていた。壁に板状の鉄滓が付着し、その周りに

炉2 (第14図)

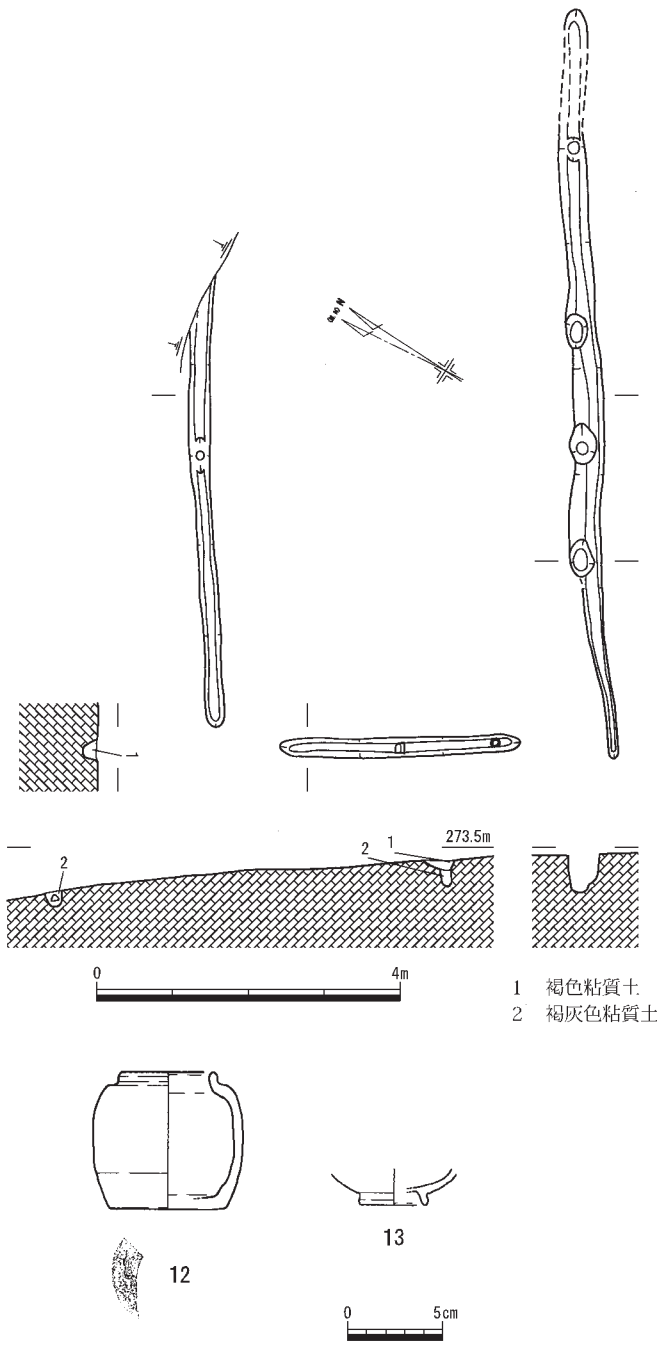
C区西側に位置する。掘り方は370×40cmの長楕円形で、深さは17cmを測る。北側底面に炭の広がりがあり、中央部の壁面を中心に弱い熱影響部分が認められる。断面は筒状で、底面は比較的平坦である。遺物には14の染付皿底部がある。遺構の時期は、周辺の状況から近世の後半代としたい。なお、類似遺構として勝央町国司尾遺跡で出土例があり、調査者は桶用の火葬場を想定している⁽¹⁾。(氏平)

土壇2 (第15図、図版9)

A区北東端に位置し、掘り方は203×179cmの長方形で、深さは最大64cmを測る。掘り方内からは10～60cm大の礫が折り重なって出土した。断面図に示したように、掘り方の底面に接しているものは少

ない。礫の間やその下から鉄釘が出土した。その数約34本で、形状・大きさではM1のような大形品はほとんどなく、M2～M4の中形が多く、さらに小形のものも存在した可能性もある。木質が遺存しているものも見られるので、釘で固定した木製箱が礫の下に存在したと言える。釘の出土範囲から、木製箱の規模はほぼ礫の範囲に一致する。釘以外には、図示できなかったが煙管の雁首が1点存在した。

礫が上部に位置し、その下に木製箱が納められていたことからこの遺構は墓ではないかと考えて調査したが、骨が認められなかったことで墓である可能性は低いのではないだろうか。時期は近世であろう。(氏平)

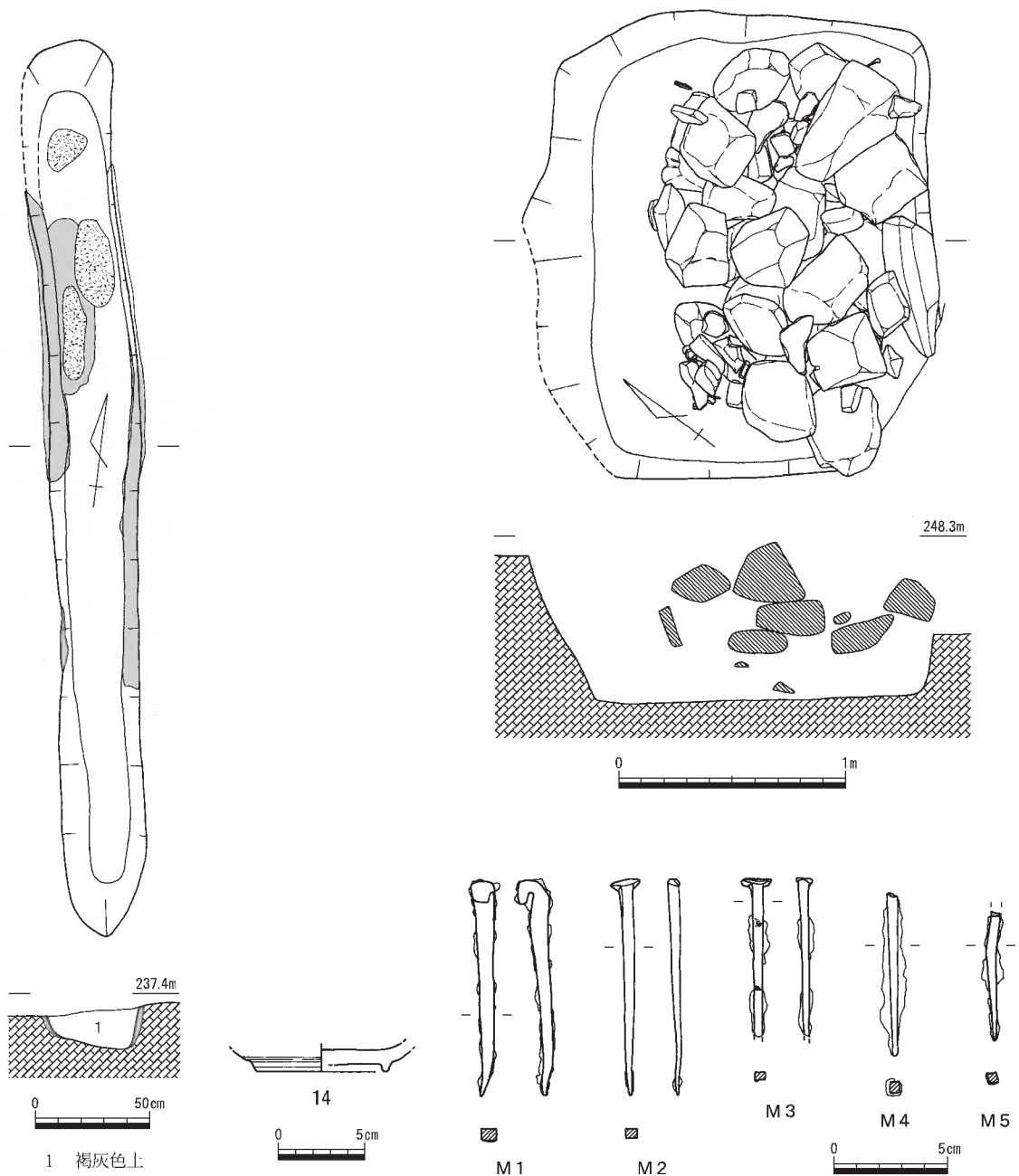


第12図 掘立柱建物3・出土遺物 (1/100, 1/4)

第13図 炉1 (1/20)

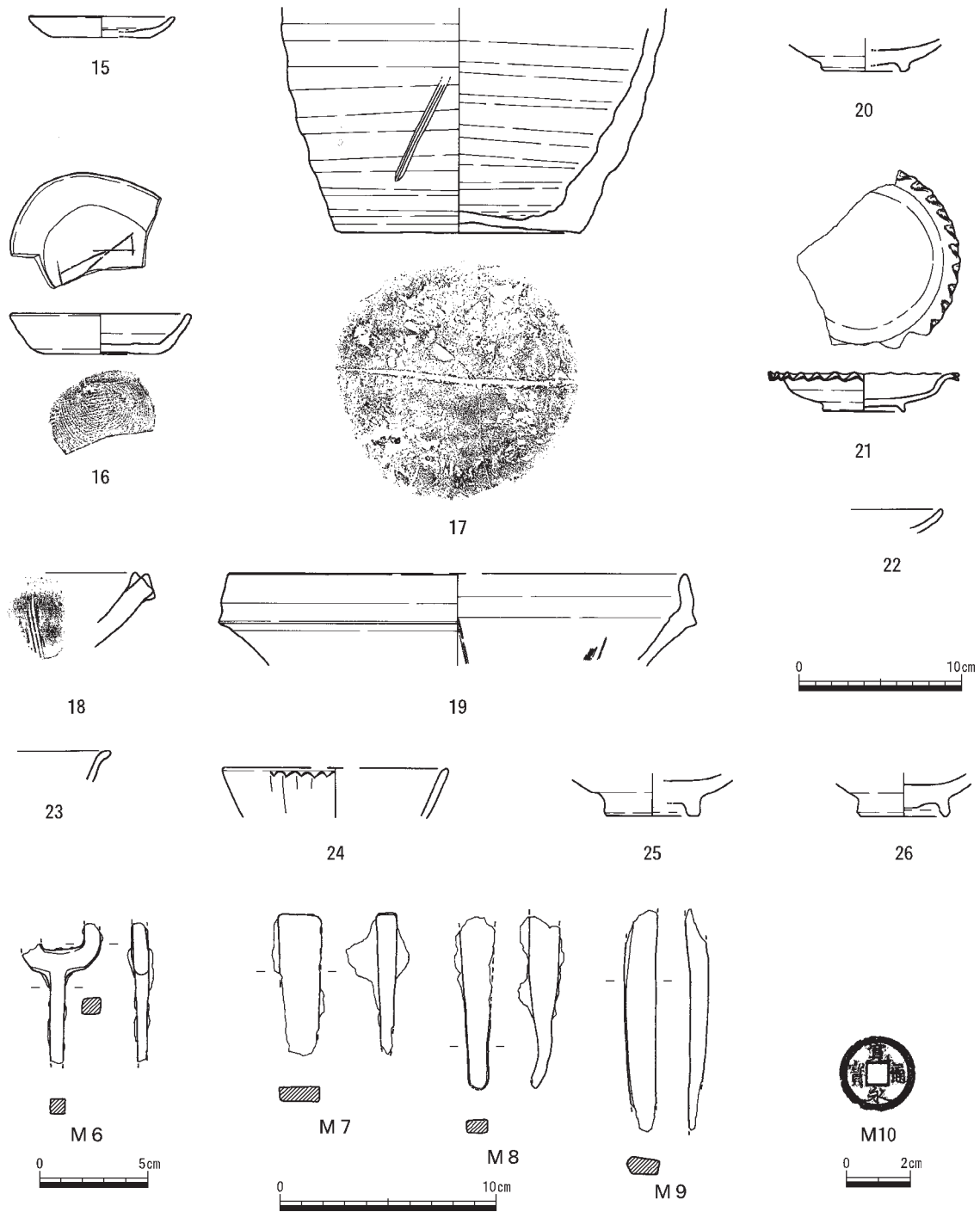
柱穴・包含層出土遺物（第16図、図版10）

中～近世の遺物の量は第一次調査とA・B・C区合計で整理箱にして5箱程度で、あまり多くない。中世にあたるのは18・19の備前播鉢、23～26の龍泉窯系青磁碗である。18はT12出土でⅢ期後半（14世紀代後半）、19はA区の柱穴出土でⅣ期後半（15世紀代後半）に位置づけられる。青磁は15世紀代であろう。残りは近世である。16は内面に線刻を持つ備前焼の皿である。17の備前焼壺は胴部外面と底面に線刻がある。20は肥前陶器で内面に砂目積みの痕跡を残す17世紀前半の製品である。21は軟質の素地を持つ波状口縁が特徴の皿で、鑑定によると18世紀後半の美濃産である。鉄器はM6がT9近世包含層出土の雁股鍬で、先端と基部を欠損する。M7～M9が鋳で、楔状のM7、先端が曲がるM8、全体に湾曲しているM9と変化に富んでいる。（氏平）



第14図 炉2・出土遺物（1/30, 1/4）

第15図 土坑2・出土遺物（1/30, 1/3）



第16図 柱穴・包含層出土遺物 (1/4, 1/3, 1/2)

第4節 まとめ

かなぼれB遺跡では、旧石器時代・縄文時代晩期・弥生時代後期・古墳時代前期に断続的な遺物の散布が見られる。これらの時期には短期間で限られた範囲の生活が営まれた。中世のかなぼれB遺跡は、出土遺物は少ないが集落の存在は間違いなく、輸入青磁を持つことから久田地区を中心とする村落の分村と位置づけていい。近世になり、かなぼれB遺跡の基盤層が良質な真砂であったことから、格好の砂鉄採集場所となった。箱川から水路を引き、盛大な鉄穴流しが行われ地形を一変させた。こ

の時に中世以前の遺構の大半が消失したはずである。今回調査のC区は谷部だったためその破壊から免れたのであろう。ところが、上斎原～奥津の鉄穴流しは下流への土砂災害を理由に文化3(1806)年いったん中止される。その後上斎原などでは再開されるが、箱村の鉄穴流しはこの時点で幕を下ろした。鉄穴流しの跡は切り盛りされ、屋敷地や水田に変貌し現在に至ったのであろう。(氏平)

註

(1) 團 正雄「国司遺跡」『勝央町文化財調査報告5』勝央町教育委員会 2002

表11 土器観察表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	備考
					口径	底径	器高		
1	C区東側 オリーブ黒色粘質土	C区東側1層オリーブ黒色粘質土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	外面-沈線。内面-ナデ。
2	C区 黒色土	C区3層黒色土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	外面-一枚貝殻条痕後ナデ。内面-ナデ。
3	C区 黒色土	C区3層黒色土	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	外面-ナデ。内面-ナデ。
4	T21 黒褐色粘質土	T21黒褐色粘質土	縄文土器	浅鉢	—	—	—	オリーブ黒色(5Y3/1)	外面-ヘラミガキ。内面-ヘラミガキ、ヘラケズリ。
5	C区 黒色土	C区3層黒色土 包含層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	黒褐色(10YR3/1)	内・外面-ヘラミガキ。
6	C区	C区4層No2土器	縄文土器	深鉢	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	内・外面-調整不明。
7	T7	T7黒褐色包含層	弥生土器	甕	—	—	—	褐色(7.5YR7/6)	外面-ハケメ・ヨコナデ。内面-ヨコナデ・ヘラケズリ。
8	C区 北西斜面	C区北西斜面近世包含層	弥生土器	甕	—	5.8	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	内・外面-ナデ。
9	C区 黒褐色粘質土	C区2層黒褐色粘質土	土師器	甕	—	—	—	にぶい黄褐色(10YR7/4)	外面-ヨコナデ。内面-ヨコナデ・ヘラケズリ。
10	B区 建物2	No.7建物	陶器	皿	—	—	—	灰オリーブ色(5Y6/2)	肥前陶器か。
11	B区 建物2	B区No.7建物P.8	備前焼	播鉢	(28.8)	(13.4)	12.8	にぶい赤褐色(2.5Y4/4)	内面-卸し目1条12本2.6cm幅。
12	C区 建物3	C区No.1建物	備前焼	小壺	(4.8)	(6.2)	7.2	にぶい赤褐色(5Y4/4)	外面-底面に窯記号。口縁歪みあり。
13	C区 建物3	C区No.1建物	陶器	椀	—	(3.45)	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	
14	C区 炉2	C区No.4炉状遺構	染付	皿	—	7.4	—	暗オリーブ灰色(2.5Y7/1)	外面-図線3条。内面-図線2条。
15	A区 柱穴	A区P.8	土師器	皿	(8.8)	(6.0)	(1.3)	灰白色(10YR8/2)	外面-底面ヘラ切り後ナデ。
16	A区 柱穴	A区pit.2	備前焼?	皿	(10.8)	6.8	2.5	灰褐色(2.5YR4/2)	外面-底面糸切り。内面-ヘラ記号、自然釉。
17	C区	C区No.6-2	備前焼	壺	—	15.0	—	暗赤褐色(5YR3/2)	外面-胴部・底面ヘラ記号。
18	T.12	T.12造成土	備前焼	播鉢	—	—	—	褐色(5YR6/6)	内面-卸し目単位不明。
19	A区 柱穴	A区P.9	備前焼	播鉢	(28.0)	—	—	褐灰色(5YR4/1)	内面-卸し目単位不明。
20	A区	A区石列東側包含層	陶器	皿	—	5.45	—	にぶい褐色(7.5YR6/4)	内面-砂目2つ残る。肥前陶器。
21	C区	C区No.7土壌	陶器	皿	(11.8)	4.8	2.4	オリーブ黄色(5Y6/3)	産地不明。波状口縁。焼成不良の素地。
22	A区 柱穴	A区pit.6	陶器	皿	—	—	—	暗オリーブ色(7.5Y4/3)	
23	A区	A区水田床上掘り下り中	青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(10Y5/2)	
24	A区	A区水田床土掘り下り中	青磁	碗	(13.6)	—	—	灰オリーブ色(7.5Y5/2)	外面-蓮弁文
25	A区	A区水田床土掘り下り中	青磁	碗	—	(5.7)	—	灰オリーブ色(7.5Y4/2)	外面-高台内側無釉。
26	A区	A区水田床土掘り下り中	青磁	碗	—	5.3	—	緑灰色(7.5GY6/1)	外面-高台内側中央のみ無釉。

表12 石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
S.1	C区	C区4層黒褐色粘質土	尖頭器	91.0	33.5	10.0	23.41	サヌカイト	旧石器時代	風化著しい。
S.2	C区	C区検出中	石鏃	13.5	13.0	3.3	0.45	サヌカイト	縄文時代	先端を欠損。錐か?

表13 金属器一覧表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M.1	A区土壌2	A区No.1土壌墓No.8	釘	94.5	14.0	13.5	10.89	鉄	近世	完形品。
M.2	A区土壌2	A区No.1土壌墓No.15	釘	115.2	13.5	4.5	8.08	鉄	近世	完形品。
M.3	A区土壌2	A区No.1土壌墓No.5	釘	(79.5)	13.0	7.0	5.79	鉄	近世	先端欠損。
M.4	A区土壌2	A区No.1土壌墓	釘	(81.5)	4.5	4.5	8.16	鉄	近世	頭欠損。
M.5	A区土壌2	A区No.1土壌墓	釘	(57.0)	4.5	4.5	3.13	鉄	近世	頭欠損。
M.6	T.9	T.9	鏝	(65.0)	(34.5)	7.0	12.30	鉄	近世	先端欠損。
M.7	T.4	T.4	鏝	(66.0)	20.0	9.5	36.35	鉄	近世	ほぼ完形。
M.8	T.5	T.5	鏝	(79.0)	(15.0)	(14.0)	32.28	鉄	近世	
M.9	T.1	T.1	鏝	(102.0)	15.5	9.0	42.48	鉄	近世	基部・先端欠損。
M.10	C区柱穴	C区pit.1	銭貨	23.61	23.69	13.1	2.71	銅	近世	寛永通寶。

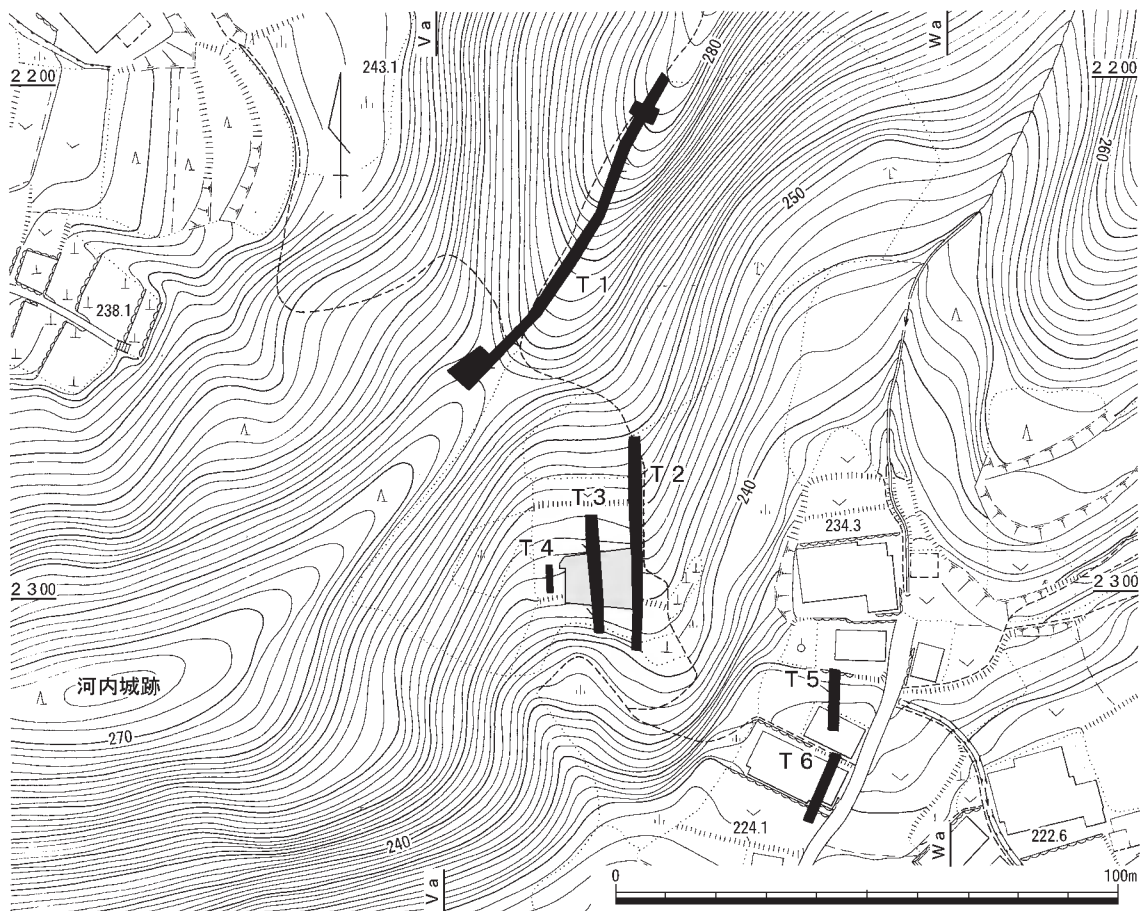
第6章 丸ヶ吷遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

丸ヶ吷遺跡は苦田郡奥津町河内に所在する。14世紀後半の築造と考えられている河内城跡へと延びる尾根の南側緩斜面において、昭和38年に磨製石包丁が採取されたことにより散布地とされた。磨製石包丁が採取された地点は、河内城跡へと延びる尾根西側の比較的緩やかな斜面である。

調査はこの河内城跡へと延びる尾根に長大なT1と尾根の南側緩斜面にT2を設定して遺跡の存在を確認することから始めた。T1では焼成土壘1基と土壘1基を確認したが、尾根が非常に狭くそのほぼ全域に対してT1を設定したことからそれ以上の遺構は存在していないと判断された。そのため焼成土壘や土壘の全体を検出するのにトレンチの先端を拡張したのみで、調査区の設定は行わなかった。

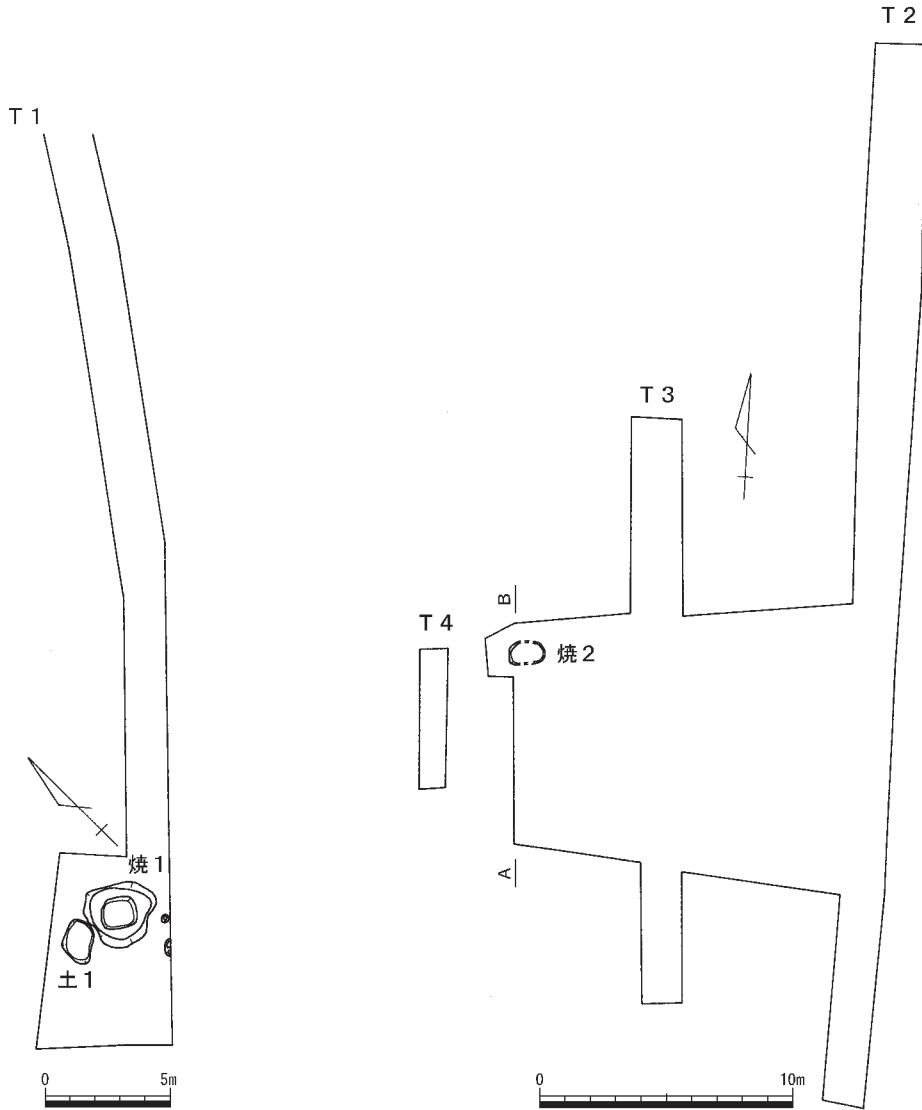
T2では包含層中から中世の土師器などが出土したことから包含層の広がりを確認する目的で西側にT3・4を設定した。T3では中世の土師器などを含む包含層〈第5層〉と弥生土器を含む包含層〈第11層〉を確認することができたが、T4ではそのいずれも確認することができなかった。そこで



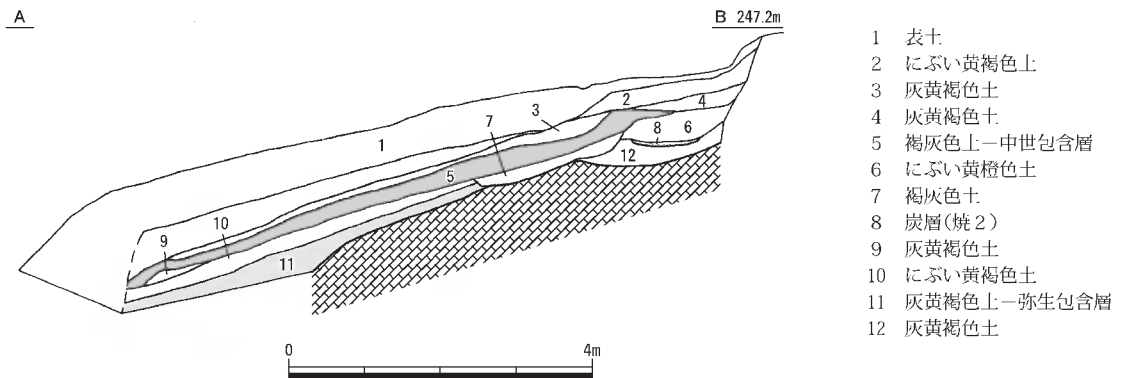
第1図 調査位置図 (1/1,500) ■第一次調査範囲

T 2・3の間およびT 3の西側の傾斜が緩やかな範囲に調査区を設定、調査を行った。結果、焼成土壙1基と弥生土器、土師器、勝間田焼・寛永通寶などの遺物が見つかった。なお、焼成土壙は中世包含層より下層で検出した。

また、この緩斜面の裾部にT 5・6を設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(上柵)



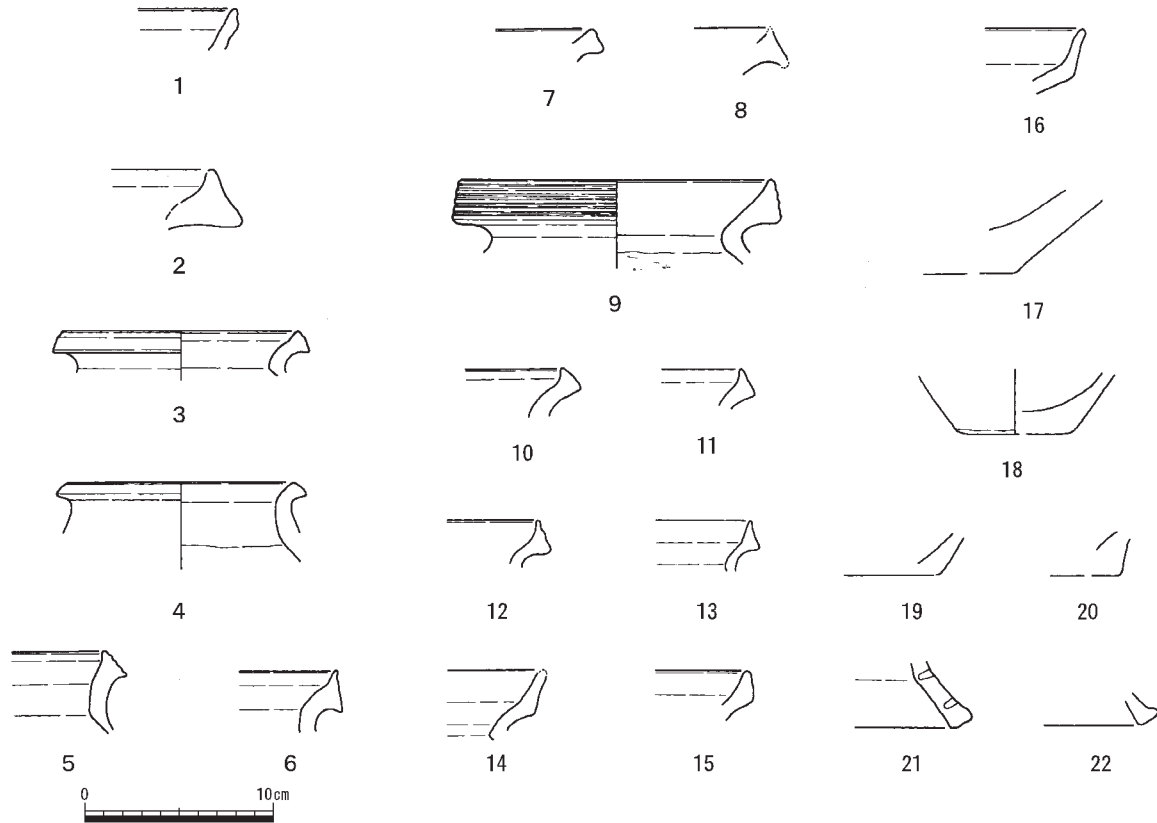
第2図 T 1・T 2～4 と全面調査区遺構全体図 (1/300)



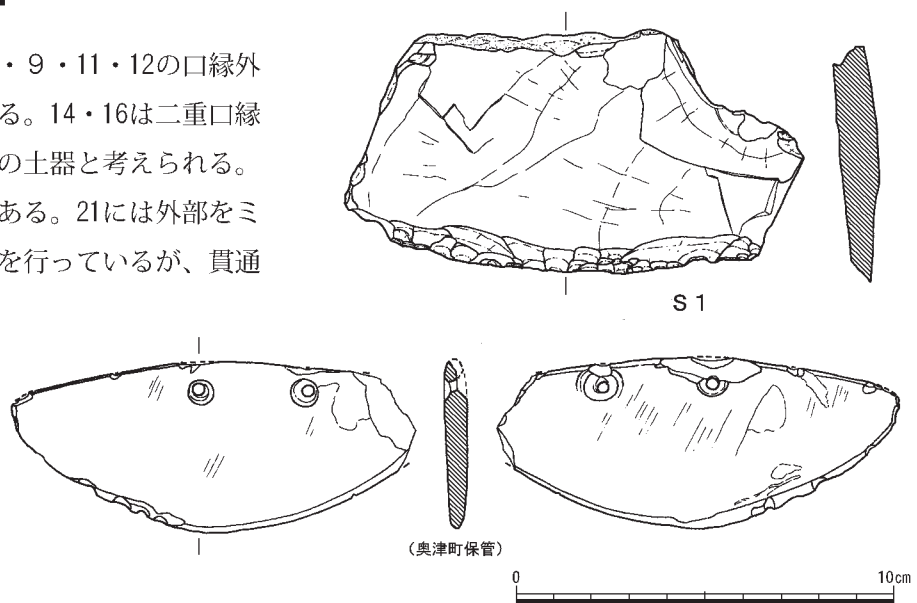
第3図 全面調査区断面図 (1/100)

第2節 縄文・弥生時代の遺物

調査区のほぼ中央部、T3を中心として縄文～弥生時代の遺物が出土している。弥生土器は主に第11層から出土している。1は縄文時代晩期の浅鉢の口縁である。2～22は弥生土器である。2は大形の壺の口縁である。内外面とも風化が著しいため調整については不明である。3～16は甕の口縁である。6の頸部には穿孔が認められるが、焼成後のものと思われる。4・5・9は体部内面をヘラケズ



りしている。また、5・9・11・12の口縁外面には凹線を施している。14・16は二重口縁となっており、山陰系の土器と考えられる。21・22は高杯の脚部である。21には外部をミガキを施した後に穿孔を行っているが、貫通させてはいない。孔は直径4mmを測る。外面はヘラミガキを行っており、内面はヘラケズリ調整である。弥生土器はいずれも後期の範疇に入る。14・16は後期後葉であり、それ以



第4図 縄文・弥生時代の遺物 (1/4, 1/3)

外は後期の前葉～中葉に属すると考えられる。S1は板状を呈する剥片の片側長側縁部を加工して製作したスクレイパーである。縄文時代の石器と考えられる。奥津町保管の石包丁は丸ヶ嶋遺跡の発見契機となった緑色片岩製の磨製石包丁である。刃部には光沢が認められる。(上柙)

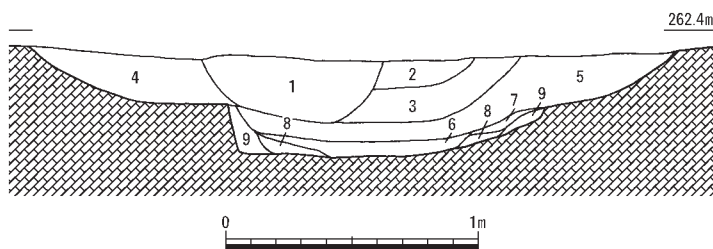
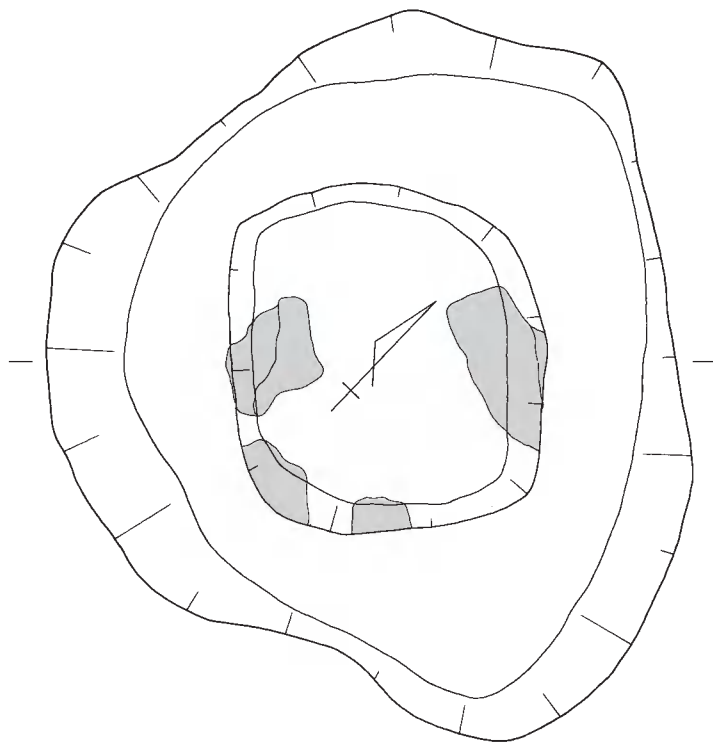
第3節 古代以降の遺構と遺物

焼成土壌1 (第5図、図版11)

T1の最低位部、河内城跡へと下る尾根が傾斜を変換させる地点に位置している。長さ295cm、幅250cm、深さ20cmの不整形土壌が埋まった後に、そのほぼ中央部に長さ140cm、幅115cmの長方形土壌を掘り込んでいた。長方形土壌は深さ40cmを測るが、上半部は削られていた。長方形土壌の壁体と底部の一部は被熱しており、赤変してわずかに硬くなっていた。ただし、その焼け方は非常に弱いものである。また、埋土には木炭片が多く含まれており、それらのことから長方形土壌では伏せ焼き法による小炭の生産が行われていた可能性が考えられた。なお、時期は出土遺物がないため不明である。(上柙)

焼成土壌2 (第6図)

調査区の西端部に位置している。長さ140cm、幅90～100cm、深さ10cmを測る長方形の土壌である。壁体はほぼ全体的に、底部は壁寄りの部分を中心に赤く変色していたが、焼け方は非常に弱い。内部には小さな木炭片が詰まっており、これらことから伏せ焼き法により小炭を生産していた可能性が考えられる。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、中世の遺物包含層より下層において掘り込まれていたため、それ以前に築かれた遺構と分かる。(上柙)



- 1 にぶい黄褐色土～褐灰色土
- 2 にぶい黄褐色土
- 3 灰黄褐色土
- 4 灰黄褐色土
- 5 褐灰色土
- 6 黒褐色土(炭混じり)
- 7 炭層
- 8 黒色土(硬化面)
- 9 暗赤褐色土(硬化面)

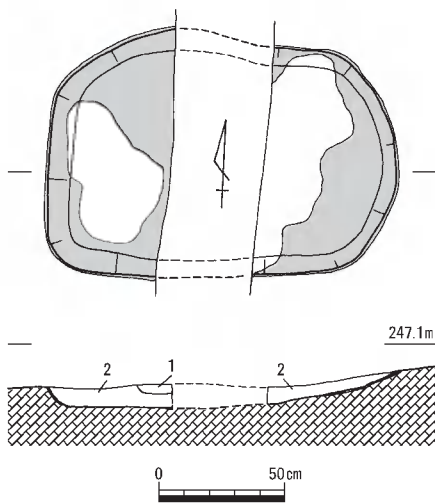
第5図 焼成土壌1 (1/30)

土壌1 (第7図)

焼成土壌1のすぐ西隣に接するように位置している。長さ160cm、幅110cm、深さ7cmを測る。平面形は不整形の土壌である。窪みが2か所重なったような状況であり、壁もはっきりと立ち上がっていない。また、遺物も出土していないことから、人工的なものというより自然の窪みと考えた方がいいだろう。時期は不明である。(上柵)

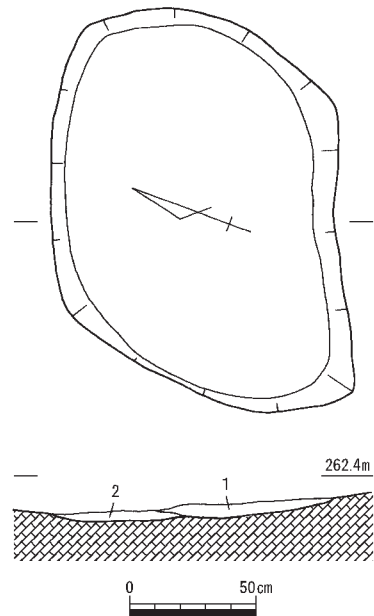
中世以降の遺物 (第8図、図版11)

調査区のほぼ中央部、T3を中心とした位置において中世以降の遺物が出土している。23~26は土師器である。23は杯で、底部は回転ヘラ切りである。体部は中ほどで屈曲している。25は直径7.1cm、高さ1.5cmの高台付椀の底部である。26は鍋である。口縁部内面は横位のハケメで、外面は縦位のハケメ調整を施している。27、28は勝間田焼の椀である。27は直径15cm、器高5.6cmを測り、そのことからおおよそ12世紀代に比定できよう。なお、底部は平高台状を呈しており、糸切りである。体部は灰白色であるが、口縁部は暗灰色になっており、積み重ねて焼成を行っていたことを示す。28は底部平高台状を呈する皿の底部と考えられる。M1、M2は寛永通寶である。(上柵)



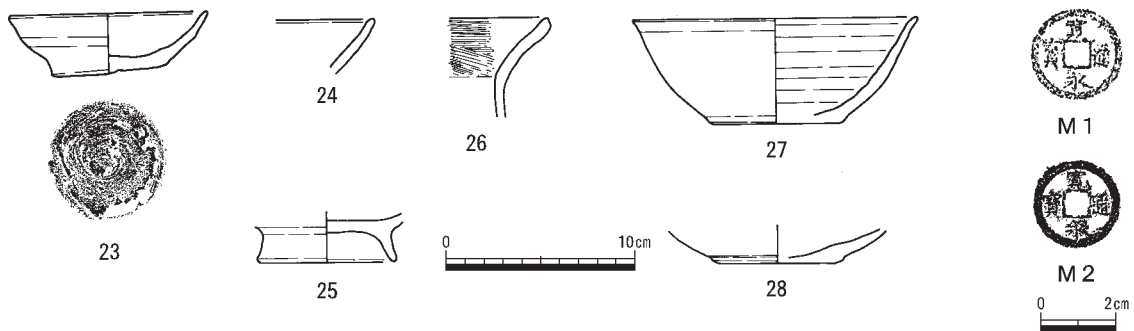
- 1 にぶい黄褐色土
- 2 炭屑

第6図 焼成土壌2 (1/30)



- 1 黒褐色土
- 2 にぶい黄褐色土

第7図 土壌1 (1/30)



第8図 古代以降の出土遺物 (1/4, 1/2)

第4節 まとめ

丸ヶ嶋遺跡では河内城跡へと延びる尾根とその南側緩斜面において遺構・遺物が見つかった。南側緩斜面では弥生時代の包含層を確認することができ、弥生土器が多く出土している。また、磨製石包丁も出土しており、弥生時代に居住域が形成された可能性も考えられた。しかし、遺構は確認できなかった。また、中世の遺物包含層も確認したが、確実にその時期として捉えられた遺構は見つからない。遺構としては焼成土壌が2基見ついている。いずれも焼け方は非常に弱く、壁体から壁寄りの底部が被熱して赤変していた。埋土は木炭混じりの土か木炭片であった。これらは焼成土壌において小炭の生産を行っていた可能性を示している。小炭は一般に「木炭」とされる大炭とは異なり窯を用いて生産しない。生産方法は土壌を掘り、細木や木の枝などを入れて火をつける。それらが燃え尽きる前に土を被せて消火させるというもので、伏せ焼き法と呼称されている。なお、河内城跡でも同様の遺構が見つかっており、¹⁴C年代測定により7世紀中頃との結果が得られている。（上柁）

表14 土器観察表

掲載番号	調査区・掲載遺構名	旧遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	特徴
					口径	底径	器高		
1	全面調査	T中2西拵6層及び10層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	褐灰色(10YR4/1)	
2	全面調査	トレンチ拡張部	弥生土器	壺	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	
3	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	12.4	—	—	にぶい橙色(10YR7/3)	
4	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	11.9	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	
5	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	
6	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	頸部焼成後穿孔か？
7	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	
8	全面調査	トレンチ拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい橙色(10YR7/3)	
9	全面調査	T中2西拵6層及び10層	弥生土器	甕	(16.3)	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	
10	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	
11	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	灰褐色(10YR6/2)	
12	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	橙色(5YR6/6)	
13	T1	トレンチ上	弥生土器	甕	—	—	—	浅黄色(2.5Y7/4)	
14	全面調査	トレンチ拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい橙色(10YR7/3)	
15	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	
16	焼成土壌2	T中2西拵6層及び10層	弥生土器	甕	—	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	
17	T1	トレンチ上	弥生土器	壺	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	外面黒痕あり
18	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	6.0	—	灰白色(10YR8/2)	
19	全面調査	T中2西拵6層及び10層	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	
20	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	甕	—	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/3)	
21	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	高杯	—	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	
22	全面調査	T中2西側拡張部	弥生土器	高杯	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	
23	全面調査	T中2西拵6層及び10層	土師器	皿	10.5	6.1	3.35	褐灰色(10YR6/1)	底面糸切り
24	全面調査	T中2西拵6層及び10層	土師器	椀	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	
25	全面調査	T中2西拵6層及び10層	土師器	椀	—	7.1	—	灰白色(10YR8/2)	
26	全面調査	T中2西拵6層及び10層	土師器	甕	—	—	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	
27	全面調査	T中2西拵6層及び10層	勝間田焼	椀	(15.0)	(6.8)	5.6	灰白色(7.5Y7/1)	底面糸切り
28	全面調査	T中2西拵6層及び10層	勝間田焼	皿	—	—	26.0	灰白色(2.5Y8/1)	底面糸切り

表15 石製品一覧表

掲載番号	調査区名	旧遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
S1	T2	トレンチ中	スクレイパー	120.5	65.0	13.5	106.92	サヌカイト	弥生時代	
	表採	表採	石包丁	106.0	45.5	6.0	42.05	緑色片岩	弥生時代	奥津町保管

表16 金属器一覧表

掲載番号	調査区名	旧遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M1	T1	トレンチ上	銭貨(寛永通寶)	—	25	—	2.57	銅	江戸時代	
M2	T2	トレンチ中	銭貨(寛永通寶)	23.43	23.45	1.01	1.66	銅	江戸時代	

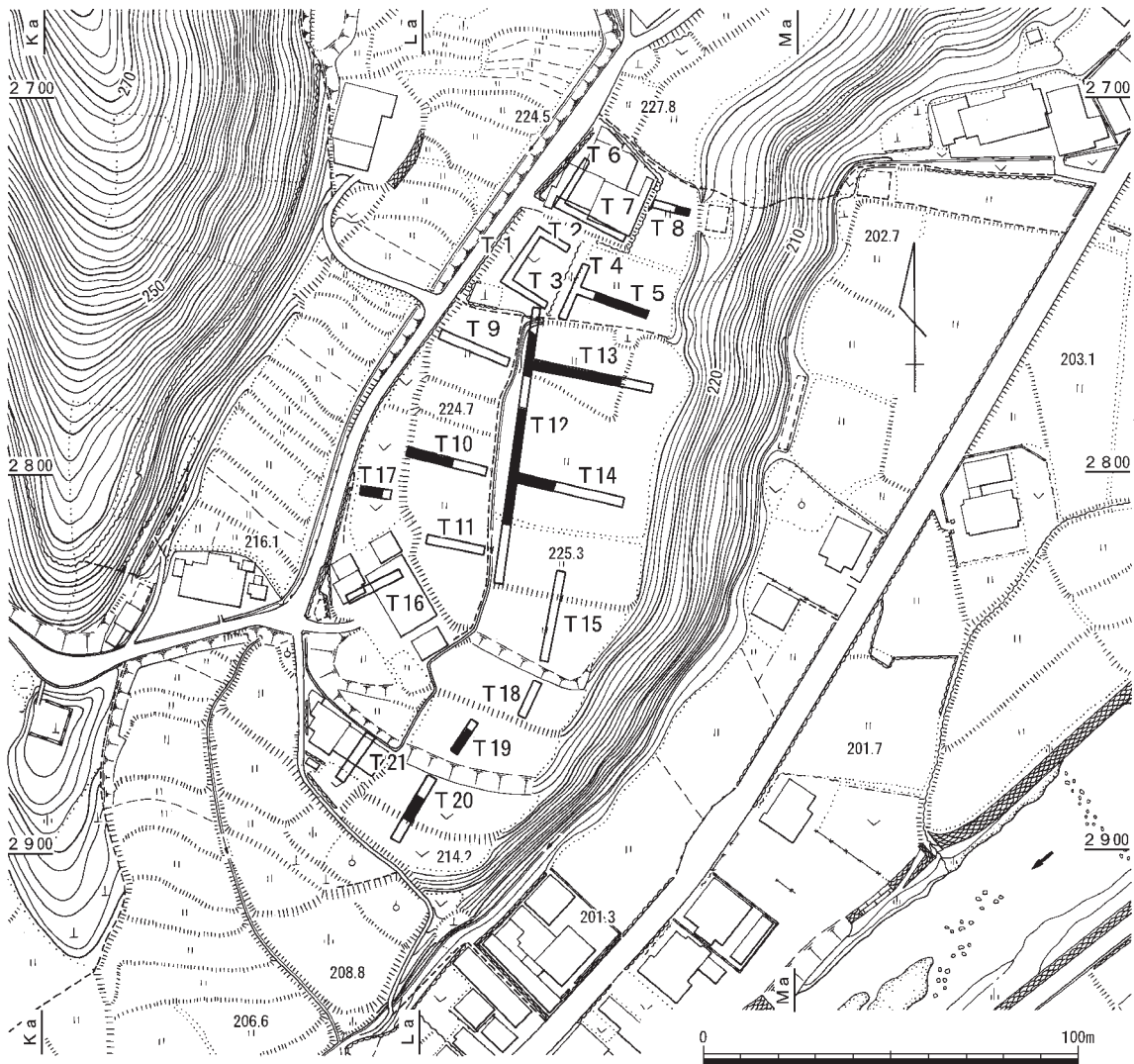
第7章 勝の段遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

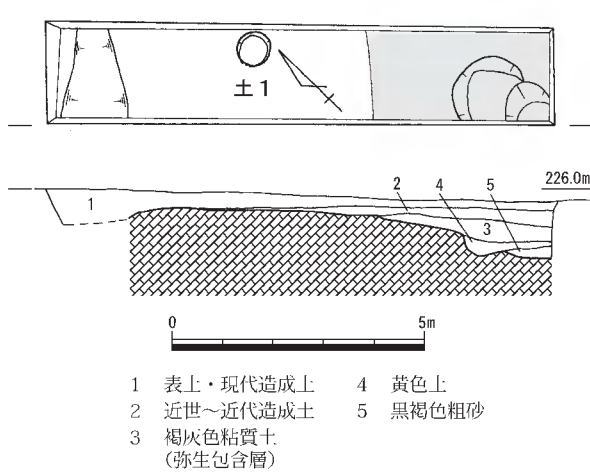
勝の段遺跡は苦田郡奥津町久田上原に所在する。吉井川の西岸の山塊から延びる丘陵上の遺跡の有無を確認するためにトレンチを21か所設定して調査を行った。丘陵上は宅地や水田、畑などの造成により段状に改変されていた。そこでトレンチは各段に1、2か所設定したが、場所によっては複数の段に及ぶように設定したトレンチもある。

T1～T3、T6、T7は最高所に設定したトレンチで、後世の掘削により現表土直下がすぐ地山という状況であった。

T7より東側の1つ低い段に設定したT8では、東に向かって地山が徐々に下がっていく様子が認



第1図 調査位置図 (1/2,000) ■包含層範囲



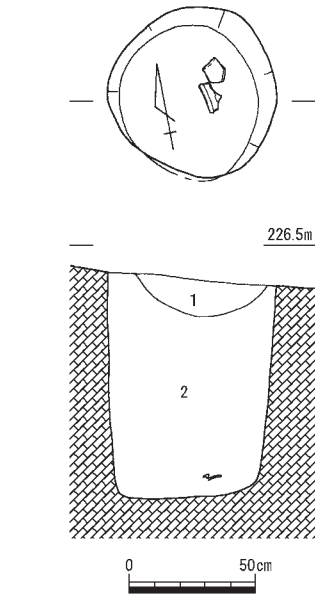
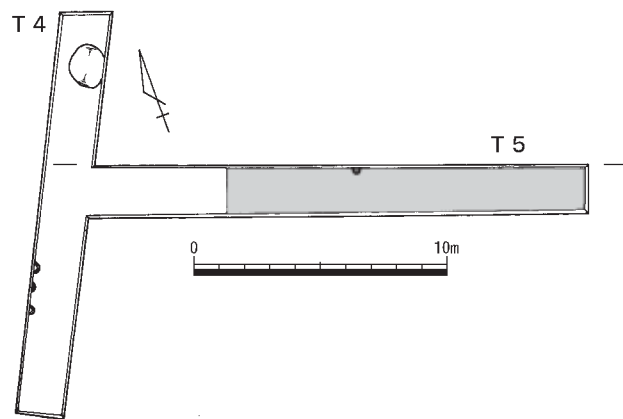
第2図 T 8 平・断面図 (1/150)

められ、弥生時代の遺物包含層が確認できた。また、T 8 では土壌が1基見つかり、調査を行った。

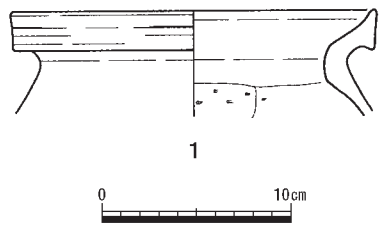
土壌1は直径70cm、深さ90cmを測り、ほぼ円筒状を呈するが一部袋状になっていた。1は底部付近から出土した甕で、体部内面はヘラケズリ調整である。弥生時代後期中葉と考えられる。

T 4では表土直下がすぐ地山という状況であった。T 4の東壁中央付近から延ばしたT 5では、T 8と同様に東に向かって地山が徐々に下がっていく様子が認められ、弥生時代の遺物包含層が確認できた。また、T 4、T 5ではピットも見ついている。

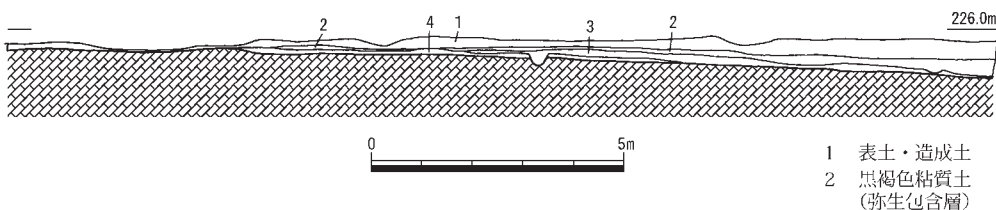
T 4、T 5の段より1つ下の段から南接する2つの段に及ぶようにT 12を設定した。T 12からは段を違えて東へT 13、T 14を枝状に延ばして調査を行った。T 12～T 14では表土を除去した段階で弥生土器片を多く含む包含層を検出することができた。包含層はT 13を設定した段とT 14を設定した段で見つかり、T 14を設定した段の南に位置する段では見つからなかった。また、T 13を設定した段からT 14を設定した段へと下がる部分では包含層を検出することができず、段を切る時に削平されたと考えられる。T 12～T 14では包含層が残存していた部分を中心として溝や土



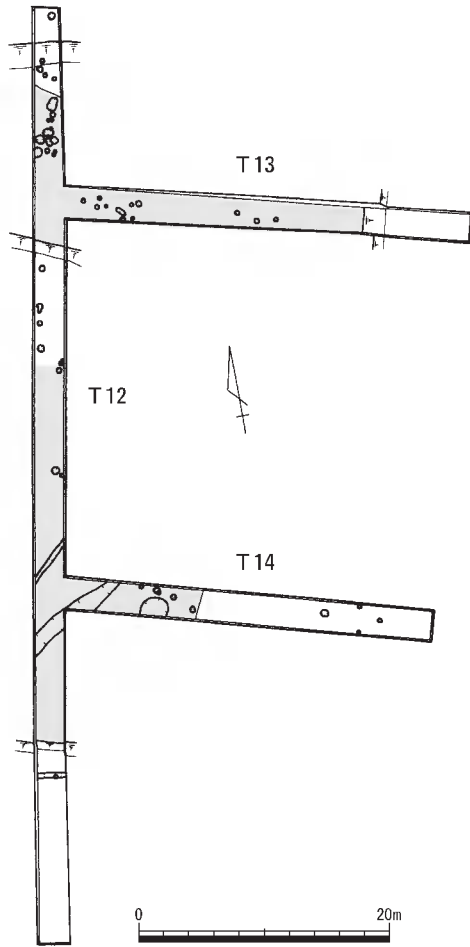
1 明黄褐色粘質土 2 黒褐色粘質土



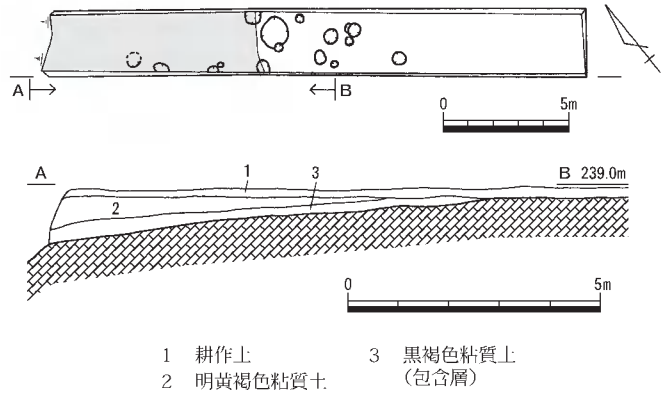
第3図 土壌1・出土遺物 (1/30, 1/4)



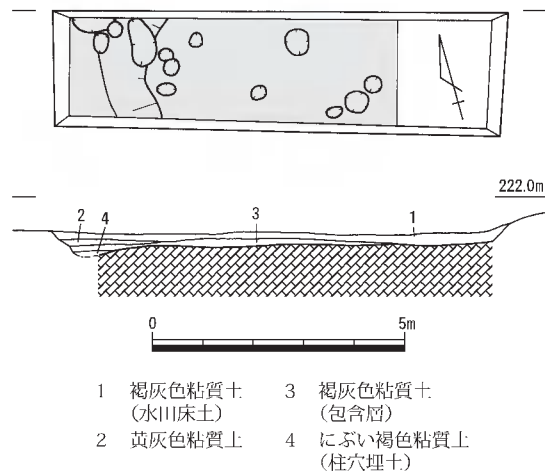
第4図 T 4・5 平・断面図 (1/300, 1/150)



第5図 T12~14 (1/600)



第6図 T10平・断面図 (1/300, 1/150)



第7図 T17平・断面図 (1/150)

塋、ピットといった遺構が見つかった。溝はT12のほぼ中央部とT12とT14が交わる場所にそれぞれ1条検出しており、後者は幅120cmを測る。また、T13ではサヌカイトや黒曜石のチップが多く出土しており、付近で石器製作が行われていた可能性が考えられた。

T15、T18では包含層は認められず、表土直下がすぐ地山という状況であった。

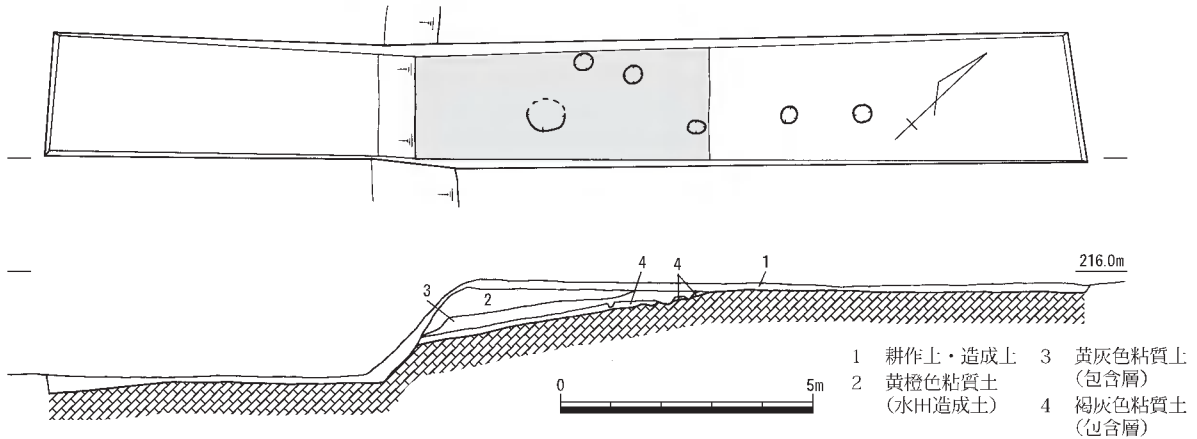
T19では包含層が認められている。包含層はトレンチの北端までは残っておらず、段を切る時に削平されたと考えられる。

T20は2つの段に及ぶようにトレンチを設定して調査を行った。上段では、北側半分で包含層は確認できず、造成土直下が地山となっており、段切りの時に削平されたと考えられる。また、下段においても包含層は確認できなかった。包含層は上段の端部を中心として残っていた。T20の断面では地山が下段に向かって徐々に下がっていく様子が見え、包含層は斜め堆積していた。そのため水田造成の段切りにより包含層が削平されていた。

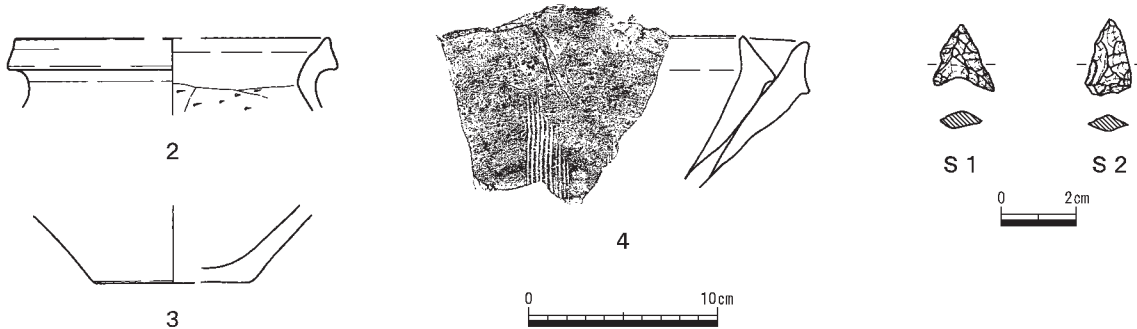
T10では西側半分において包含層が見つかった。また、ピットも数基見つかった。なお、東側半分は段を切る時に削平されたと考えられ包含層は認められなかった。

T17でも包含層が認められている。包含層はトレンチの東端までは残っておらず、段を切る時に削平されたと考えられる。

遺物は弥生土器や備前焼、石鏃が出土している。2は甕で弥生時代後期中葉のものと考えられる。



第8図 T20平・断面図 (1/150)



第9図 各トレンチ出土遺物 (1/4, 1/2)

体部内側はヘラケズリである。4は備前焼の播鉢であり、IV期に比定できる。S1、S2はいずれもサヌカイト製の石鏃で、S1が凹基式、S2が凸基式である。いずれも長さ2cm以下と小形である。

勝の段遺跡の調査ではトレンチを21か所設定して遺跡の確認を行い、弥生時代の包含層を確認することができた。包含層は後世の造成により削平を受けている部分もあるが、それ以前には丘陵のほぼ全域に広がっていたと考えられる。出土遺物は弥生土器が多く、またサヌカイトや黒曜石のチップが多く出土する地点があり石器を製作していたと考えられた。これらのことから丘陵上には弥生時代の集落が形成されていた可能性が高い。勝の段遺跡の北100mに位置するナル林遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居6軒、袋状土壇8基、土壇1基、溝1条が見つかった。ナル林遺跡から勝の段遺跡にかけては緩斜面が続いており、この緩斜面にも遺構の広がりも想定されている。勝の段遺跡は弥生時代後期に営まれたナル林遺跡集落の南部として位置付けられる。(上村)

表17 土器観察表

掲載番号	掲載遺構・土層名	山遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	特徴
					口径	底径	器高		
1	土壇1	T 8 No. 1 土壇	弥生土器	甕	(19.2)	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	外面口縁部煤付着
2	T12	T12	弥生土器	甕	(16.4)	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	
3	T12~14	T12~14	弥生土器	甕	—	(8.0)	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	
4	T12	T12	備前焼	播鉢	—	—	—	にぶい赤褐色(2.5YR4/3)	卸し目10条

表18 石製品一覧表

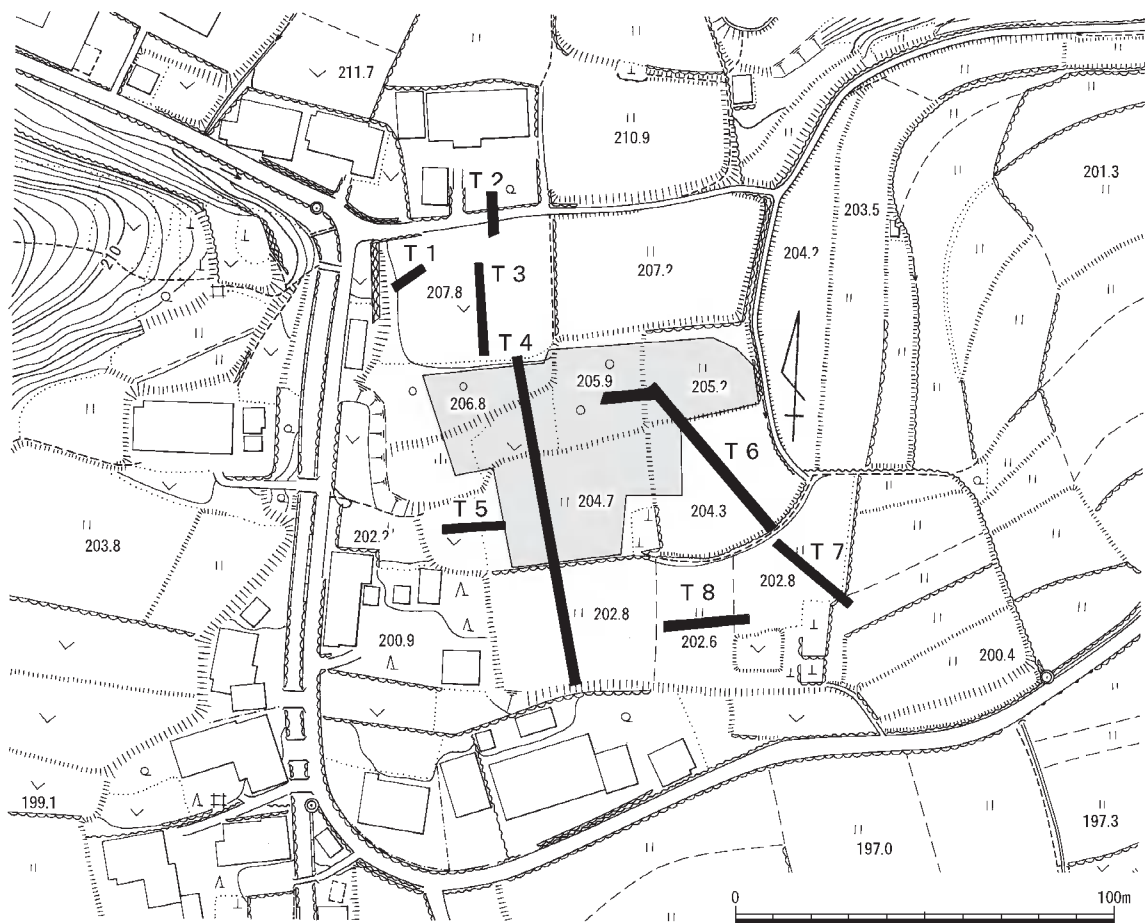
掲載番号	掲載遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	T13	石鏃	17.0	16.0	4.0	0.65	サヌカイト	弥生時代	
S2	T13	石鏃	20.0	12.0	4.5	0.87	サヌカイト	弥生時代	

第8章 下黒木遺跡

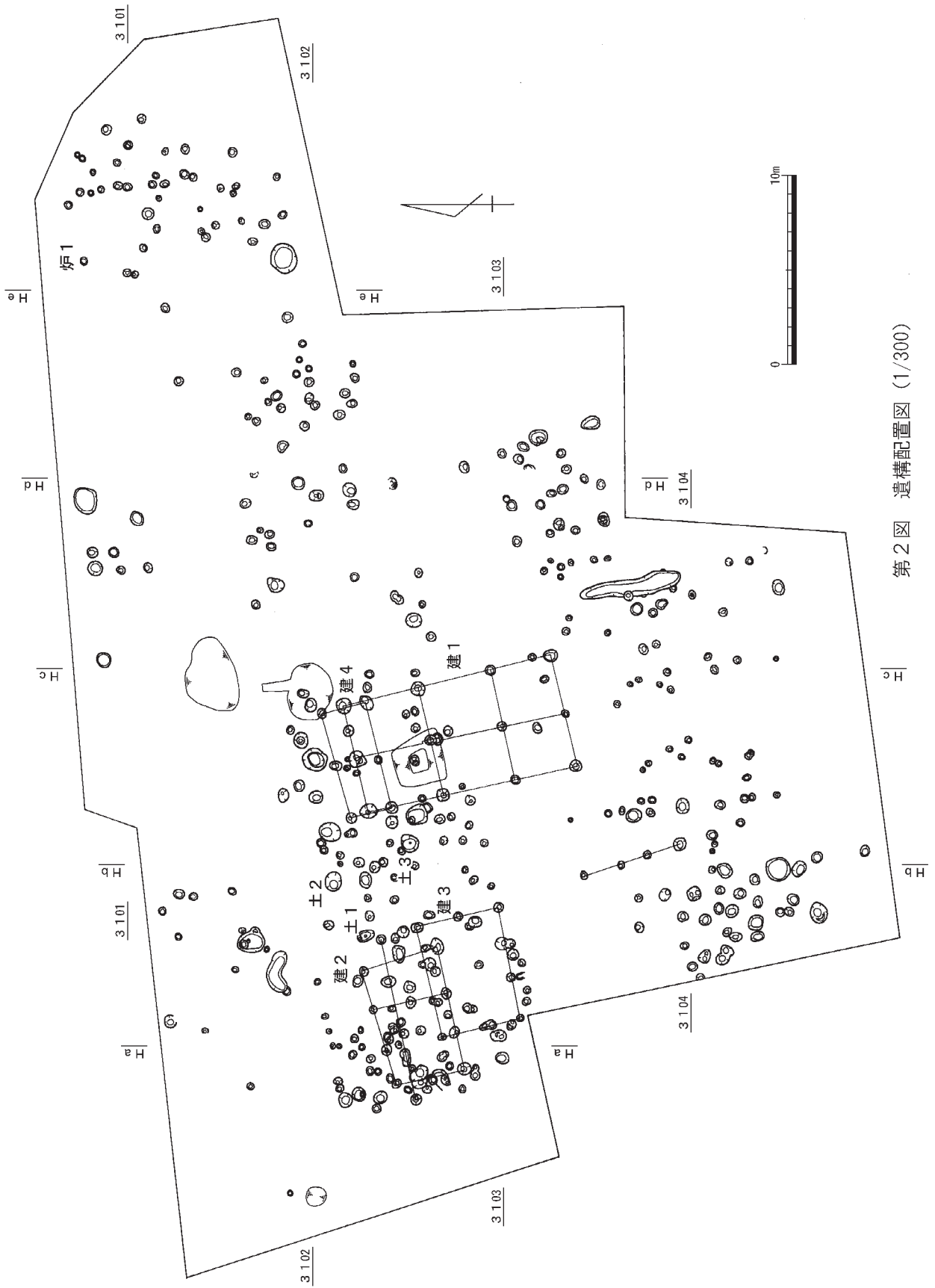
第1節 遺跡の位置と調査の概要

下黒木遺跡は吉井川の西岸で、それまで南から西へ緩やかに曲がってきた吉井川が再び南へ流れを変える地点にあたる。遺跡は西から注ぐ川の扇状地上に立地する。背後は急斜面であるが先端は南向きのゆるやかな平坦地である。調査前は開墾され、壇状になって宅地や水田・畑として利用されていた。眺望は良く、東に久田上原集落、南正面に吉井川の流れ、南西に久田下原集落が見通せる。平成6年の分布調査では山裾付近で弥生土器が表面採集されていたが、その広がりとは不明であった。

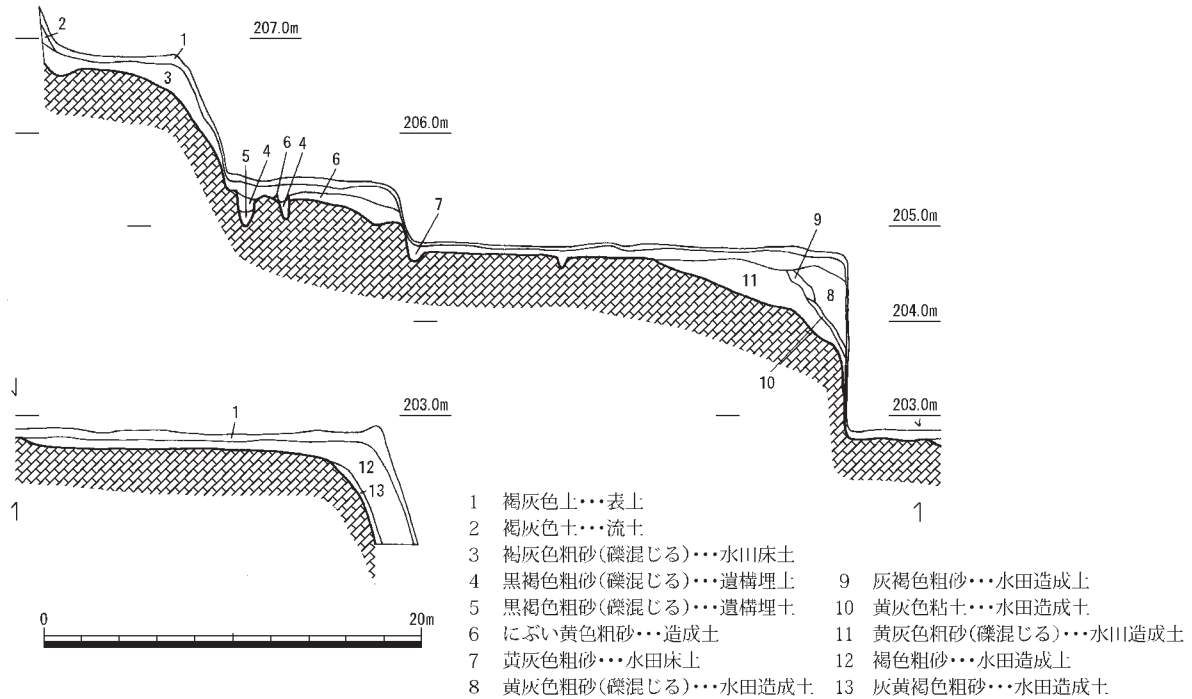
ここは水没予定地のため、遺跡の範囲を確認し調査する必要が生じた。まず平成13年度に第一次調査としてT1～T8のトレンチを設定した。その結果、T4およびT6で遺構の存在と遺物包含層の堆積を確認した。特にT4北では土壇と柱穴が集中していて、刀子・鉈等の鉄器と土師器・瓦質土器などが出土した。このため、T4北側とT6北西側の段を中心に調査範囲を決定し、平成14年度に全面調査に入った。



第1図 調査位置図 (1/2,000) ■第一次調査範囲



第2図 遺構配置図 (1/300)



第3図 T4断面図(縦1/80・横1/400)

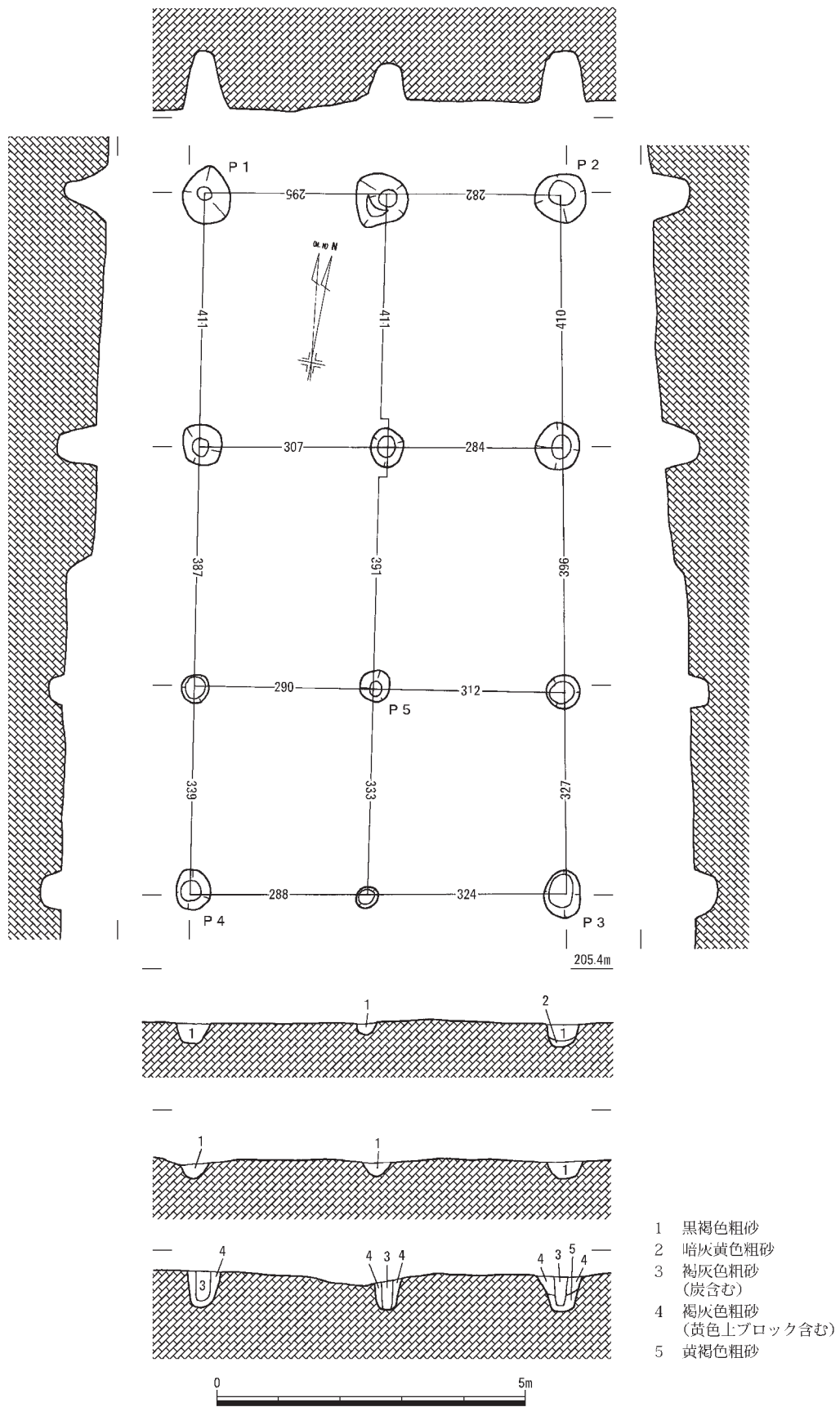
調査区南北断面(T4断面図)の観察により、調査区は近世に水田耕作のため切り盛りされたことがわかった。表土直下では近世の耕作痕を確認している。さらに掘り下げると、造成土の下から柱穴が検出された。この面を包含層や第一次調査出土遺物から中世基盤層と認識した。中世基盤層は、地形に沿って緩やかに下降していたことが想定できる。この基盤層上の柱穴は、特に中央部西の段で密集し、この部分で掘立柱建物1~4、土塙1~3などを検出した。柱穴は掘立柱建物1~4の北では希薄になる。この部分は建物2と比べ1m以上上の段に当たる。建物1の東側にも続いているが、近世の削平があつて残存状況は悪い。建物1の南側では柱穴は存在するが、建物は確認できなかった。

出土遺物の傾向としては、掘立柱建物周辺・炉1南側・柱穴列1周辺の柱穴で備前焼片が確認でき、それらはほとんどが中世に属すると考えられる。青磁破片はT4と全面調査で包含層から出土している。一方、近世から現代に至る陶磁器はT2~T8と全面調査の造成土から出土している。(氏平)

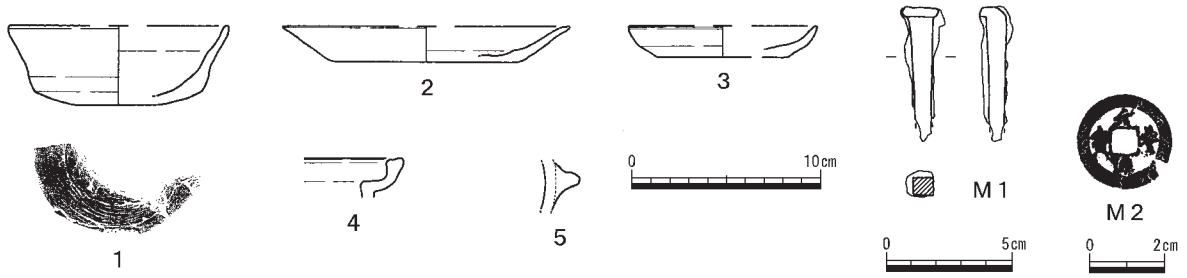
第2節 中・近世の遺構と遺物

掘立柱建物1(第4・5図、図版13・14)

調査区中央に位置する2×3間の掘立柱建物である。当初北側の2×1間分と南側を別々の建物としていたが、南北の柱穴列が直線に並ぶため同一の建物と考えた。梁行は612cm、桁行は1135cmで棟方向はN-10°-W、面積は67.4㎡を測る。柱穴の規模が直径37~92cm、深さが21~70cmと他の建物に比べ大きい傾向にある。また北から2列目の梁行で柱痕を確認し、その直径は12~22cmであった。出土遺物は上師器椀・皿、瓦質の鍋・釜、釘と北宋銭がある。P1から2、P2から1・4、P3から3が、P4からM1・M2、P5から5が出土した。1が古いように思えるが、2を久田原遺跡などと比べると15世紀後半に相当する。鍋・釜の存在からも、遺構の時期はそのころであろう。(氏平)



第4図 掘立柱建物1 (1/100)



第5図 掘立柱建物1 出土遺物 (1/4, 1/3, 1/2)

掘立柱建物2 (第6図、図版13)

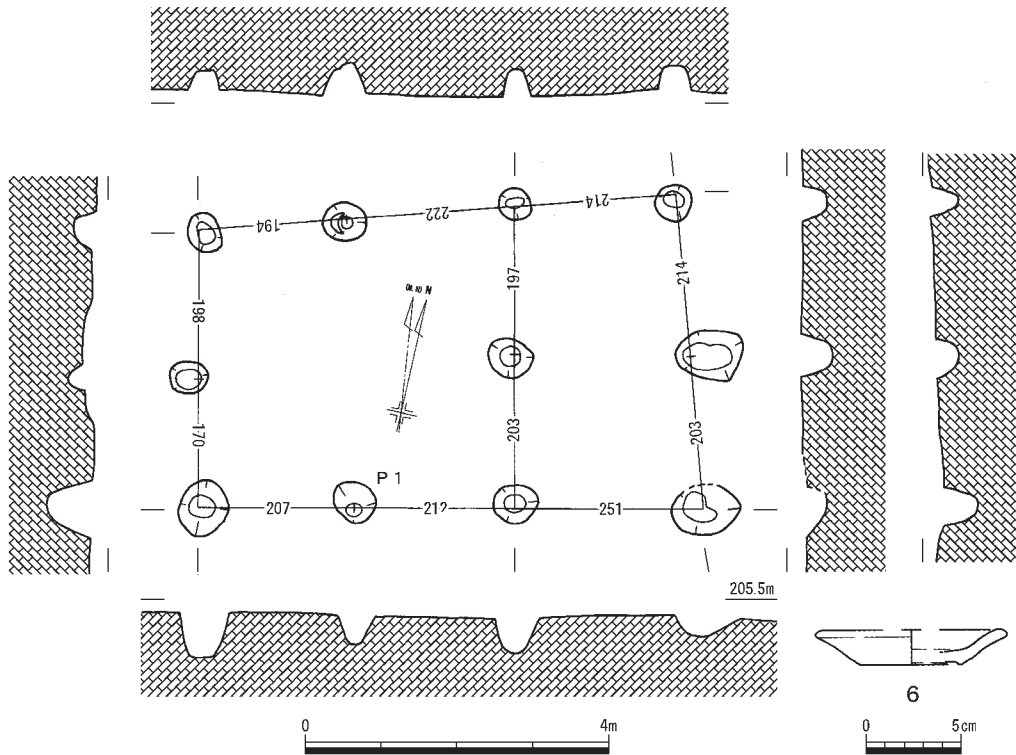
調査区西側に位置する3×2間の掘立柱建物である。周辺に柱穴は多かったが、続きになる柱穴を認識できなかった。柱穴の埋土は、いずれも黒褐色粗砂である。梁行は平均395cm、桁行は650cmで、棟方向はN-80°-Eを指し、面積は25.5㎡を測る。出土遺物は土師器・瓦質土器片とP1から出土した6の瀬戸・美濃産灰釉陶器皿がある。6は15世紀前半に相当する。(氏平)

掘立柱建物3 (第7図)

調査区西側に位置する3×2間の掘立柱建物である。梁行は433cm、桁行は601cmで棟方向はN-85°-E、面積は26.1㎡を測る。遺物は土師器の小片があるが、時期はよくわからない。(氏平)

掘立柱建物4 (第8図、図版13)

調査区中央に位置する1×2間の掘立柱建物である。建物1の一部である可能性もあるが、別の建物と考えた。梁行230cm、桁行は576cmで棟方向はN-80°-E、面積は13.3㎡を測る。柱穴は建物1と同様に容易に検出できた。遺物は出土していないが、建物1と近い時期であろう。(氏平)



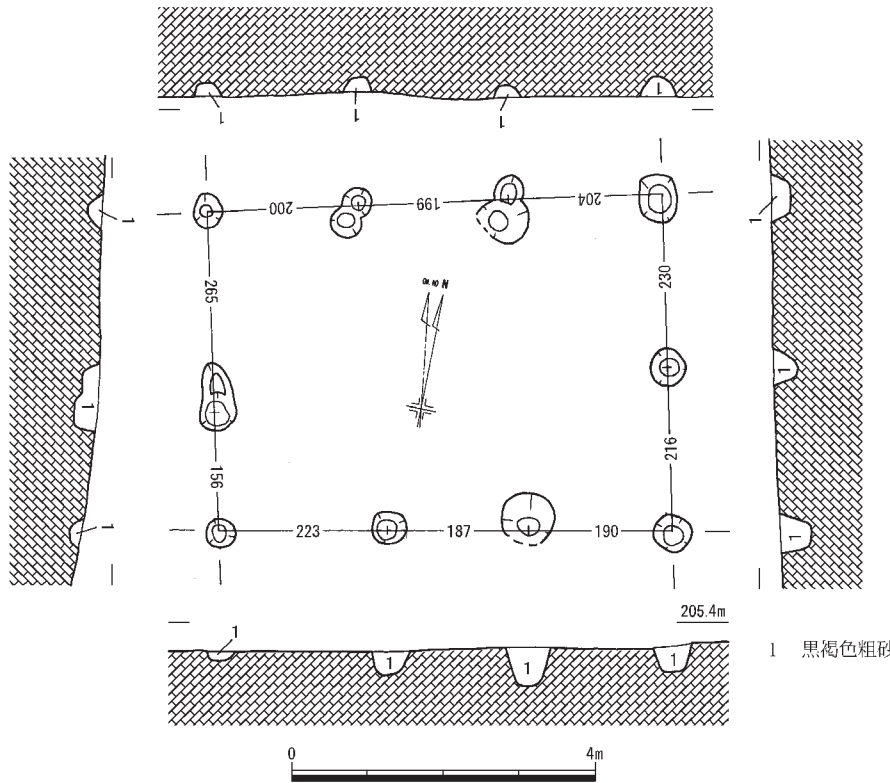
第6図 掘立柱建物2・出土遺物 (1/100, 1/4)

炉1 (第9図)

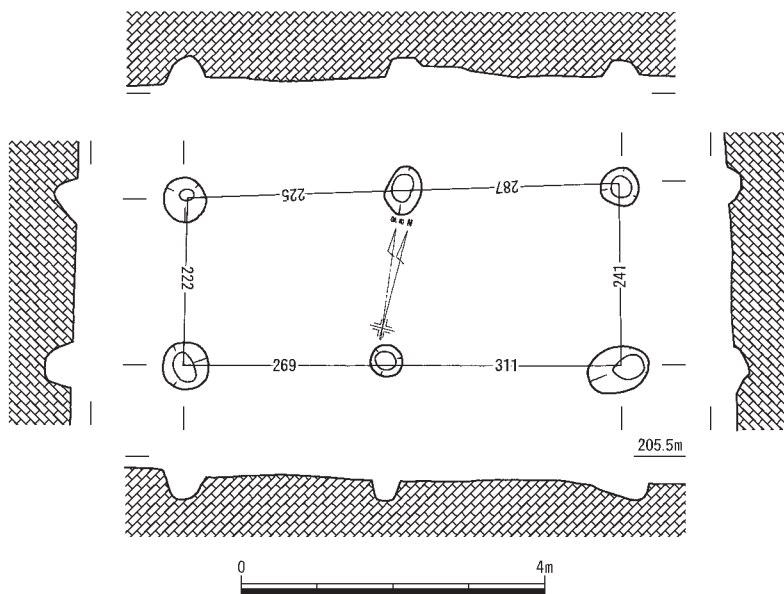
調査区北東端に位置する。掘り方は33×32cmの円形で、深さ35cmを測る。掘り方東西の上面に赤色に変色した被熱痕が見られる。埋土には若干炭を含んでいるが、使用直後の様子をそのまま残しているとは言えない状態である。形状から、小規模な鍛冶炉と想定できる。遺物が出土していないので、時期はよく分からない。
(氏平)

土壌1 (第10図)

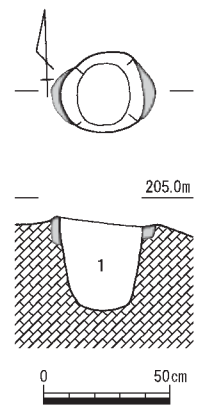
調査区西側に位置する。検出面で7の土師器碗が出土し、周りを精査したところ掘り方を検出した。掘り方は95×57cmの楕円形で、深さは4~18cmを測る。北端部分が窪んでいるが、柱穴が重複しているのかもしれない。7は杯Aに分類でき、その時期は14世紀代にあたる。
(氏平)



第7図 掘立柱建物3 (1/100)



第8図 掘立柱建物4 (1/100)



第9図 炉1 (1/30)

105×83cmの楕円形で深さが47cmを測る。図示したとおり、8の土師器小皿が掘り方壁面に張り付いて出土した。遺構の時期は周囲の遺構と同じく中世であろう。(氏平)

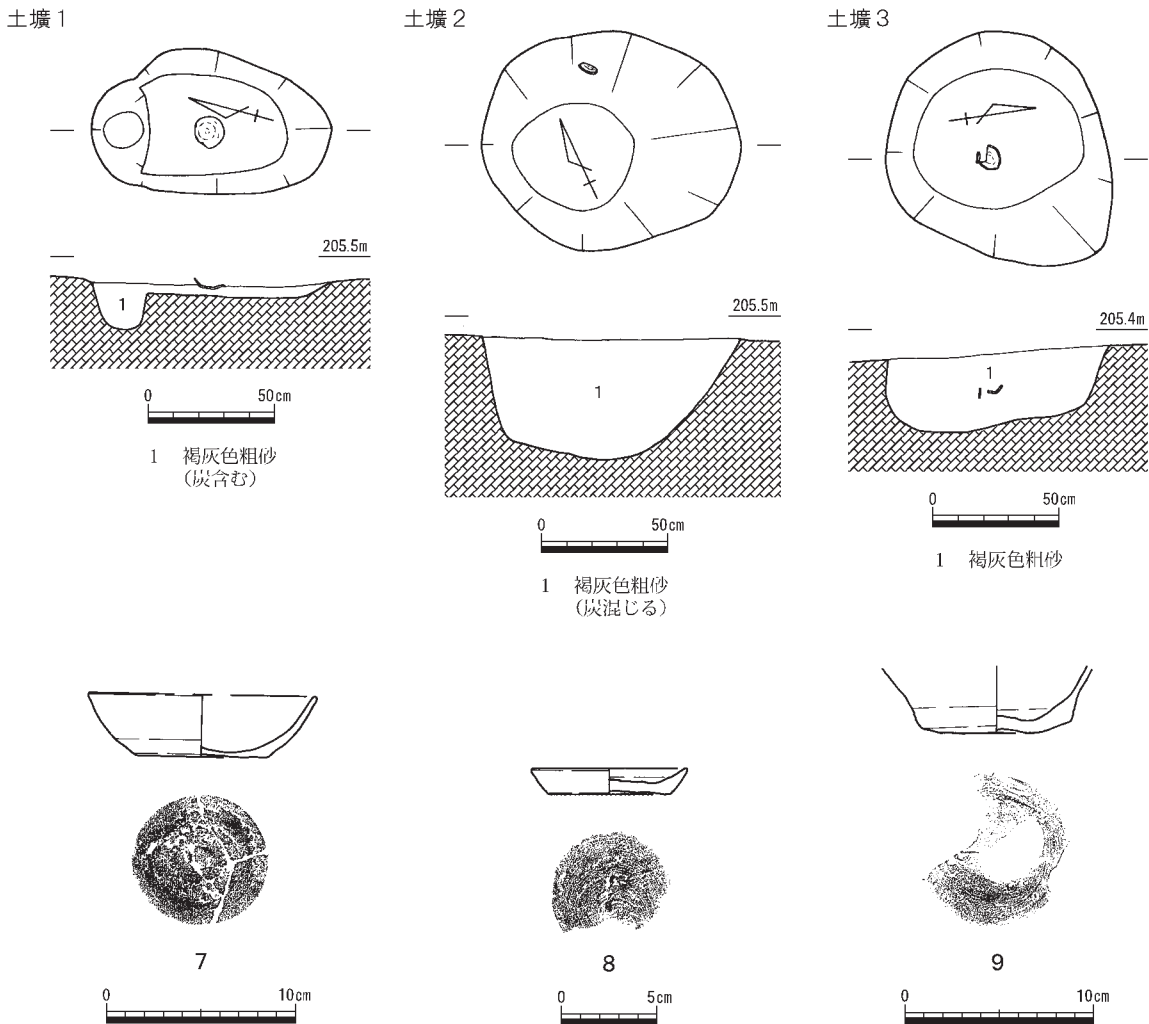
土壌3 (第10図、図版14)

調査区西側に位置する。掘り方は102×88cmの楕円形で、深さ30cmを測る。埋土中に土器片を含み、その質・色調は土壌1と同じである。9は杯Dに分類でき、その時期は14世紀代であろう。(氏平)

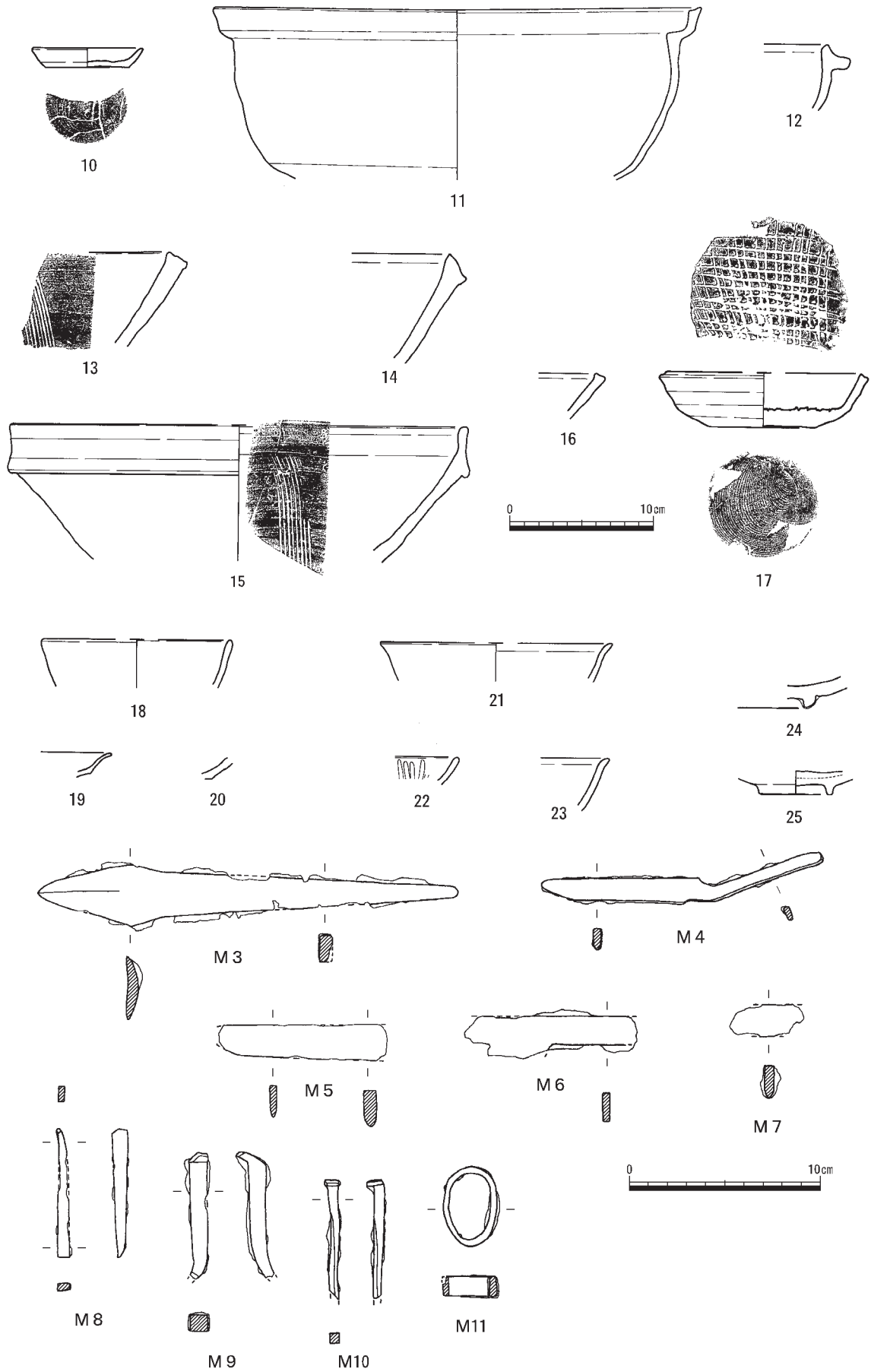
柱穴・包含層出土遺物 (第11図、図版14)

下黒木遺跡では第一次・全面調査合わせて整理箱にして7箱の遺物が出土した。出土状況は散漫で、造成土などからも密集して出土する様子は見られなかったが、時期としては中世全般を中心にかかなりの期間にわたる遺物が存在している。

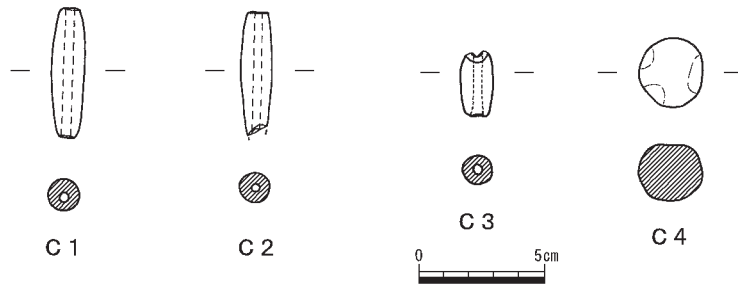
土器は、土師器の皿・椀があるが小片で図化できなかったものがほとんどである。10は建物4北東の柱穴出土のもので、底面は糸切りする。瓦質土器としては、11が造成土の瓦質鍋で、12は建物2内側に存在する柱穴出土の瓦質釜である。備前焼は播鉢や甕片があり、13は建物2内側に存在する柱穴出土でIV期前半に、14は包含層出土でIV期後半、15は造成土出土でV期前半に相当する。16・17は古瀬戸の卸皿である。16はT 4 出土で鑑定によると15世紀初旬、17は南部包含層出土で13世紀中頃に相



第10図 土壌1～3・出土遺物 (1/30, 1/4)



第11図 柱穴・包含層出土遺物① (1/4, 1/3)



第12図 柱穴・包含層出土遺物② (1/3)

鉄器は鉋・刀子・釘・円環状鉄器などが出土した。M3はほぼ完形の鉋で建物1南西の柱穴出土、M8はT2出土の鑿と想定できる鉄器である。土製品は土錘が3点、球形のもの1点がある。C3・C4は柱穴から、残りは包含層出土である。(氏平)

第3節 まとめ

下黒木遺跡では掘立柱建物4棟などを確認し、集落の存在が認められた。遺物からは13世紀以降の時期にわたり集落として存続したことが分かる。

掘立柱建物については、4棟が近接して存在した。そのうち掘立柱建物1のみが南北方向に長く、残りは東西方向に長い。今回の調査では柱間が不均等になる掘立柱建物を想定しなかったが、掘立柱建物2・3の東側の柱穴が建物を構成する可能性もある。この場合でも、掘立柱建物2・3と同様に東西方向に長い建物になりそうだ。

ここで建物の規模を挙げると、掘立柱建物1は面積は67.4㎡で中形の規模であるが、残りは小形である。久田原⁽³⁾遺跡など久田平野の建物では100㎡を越える巨大な建物もあるが、そこまでのものは存在しない。村落としてはごく一般的な規模であるだろう。

遺物であるが、土師器・瓦質土器・備前焼が主で、青磁・白磁と古瀬戸が少数見られる。勝間田焼は、今回の調査ではほとんど出土していない。最も古い遺物は古瀬戸の卸皿17と備前播鉢13で、13世紀末から14世紀初頭の範囲であろう。引き続いて土壇1・2などで14世紀に相当する遺物が見られる。その後、建物1などの15世紀代の遺物を出土する建物が現れる。16世紀以降は、遺物は存在するが、遺構は柱穴のみが判明し、その規模や種類までは分からなかった。近世の造成は、出土した遺物から16世紀以降と想定できる。

下黒木遺跡は久田原遺跡などにやや遅れて14世紀には集落が存在していたが、その規模ははるかに小さかった。ただ、中世以降継続して集落が営まれたのは明らかで、見通しの良い立地からしてもその存在は大きかったのではないだろうか。(氏平)

註

- (1) 亀山行雄・小嶋善邦「第4章 まとめ 第7節 中世の久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184』岡山県教育委員会 2004
- (2) 伊藤 晃「第十一章 窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- (3) 註1文献

表19 土器観察表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	備考
					口径	底径	器高		
1	建物1 P 2	No.20(建物) P 3	土師器	杯	(11.5)	(5.7)	4.2	浅黄橙色(7.5YR8/3)	底部-回転ヘラ切り。
2	建物1 P 1	No.20(建物) P 1	土師器	皿	(15.2)	10.0	(1.9)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	
3	建物1 P 4	No.13(建物) P 4	土師器	皿	(9.8)	(7.9)	(1.7)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	底部-回転糸切り。
4	建物1 P 2	No.20(建物) P 2	瓦質土器	鍋	—	—	—	にぶい棕色(10YR7/3)	
5	建物1 P 5	No.13(建物) P 2	瓦質土器	鍋	—	—	—	灰色(N4/)	
6	建物2	No.22(建物) P 7	陶器	皿	(9.3)	5.4	1.9	オリーブ黄色(5YR6/4)	瀬戸・美濃灰釉陶器。
7	土壇1	P 45	土師器	杯	(11.9)	7.0	3.3	にぶい棕色(7.5YR7/3)	底部-回転ヘラ切り後ナデ。
8	土壇2	No.16(土壇)	土師器	皿	(8.2)	(6.6)	(1.4)	橙色(7.5YR7/6)	底部-回転糸切り。
9	土壇3	No.18(土壇)	土師器	杯	—	6.4	—	灰白色(10YR8/2)	底部-回転ヘラ切り。
10	柱穴	P 143	土師器	皿	7.6	3.8	1.4	にぶい黄橙色(10YR7/4)	底部-回転糸切り。
11	包含層	造成土	土師器	鍋	13.85	—	—	灰色(7.5Y5/1)	
12	柱穴	P 49	瓦質土器	鍋	—	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	
13	柱穴	P 50	備前焼	播鉢	—	—	—	灰色(N6/)	
14	包含層	北東包含層	備前焼	播鉢	—	—	—	灰色(N6/)	
15	包含層	造成土内	備前焼	播鉢	31.3	—	—	褐灰色(5YR5/1)	
16	T 4	T 4	陶器	卸皿	—	—	—	灰黄色(2.5Y7/2)	瀬戸灰釉陶器。鑑定(15c初旬 井上編年X I 期)
17	包含層	造成土	陶器	卸皿	(13.6)	7.4	3.85	灰黄色(2.5Y7/2)	I 緑部ほとんど残存せず。鑑定(13c中頃 井上編年V 期)
18	柱穴	P 51	陶器	椀	(12.9)	—	—	灰色(5Y5/1)	
19	柱穴	P 65	陶器	皿	—	—	—	灰白色(5Y8/1)	
20	柱穴	P 108	陶器	椀	—	—	—	黒褐色(10YR3/1)	瀬戸・美濃天目茶碗。
21	柱穴	P 70	青磁	碗	—	—	—	灰色(10Y6/1)	
22	柱穴	P 100	青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(10Y6/2)	
23	T 10	トレンチ10	青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(10Y5/2)	
24	包含層	清掃中	青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(10Y5/2)	
25	包含層	造成土内	白磁	碗	—	5.1	—	灰白色(5Y7/1)	

表20 土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	色調	時期	備考
				最大長	最大幅	孔径				
C 1	包含層	包含層	錘	51.8	13.1	3.6	8.00	にぶい黄褐色(10YR7/2)	中世	外面-黒斑。完形。
C 2	包含層	清掃中	錘	(49.2)	12.1	3.1	6.85	灰白色(10YR8/2)	中世	
C 3	柱穴	P 3	錘	26.0	13.0	4.0	3.60	にぶい黄橙色(10YR6/3)	中世	完形。
C 4	柱穴	P 89	土製品	26.0	—	—	16.42	にぶい黄褐色(10YR5/3)	中世	外面-コピオサエ。球形。

表21 金属器一覧表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M 1	建物1 P 4	No.13建物pit 6	釘	(54.0)	14.5	10.5	11.41	鉄	中世	先端欠損。
M 2	建物1 P 4	No.13建物pit 6	銭貨(元尊通貨)	25.2	25.2	1.11	2.14	銅	中世	ほぼ完形。北宋銭(初鑄1078年)
M 3	T 4 柱穴	T 4 pit1	鉈	219.0	32.5	7.0	64.66	鉄	中世	完形。
M 4	包含層	包含層	刀子	147.0	13.0	4.0	26.37	鉄	中世	完形。
M 5	T 4 柱穴	T 4 pit15	刀子	(98.5)	19.5	7.5	28.85	鉄	中世	先端欠損。
M 6	柱穴	pit126	刀子	—	—	5.0	24.84	鉄	中世	
M 7	柱穴	pit56	刀子	—	17.0	5.0	10.26	鉄	中世	表面剥離激しい。
M 8	T 10	T 10	鑿	62.0	10.0	6.0	7.89	鉄	中～近世	ほぼ完形。
M 9	包含層	No. 6耕作痕	釘	(65.0)	15.0	15.0	14.38	鉄	中～近世	先端欠損。
M 10	柱穴	pit38	釘	(62.0)	9.5	9.0	6.45	鉄	中～近世	先端欠損。
M 11	柱穴	pit55	円環状鉄器	42.5	30.0	10.0	10.94	鉄	中～近世	ほぼ完形。

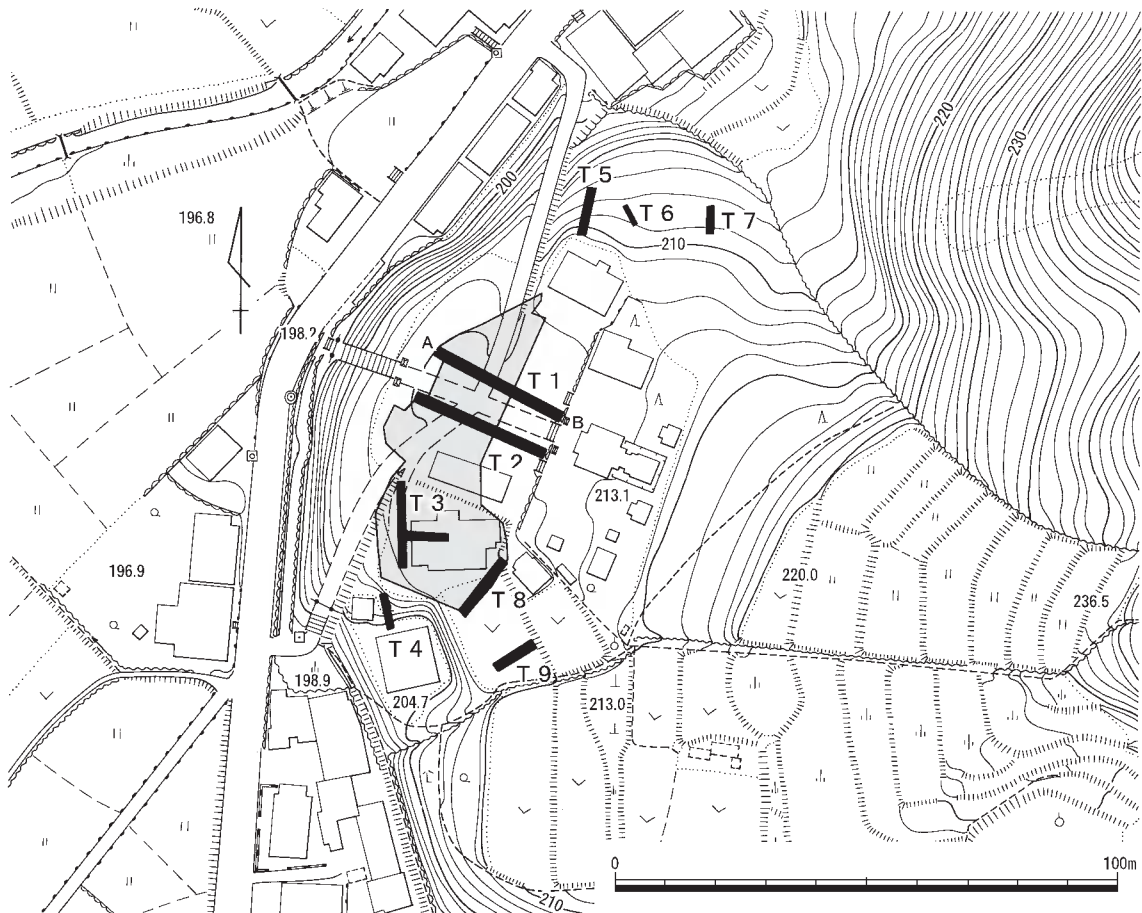
第9章 久田神社古墳

第1節 遺跡の位置と調査の概要

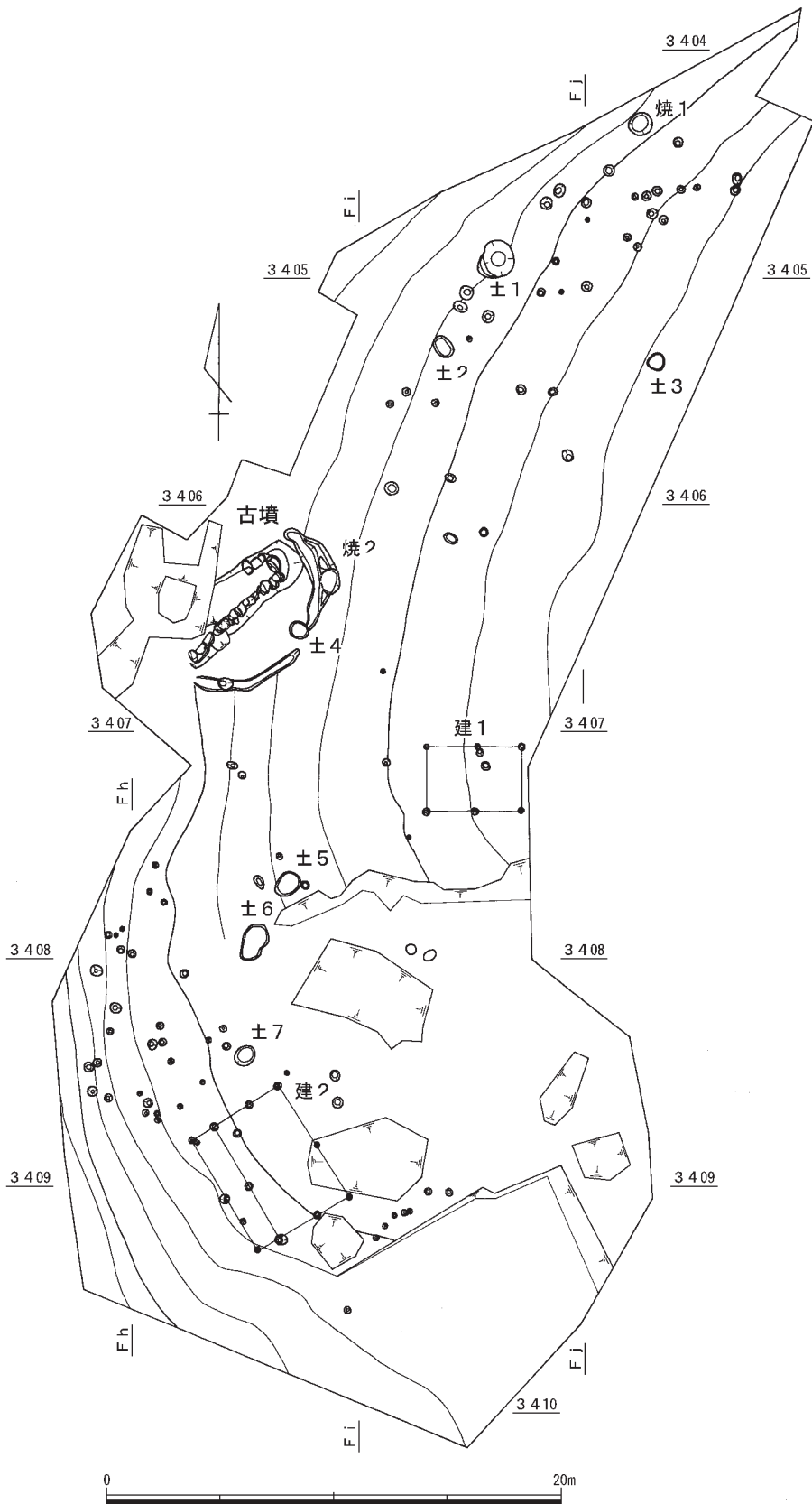
久田神社古墳は苫田郡奥津町久田下原に所在する。吉井川の東岸に列なる山塊から西へ延びる低丘陵の突端に位置している。平成5年に行われた分布調査で、久田神社境内の南西隅において板状の石材が埋没している状況が認められており、古墳の存在が考えられた。

久田神社は境内の西側半分が常時満水域より低いいため、分布調査においてその存在が示唆された古墳を確認するための調査が必要であり、第一次調査を平成13年度に行った。調査は西から久田神社へと上がる石段と本殿を結ぶ参道を挟むような形でT1、T2を設定して行い、その結果、古墳の存在は確認できなかったが、T1で土壇1基、T1・T2でピット数基を確認した。古墳の有無は不明のままだったが、少なくとも遺跡の存在は確認することができたため、全面調査が必要となった。

平成14年度には、全面調査に先立ち、遺跡の広がりを確認するため境内の南北にT3～T9を設定して調査を行った。境内の北側緩斜面に設定したT5～T7では遺構・遺物ともに確認することがで



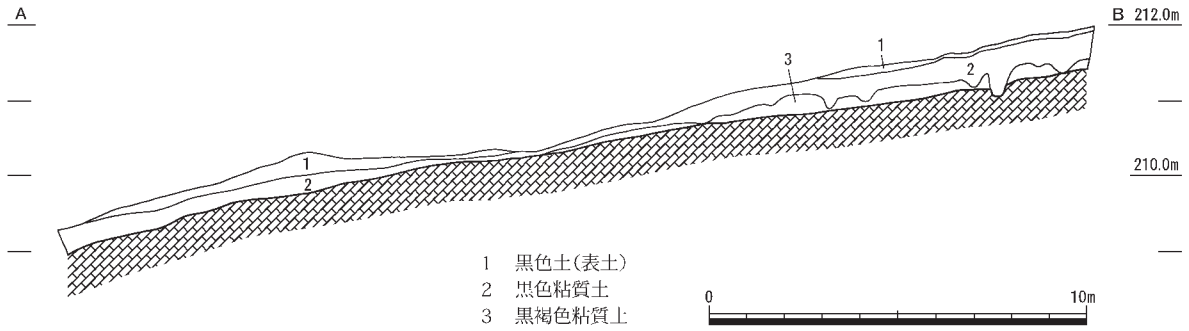
第1図 調査位置図 (1/1,500) ■第一次調査範囲



第2図 遺構配置図 (1/300)

きなかった。境内の南側に設定したT3ではピットを数基確認することができた。T3よりわずかに下がった地点に設定したT8、T9では遺構・遺物ともに確認することができなかった。T4はT3の位置よりも5m低い段に設定したが、遺跡の広がりには認められなかった。以上の成果から遺跡の広がりには久田神社境内に限られていると考えられた。なお、調査区は、常時満水域より標高が低い久田神社境内の西側半分を設定した。

設定した調査区を掘り下げていくと、南側参道を上がりきった地点で河原石が列状を呈しながら調査区外へと延びている様子が確認できた。そのため、河原石列を追跡するような形で調査区を西側に拡張しながら掘り下げを行った。その結果、河原石



第3図 T1断面図（縦1/100・横1/200）

列は長さ5m以上、高いところで4段に積み上げられていることが分かり、この時点でこの河原石列が石室の側壁である可能性が想起された。そこで調査区をさらに西へと拡張して、対になる側壁と奥壁を検出した。調査の結果、横穴式石室を内部主体とした古墳1基、掘立柱建物2棟、焼成土壙2基、土壙7基が確認された。古墳はすでに盗掘にあっており副葬品はほとんど確認できなかった。（上梅）

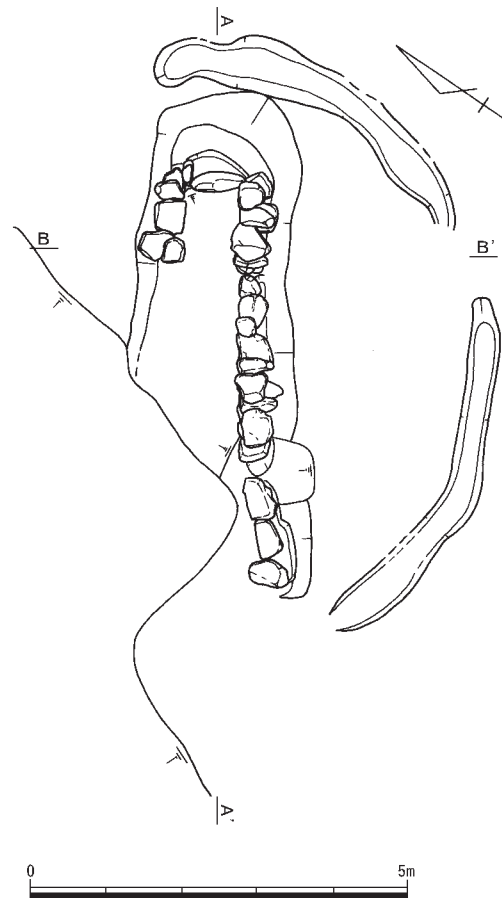
第2節 久田神社古墳

周溝（第4図）

幅40～75cm、深さ10cmを測る溝が円弧状に主体部の周りを巡っており、古墳の周溝と考えられた。周溝は南側半分は検出することができたが、中央部分で南北に分断されていた。主体部背後を巡る周溝は、長さ270cm程で確認できなくなった。また、主体部南側を巡る周溝は、地形が傾斜して下がるのに伴い徐々に浅くなっていった。長さは300cmを測る。周溝が円弧状を呈していることから、久田神社古墳は円墳だったと考えられるが、墳丘は削平されていた。規模は、周溝から復元すると、直径800cmになる。主体部の背後を巡る周溝と主体部の掘り方が接していること、主体部が地山に掘り込んだ掘り方の内部に構築していることから墳丘はそれほど高くないと考えられた。

主体部（第5～7図、巻頭図版2、図版15）

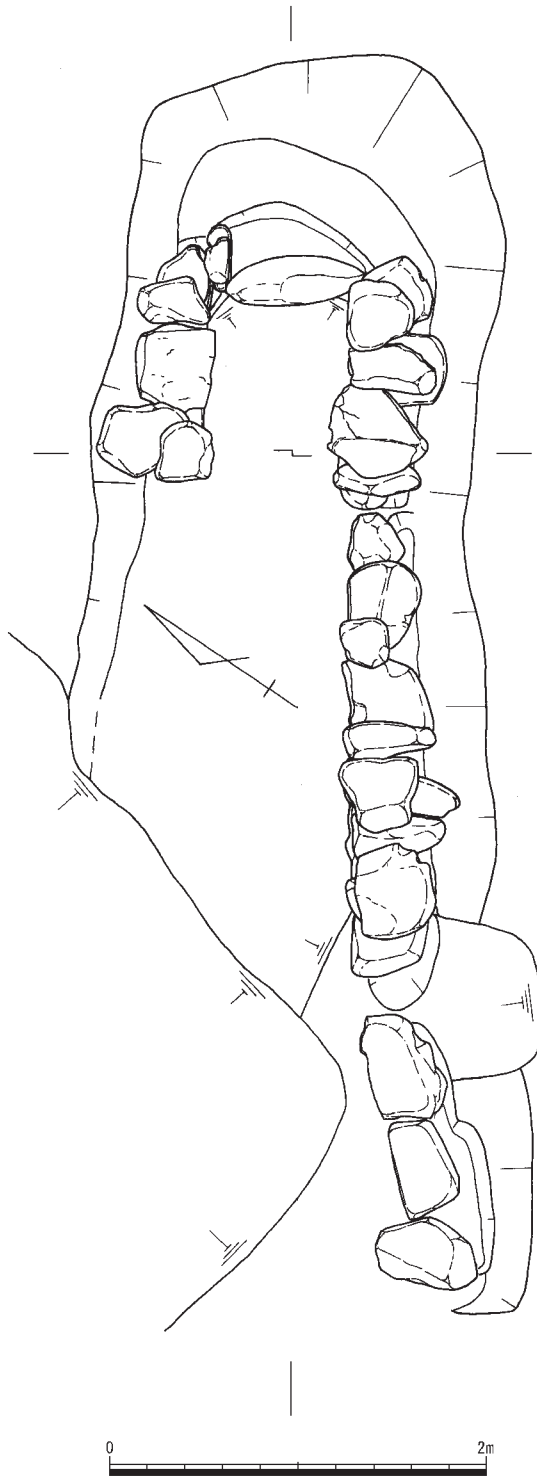
主体部は地山に掘り込まれた掘り方内に構築している。掘り方は長さ675cm、幅170～220cmで、地山を45cm掘り込んでいる。平面は不整長方形であり、断面は逆台形状を呈する。また、石材を配する場所はさらに5～15cm深く掘り込んで



第4図 古墳全景（1/100）

いた。裏込めは掘り方と石材との隙間部分を土で充填する程度であった。なお、石材は掘り方の中心よりやや北寄りに設置していた。内部主体は河原石を用いた無袖式の横穴式石室である。内法で長さ520cm、奥壁幅70cmと非常に細長い。なお、墳丘が削平された時に、石室の上部も破壊されたため高さは不明である。主軸線はN-56°-Wになる。主体部の南側を巡る周溝との関係から南側側壁の基底部分は完全に残っていると考えられ、内法520cmという長さは築造当初の長さであると判断できる。また、

南側側壁は開口部に向かって徐々に開いていく構造となっていた。一方、北側側壁は内法100cmの長さしか残存しておらず、開口部の状況は不明である。埋土中には河原石が散在しており、石室石材とみていいだろう。奥壁は幅74cm、高さ65cm、厚さ30cmの鏡石が南側側壁寄りに配置され、鏡石と北側側壁との間には幅11cm、高さ22cm、厚さ36cmの石を充填していた。南側側壁は基底部に大形の石材を配しており、腰石としていた様子がかがえる。基底部分は奥側から2つ目に幅75cm、高さ60cmを測る鏡石と同規模の石材を使用しているが、それ以外については幅38~62cm、高さ22~50cmであり、それほど大きな石材を使用していない。また、一番奥側の石材は幅47cm、高さ22cmを測るのみで、その上に配した石材より一回り大きい程度である。基底部分は基本的には横置きであるが、奥側から3つ目の石材のみ縦置きになっている。このような状況にあるため基底部の高さは一定していなかった。また、2段目より上に積んでいる石材も横置き中心ではあるが、一部縦置きの石材も存在しており、大きさも一定していない。つまり、横方向・縦方向ともに目地は通っていない状態だった。さらに奥側から7つ目の腰石の上3段目の石材は、一番奥側の腰石とほぼ同じ大きさであり、直下の腰石よりも大きい石材である。側壁と掘り方の間には裏込めの工夫も見受けられず、石室は非常に不安定な構造であったと考えていいだろう。石室埋土中に石材が散在していた要因としては、南北側側壁ともに墳丘が削平された時に破壊されたこと、北側側壁の直上に成長していた木の根による破壊



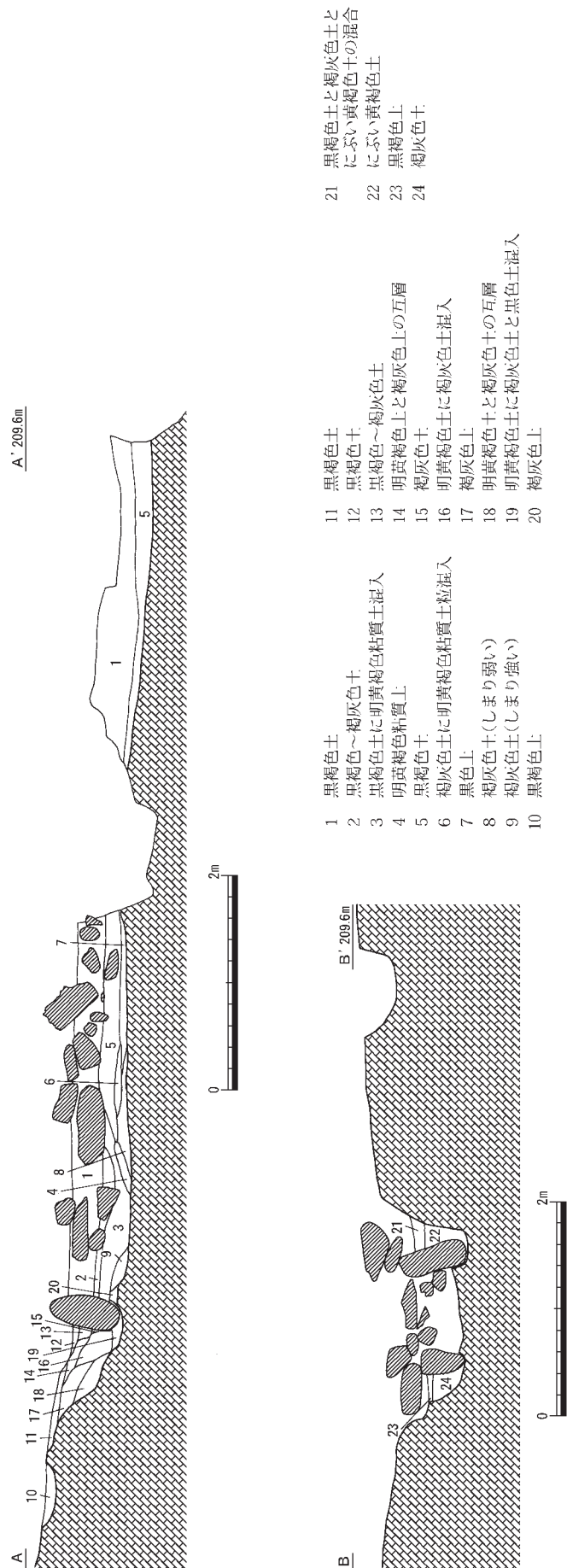
第5図 石室平面図 (1/40)

が考えられるが、石室構造自体の脆弱さも遠因としてあげられるのではないだろうか。床面は地山を深さ10cm程レンズ状にえぐられていた。そのため北側側壁では石材を設置するための掘り込みが確認できなかった。

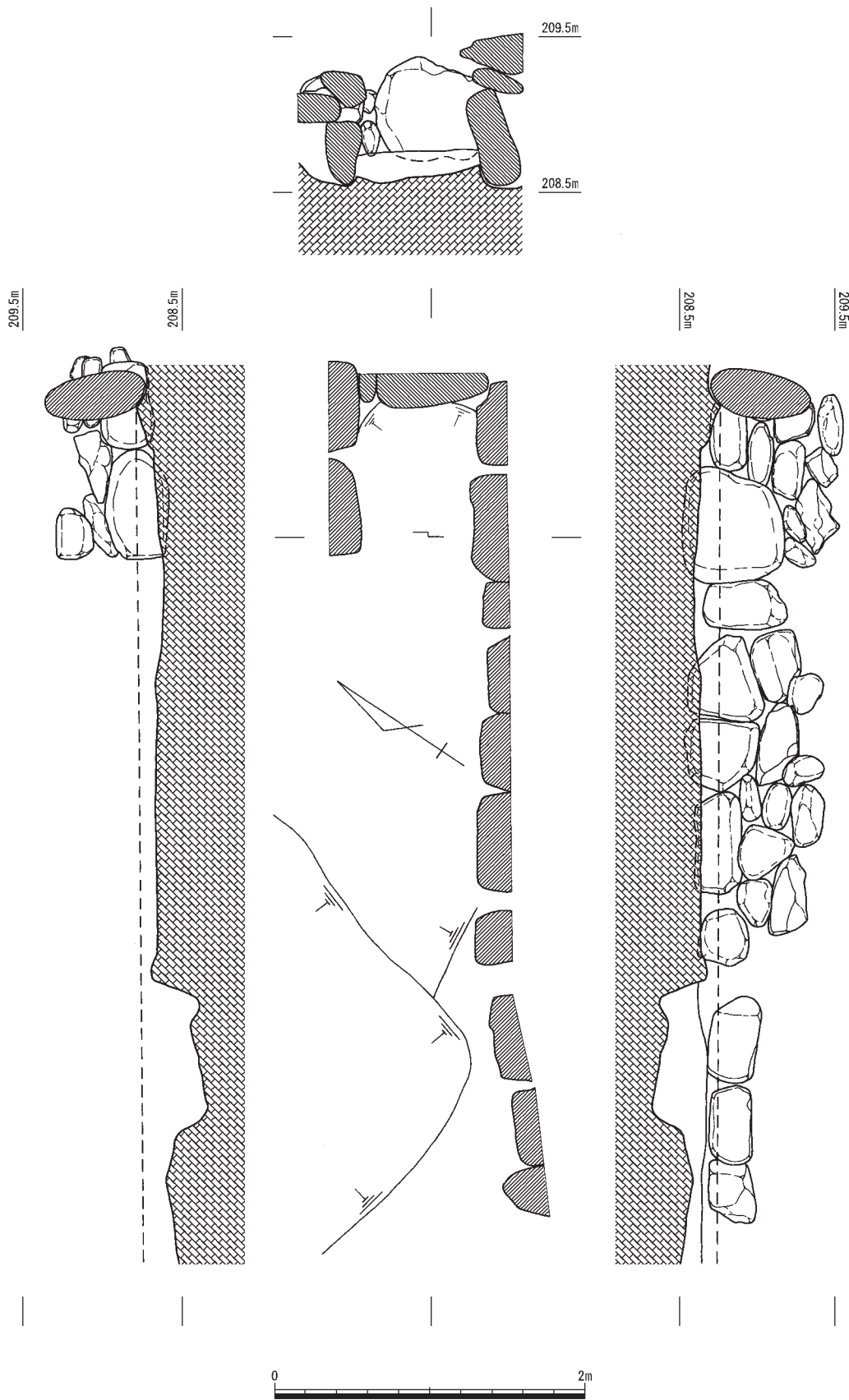
出土遺物（第8図、図版16）

古墳はすでに盗掘されたらしく、主体部から原位置を保った状態での出土遺物は認められなかった。遺物は石室埋土中や周溝からの出土に限られた。

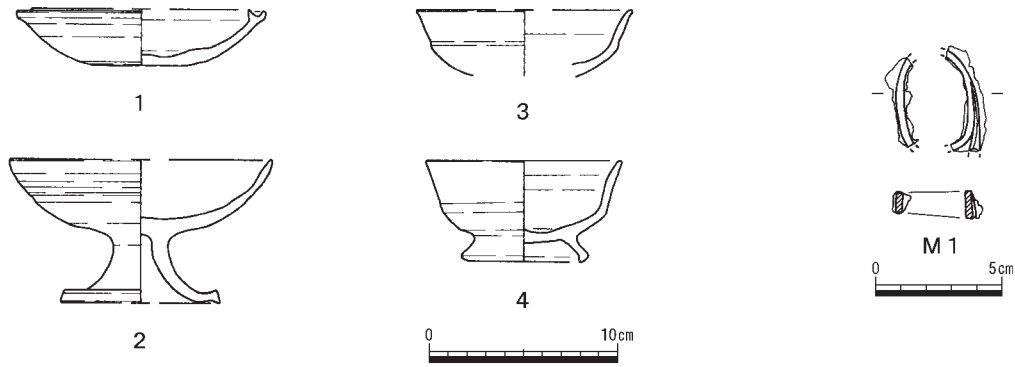
1は須恵器の杯身である。周溝から出土している。口径は11.5cmで口縁受部は内傾しており小さい。また、底部のみヘラケズリ調整である。時期は6世紀末～7世紀前葉に比定できよう。2・3は須恵器の高杯である。2は焼成による変形が著しかった。脚部は高さ4cm弱と低く、透かし穴は認められない。杯部は脚部からなだらかに整形されており、稜ははっきりとしていなかった。出土位置は石室開口部の前である。3は石室埋土中から出土している高杯の杯部である。中に段が認められ、2よりの古式の感がある。2・3ともおおむね6世紀末～7世紀前葉に比定できる。4は石室の開口部から3つ目の石材の脇から出土した高台付杯である。高台は1.5cmの高さを測る。全体的には外側に踏ん張る形状で、接地部は内側へと引き出している。7世紀前半だろう。M1ははばきと考えられる。2.5×1.5cm程の大きさを刀子を使用して



第6図 墳丘断面図 (1/60)



第7図 石室断・立面図 (1/40)



第8図 古墳出土遺物 (1/4, 1/3)

いた可能性がある。石室埋土中からの出土であり、刀子の副葬を示唆する。

(上椀)

第3節 古墳以外の遺構と遺物

1 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第9図)

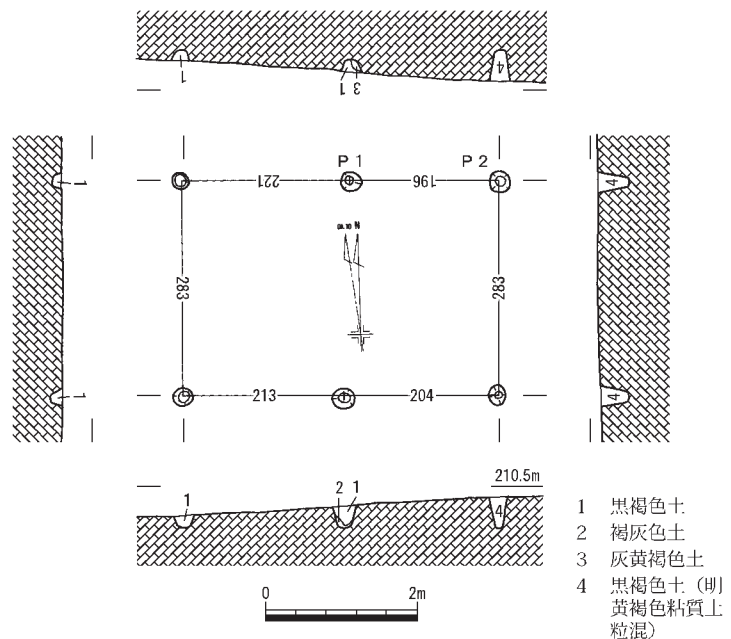
久田神社古墳の南東10mに位置している。2×1間の建物であり、面積は11.8㎡を測る。棟方向はN-80°-Wである。柱穴はいずれも円形であり、大きさは直径20~30cmである。西側に下がるような状態で地山が削平されているため、深さは判然としない。一番残りがよい東側の2基はいずれも40cmを測る。柱間は桁行が196~221cm、梁行が283cmである。出土遺物は認められないが、埋土の状況から中世に比定できよう。

(上椀)

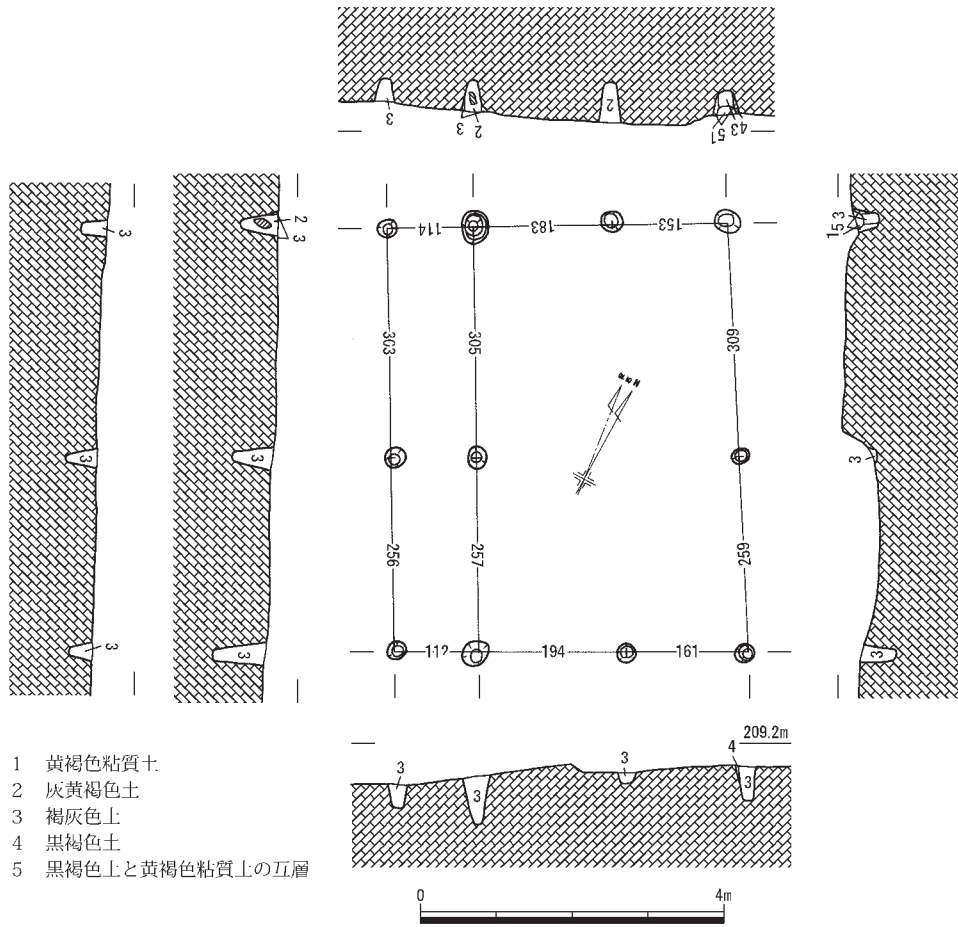
掘立柱建物2 (第9図)

久田神社古墳の南25mに位置している。2×2間の建物で、西側に庇が付く。面積は25.8㎡を測る。棟方向はN-23.5°-Wである。柱穴はいずれも円形であり、大きさは直径20~30cmである。深さは削平などにより判然としないが、最も深い柱穴で60cmを測る。北隅の柱穴では柱痕が認められており、直径15cmの柱を使用していたと考えられる。柱間は桁行が257~309cm、梁行が153~194cmであり、底部分が112~114cmでを測る。出土遺物は図化し得ない土師器の小破片のみであるためはっきりとはしないが、埋土の状況からおおむね中世と判断している。

(上椀)



第9図 掘立柱建物1 (1/100)



第10図 掘立柱建物2 (1/100)

2 焼成土壌・土壙

焼成土壌1 (第11図)

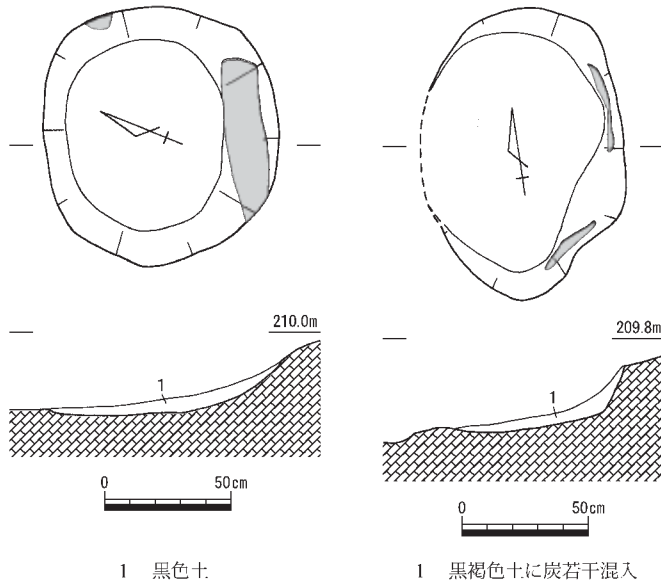
久田神社の北北東27mに位置している。長さ103cm、幅93cmを測る長楕円形の土壌である。深さは、北側がえぐられるような状況にあるためはっきりしないが、残存部分では17cmを測る。南側の壁を中心として酸化色に変化しており熱を受けた状況が認められたが、被熱の度合いは非常に弱いものだった。埋土は黒色土で、微細な木炭粒を含んでいた。時期は不明である。 (上柙)

焼成土壌2 (第12図)

久田神社古墳の周溝を切るような状態で検出している。長さ115cmで、幅は西側が削平されているためはっきりとしないが、当初は80cm以上あったと推測できる。深さも西側の削平により判然としないが、残存部分では19cmを測るため当初はそれ以上と考えていだろう。東側の壁に弱い被熱痕が認められ、また埋土に木炭が若干混入していた。時期は不明である。 (上柙)

土壙1 (第13図、図版15)

久田神社古墳の北北東19mに位置している。南北162cmで、幅は西側が3段になっており、上段が170cm、中段が150cm、下段が132cmをそれぞれ測る。確認できた深さは190cmである。平面形は下段で判断すると長楕円形であり、それより上は西側へと拡張しながら段を形成しているような状態であった。杭を



第11図 焼成土壌 1 (1/30) 第12図 焼成土壌 2 (1/30)

設置する穴は検出できなかったものの、狭く深いという構造から落とし穴の可能性を考えたい。

なお、埋土中からは弥生土器の底部5が1点出土している。内面は縦方向のヘラケズリである。遺物から弥生時代のものと考えている。(上柁)

土壌 2～7 (第14図)

土壌 2 は久田神社古墳の北北東13mに位置している。長さ100cm、幅75cmの不整楕円形であり、深さは50cmが残る。時期は不明である。

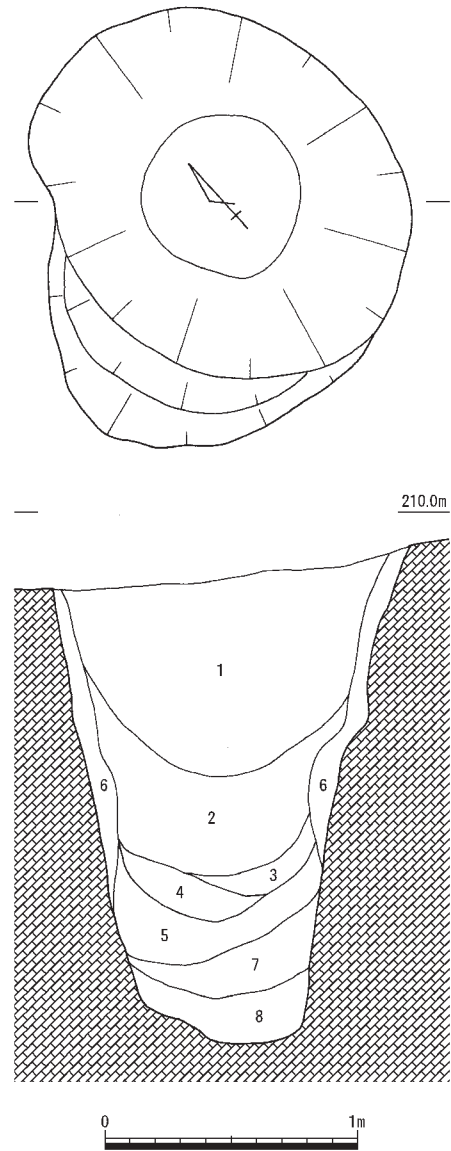
土壌 3 は久田神社古墳の北東20mに位置している。長さ70cm、幅10～70cmの不整形土壌である。深さは8cmを残す。底で土師器の小皿が2点出土しているが、いずれも実測が可能な状態に復元できなかったため図示していない。時期は中世である。

土壌 4 は久田神社古墳の周溝を切る状態で検出している。長さ82cm、幅78cmを測る不整形土壌で、深さは33cmを測る。時期は不明である。

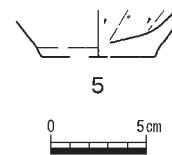
土壌 5 は久田神社古墳の南12mに位置している。長さ122cm、幅96cm、深さ17cmを測る不整楕円形土壌である。時期は不明である。

土壌 6 は土壌 5 の南 3 m に位置している。長さ157cm、幅83～110cmの不整形土壌で、深さは12cmが残っていた。

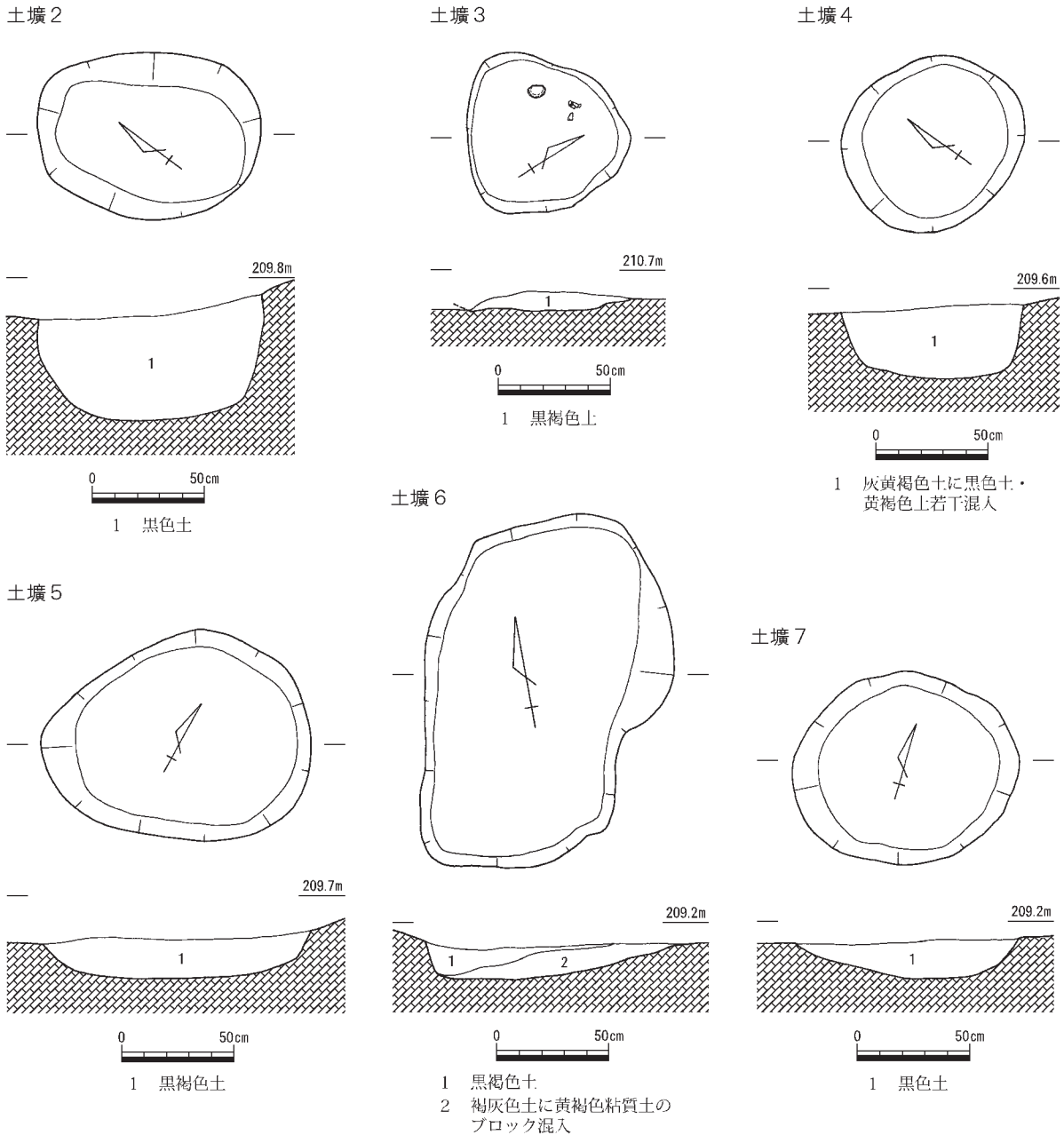
土壌 7 は土壌 6 の南 5 m に位置している。長さ101cm、幅86cmの楕円形土壌で、深さは16cmが残っていた。(上柁)



- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 黑色土 | 5 黒褐色土 |
| 2 褐灰色土 | 6 暗褐色細砂に黑色土・黄褐色粘質土若干混入 |
| 3 黒褐色土に黄褐色粘質土粒点々とする | 7 褐灰色土 |
| 4 黄褐色土と黒褐色土の互層 | 8 灰黄褐色粗砂 |



第13図 土壌 1 ・出土遺物 (1/30, 1/4)



第14図 土壌2～7 (1/30)

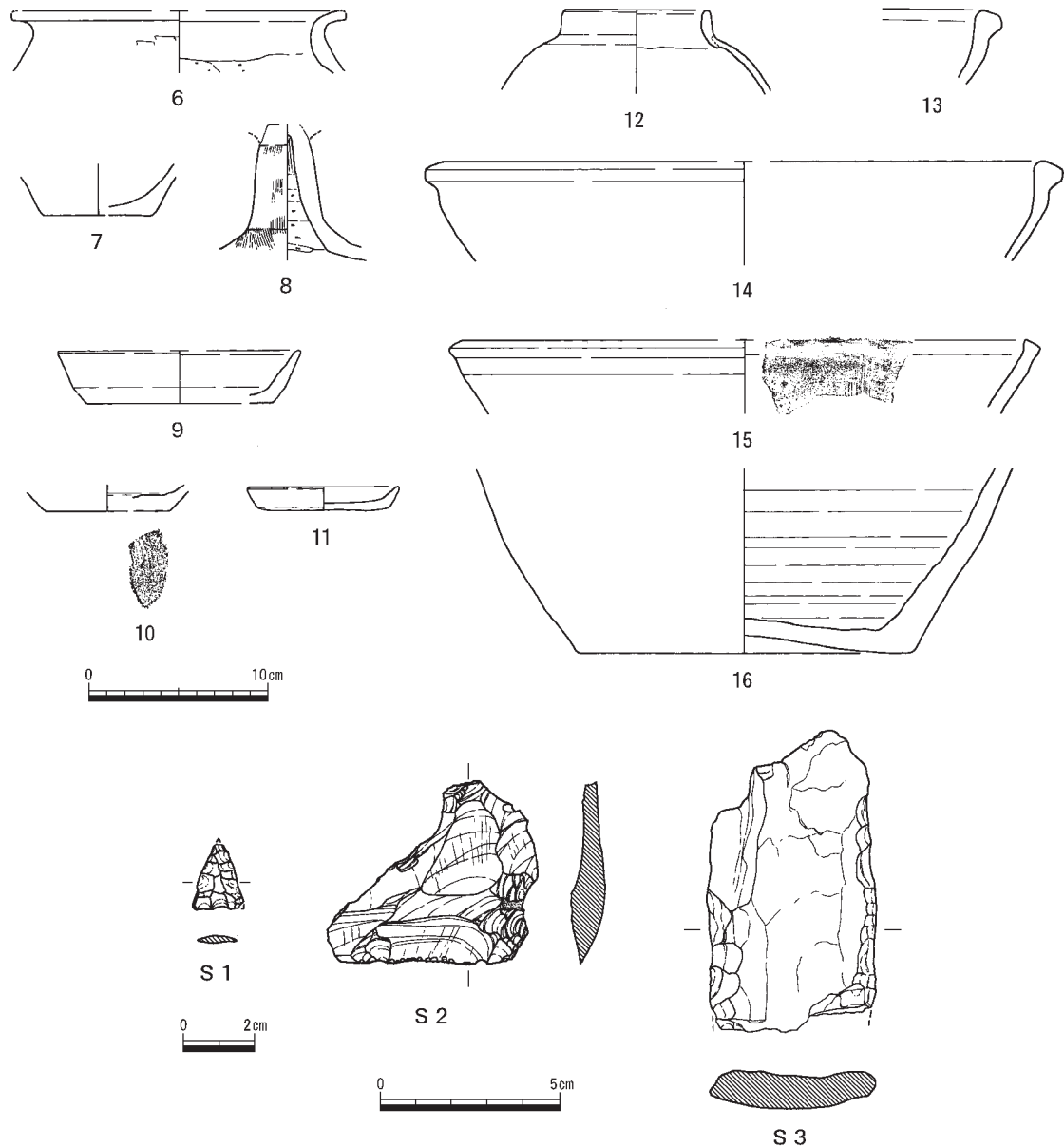
3 遺構に伴わない遺物

7は弥生土器の底部であり、内面はヘラケズリが行われている。6・8は古墳時代の土師器である。6は甕の口縁部である。体部から口縁部を「く」の字状に引き出しており、口唇部は丸くおさめている。体部内面は横位のヘラケズリである。8は高杯の脚部である。内面は横位のヘラケズリである。全体をハケメ調整した後に脚柱部のみヘラ状工具でナデしており、その痕跡が薄い稜線となって残っていた。なお、脚裾部に対してはナデ調整は行っておらず、ハケメが明瞭に認められた。9は須恵器の杯身であり、古代のものと考えられる。10は土師器杯の底部である。11は土師器小皿であり、底部はヘラオコシの痕跡が認められた。12～14は瓦質土器である。12は小形の壺で、体部を整形した後に内側から貼り付けることで頸部以上を作りあげていた。13、14は鍋の口縁である。いずれも口縁部を肥

厚させ、端部は丸くおさめている。15・16は備前焼である。15は播鉢で、内面に卸し目が10条認められた。口縁端部は平坦に整形して、外方に傾斜させている。Ⅱ期と考えられる。16は壺か甕の底部になる。S 1はサヌカイト製の平基式石鏃である。S 2は黒曜石製のスクレイパーである。S 3は緑色片岩製の石鏃である。 (上村)

第4節 まとめ

久田神社古墳は周溝から直径800cmと推定される円墳で、河原石を横置きにした横穴式石室である。石室は地山に掘り方を設けて築造していた。内法で長さ520cm、幅70cmを測り、開口部に向かって徐々に広がっていく構造である。原位置を保つ副葬品はなかったが、石室埋土中や周溝、周辺出土の遺物から6世紀末～7世紀前半の築造と考えられた。出土須恵器は新古に分けられるが、追葬の積極的な



第15図 柱穴・包含層出土遺物 (1/4, 1/2)

証拠としては判断できない。なお、石室は南西方向に開口していた。その方向の平野部には夏栗遺跡でほぼ同時期の集落が営まれていた。

久田地区では夏栗遺跡に南接する久田原遺跡において5世紀代以降7世紀末～8世紀初頭まで12基の古墳築造が継続された。そのうち久田神社古墳とほぼ同時期の古墳は4基（2号、4号、5号、8号墳）を数える。墳形が推測できる古墳は2基のみで、いずれも円墳である。主体部は4基とも無袖の横穴式石室である。石室は掘り方を設け、その内部に河原石を横置きにして構築していた。石室幅は狭く、8号墳は80cm、2号墳は奥側幅が90cmである。また、2号墳は開口部の幅が140cmで、開口部に向かい開いていく石室構造である。なお、2号墳は、石室の幅は狭いものの、副葬品から追葬の可能性が指摘されている。開口部は南西から南を向いていた。

以上、久田原古墳群において6世紀末～7世紀前半に築造された古墳の特徴をみてきた。墳形や石室構造に久田神社古墳との共通性を見出せた。しかし、立地では両者に相違が認められ、久田神社古墳は丘陵の突端に築造するのに対して、久田原古墳群は平野部に形成していた。久田原古墳群を平野部に形成した要因としては、製鉄用の燃原料確保のために丘陵部を墓域としなかったことがあげられている⁽¹⁾。しかし、久田神社古墳だけを同時期の集落が見下ろせる丘陵上に築造した理由は判然としない。また、開口部の方位も異なっていた。久田神社古墳と久田原古墳群の共通性と相違性については古墳のみならず集落との関係も考慮に入れる必要がある。（上村）

註

- (1) 弘田和司「古墳時代後期以降の墓制について」『久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 岡山県教育委員会 2004年

表22 土器観察表

掲載番号	掲載遺構・土層名	旧遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	特徴
					口径	底径	器高		
1	古墳周溝	古墳周溝	須恵器	杯身	(11.5)	(6.6)	(3.0)	灰色(7.5Y5/1)	
2	古墳石室外	古墳石室外	須恵器	高杯	(13.9)	(8.3)	(7.6)	灰色(5Y5/1)	
3	古墳石室埋土中	古墳石室埋土中	須恵器	高杯	(11.4)	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	
4	古墳石室内	古墳石室内	須恵器	杯	10.15	5.9	5.45	灰色(5Y6/1)	
5	土層1	No.4土層	弥生土器	甕	—	(6.0)	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	
6	包含層	遺構検出中	弥生土器	甕	(18.6)	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/2)	
7	柱穴	P2	弥生土器	甕	—	(6.0)	—	灰黄褐色(10YR5/2)	
8	包含層	遺構検出中	土師器	高杯	—	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/3)	
9	包含層	遺構検出中	須恵器	杯	(13.4)	(10.2)	2.95	黄灰色(2.5Y5/1)	
10	包含層	遺構検出中	土師器	皿	—	(6.8)	—	橙色(5YR6/6)	
11	包含層	遺構検出中	土師器	皿	(8.4)	(7.4)	1.3	浅黄橙色(7.5YR8/4)	
12	包含層	遺構検出中	瓦質	壺	(8.0)	—	—	灰色(5Y4/1)	
13	包含層	遺構検出中	瓦質	鍋	—	—	—	黒褐色(10YR3/1)	
14	包含層	遺構検出中	瓦質	鍋	(33.4)	—	—	灰色(5Y4/1)	
15	包含層	遺構検出中	備前焼	播鉢	(31.4)	—	—	灰色(N4/?)	卸し目10条
16	包含層	遺構検出中	備前焼	甕	—	18.4	—	暗赤褐色(5YR3/4)	

表23 石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	石室埋土中	石鏃	18.5	14.0	2.5	0.50	サヌカイト	弥生時代	
S2	T1	スクレイパー	53.5	51.0	9.5	23.32	黒曜石	縄文時代	
S3	包含層	石鏃	(84.0)	47.5	11.0	58.79	緑色片岩	縄文時代	

表24 金属器一覧表

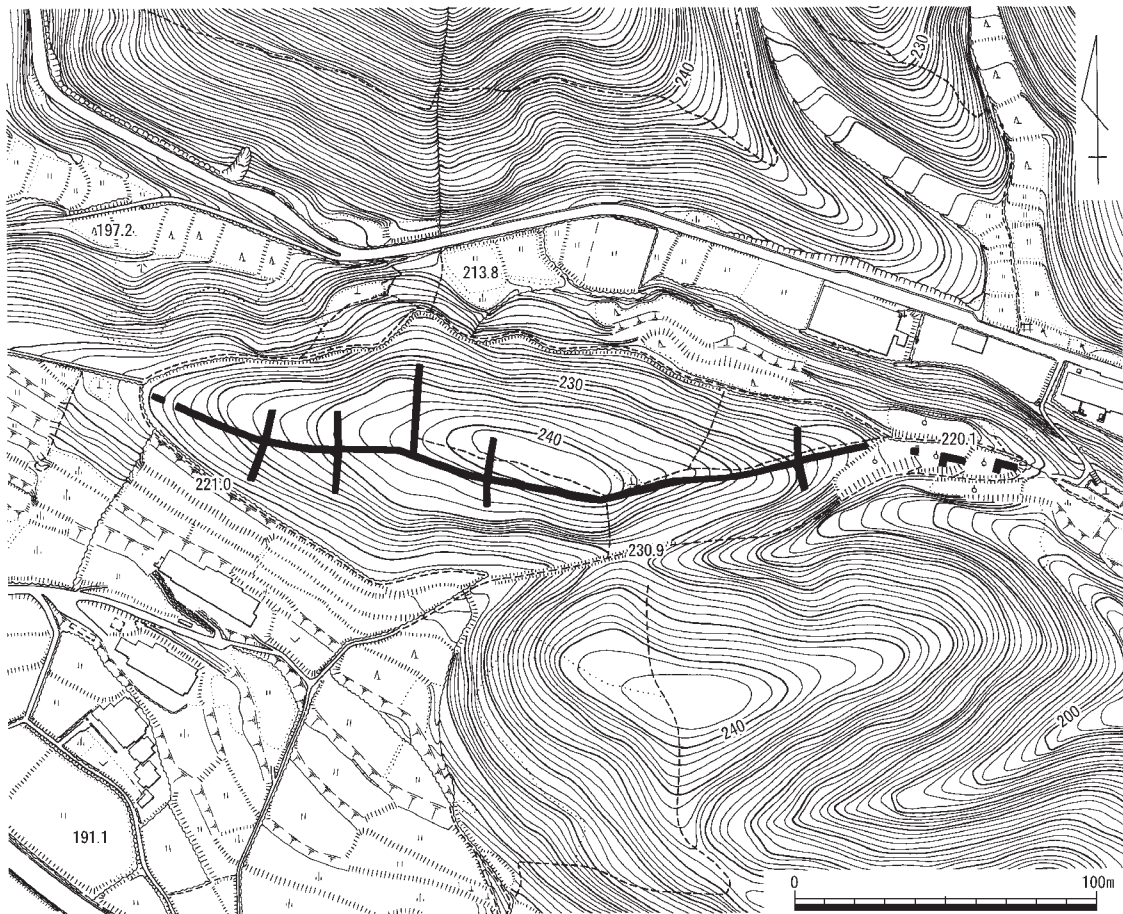
掲載番号	掲載遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	石室埋土中	はばき?	(40)	—	11	8.46	鉄	古墳時代	

第10章 城峪城跡北散布地

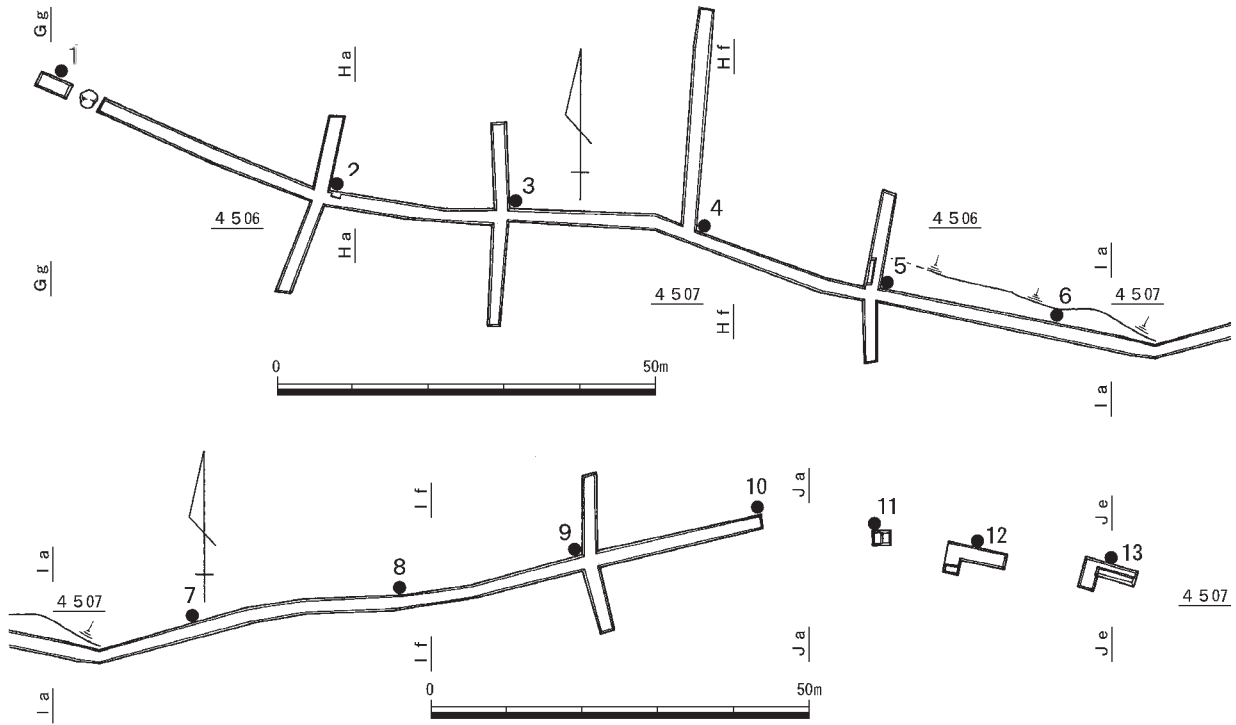
城峪城後北散布地は吉井川の東岸で、平成8～10年に発掘調査された城峪城跡と比丘尼ヶ城跡の間に位置する。両城跡とは別の独立丘陵で、東西に長く頂部に平坦な部分がある。ここに城峪城跡と一体になった公園の建設が計画され、両城跡の調査成果からここにも遺構の存在が予測できたため、尾根頂部に幅2m、総延長340mのトレンチを設定し、第一次調査を実施した。また北側の比丘尼ヶ城跡との間で橋脚が設けられる部分については、急斜面のためトレンチを設けられなかったので立会調査で対応したが、遺構は存在しなかった。

第一次調査のため伐開すると、頂部平坦面中央から西側にかけて、地形図で平坦に見える部分は開墾されて耕作がされていた痕跡があった。そのため見た目と地形図がやや異なることがわかり、トレンチは開墾を避けて見た目の最高所に設定したため、地形図ではトレンチが南側に寄っている。

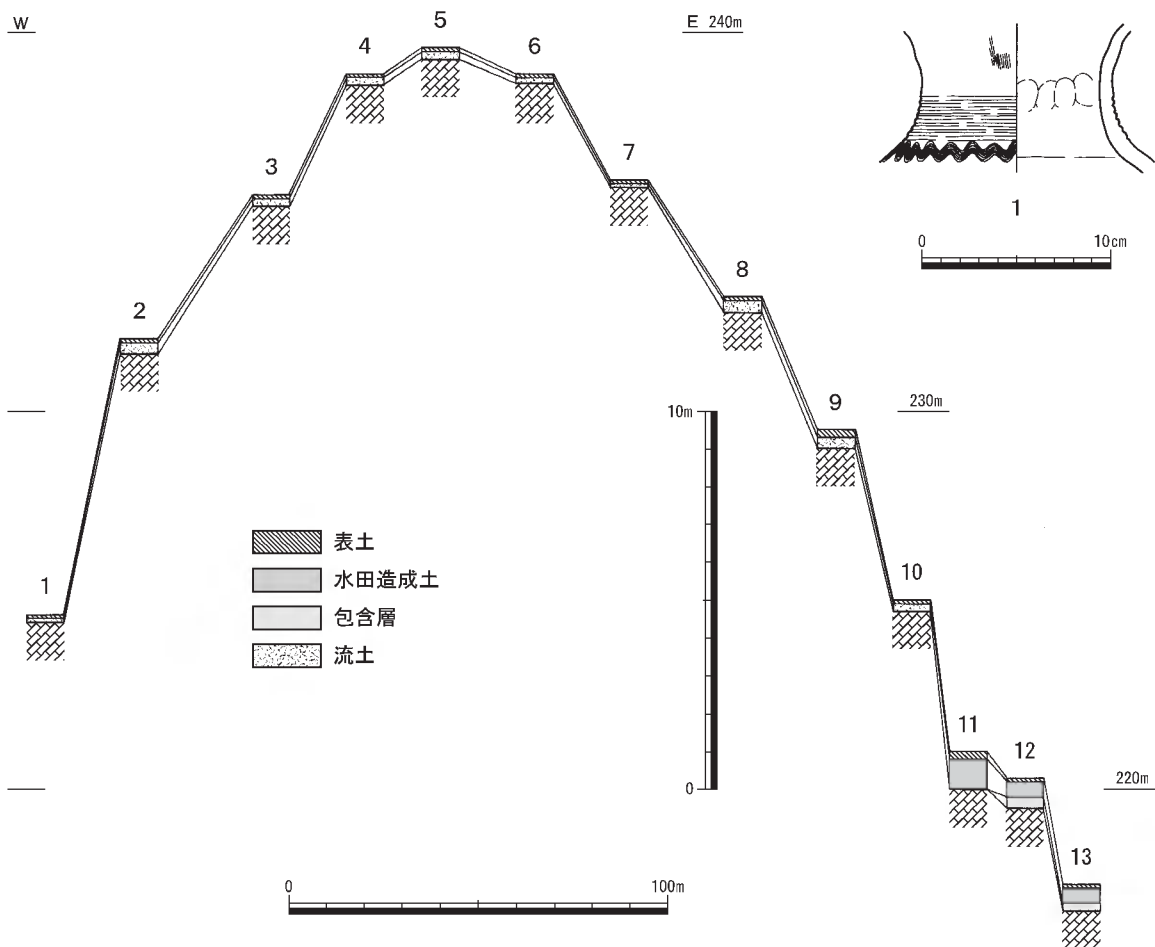
第一次調査の結果、数片の土器片などが出土はしたが、ほとんどの地点で表土直下は無遺物の流土層であり、その下は岩盤であった。水田として開墾されていた12・13の地点では、水田の造成土下に包含層を確認し、13から1の弥生中期壺片が出土した。しかしいずれの地点でも遺構は検出できなかったことから、この尾根には城跡はなく、その他の遺構も存在しないことが分かった。 (氏平)



第1図 調査位置図 (1/2,500)



第2図 トレンチ配置図 (1/1,000)



第3図 土層柱状図と出土遺物 (縦1/200・横1/2,000, 1/4)

杉正宗遺跡

1 A・B区全景
(南西から)



2 A区掘立柱建物1
(南東から)



3 出土遺物



1 全景
(南西から)



2 T3
(北東から)



3 1区北側全景
(東から)

1 2区全景
(南西から)



2 3区東壁
(西から)



3 3区南側近世遺構
(南西から)





1 3区掘立柱建物
4・柱穴列2
(北東から)

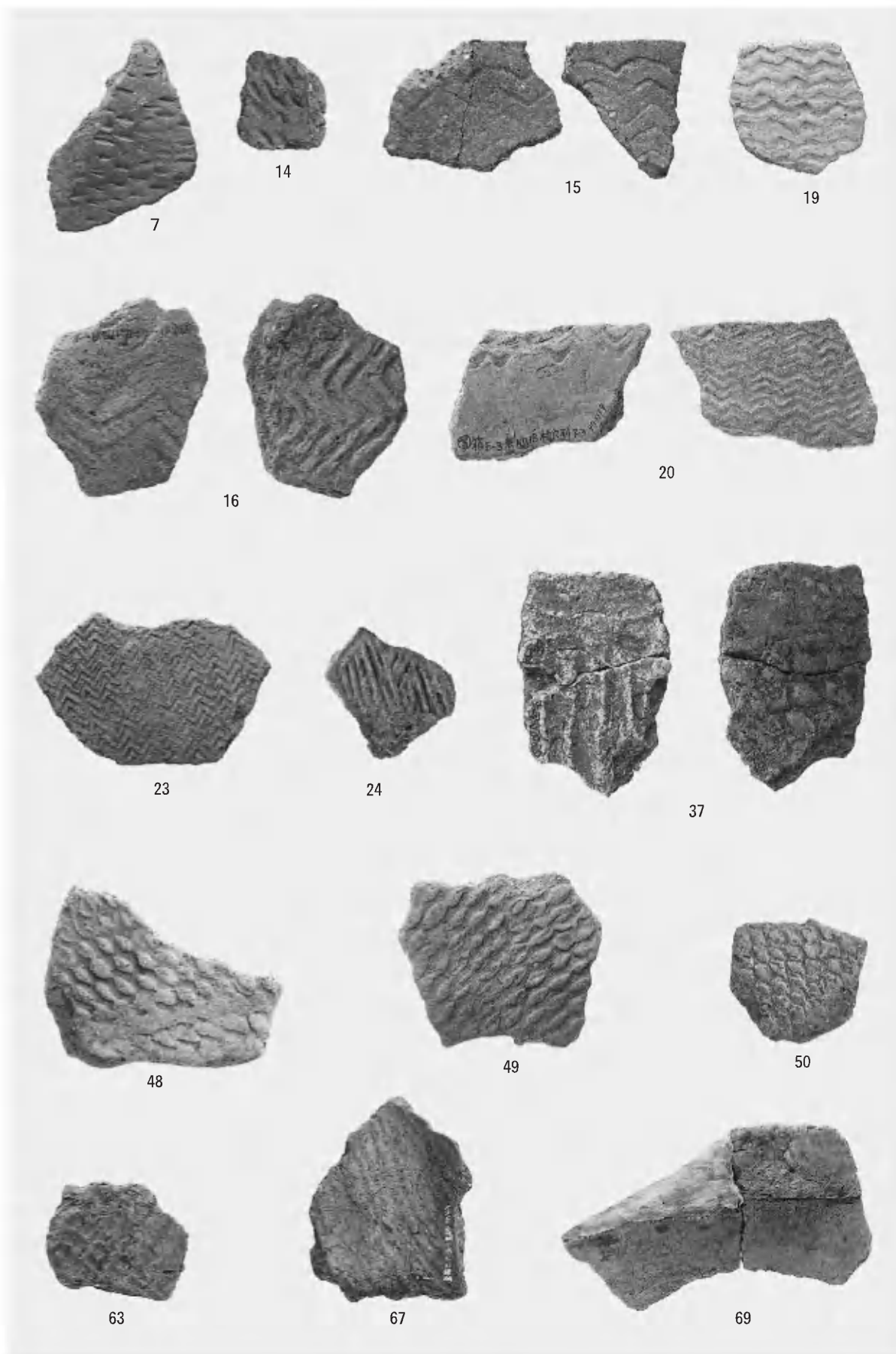


2 1区土壙墓3
(西から)

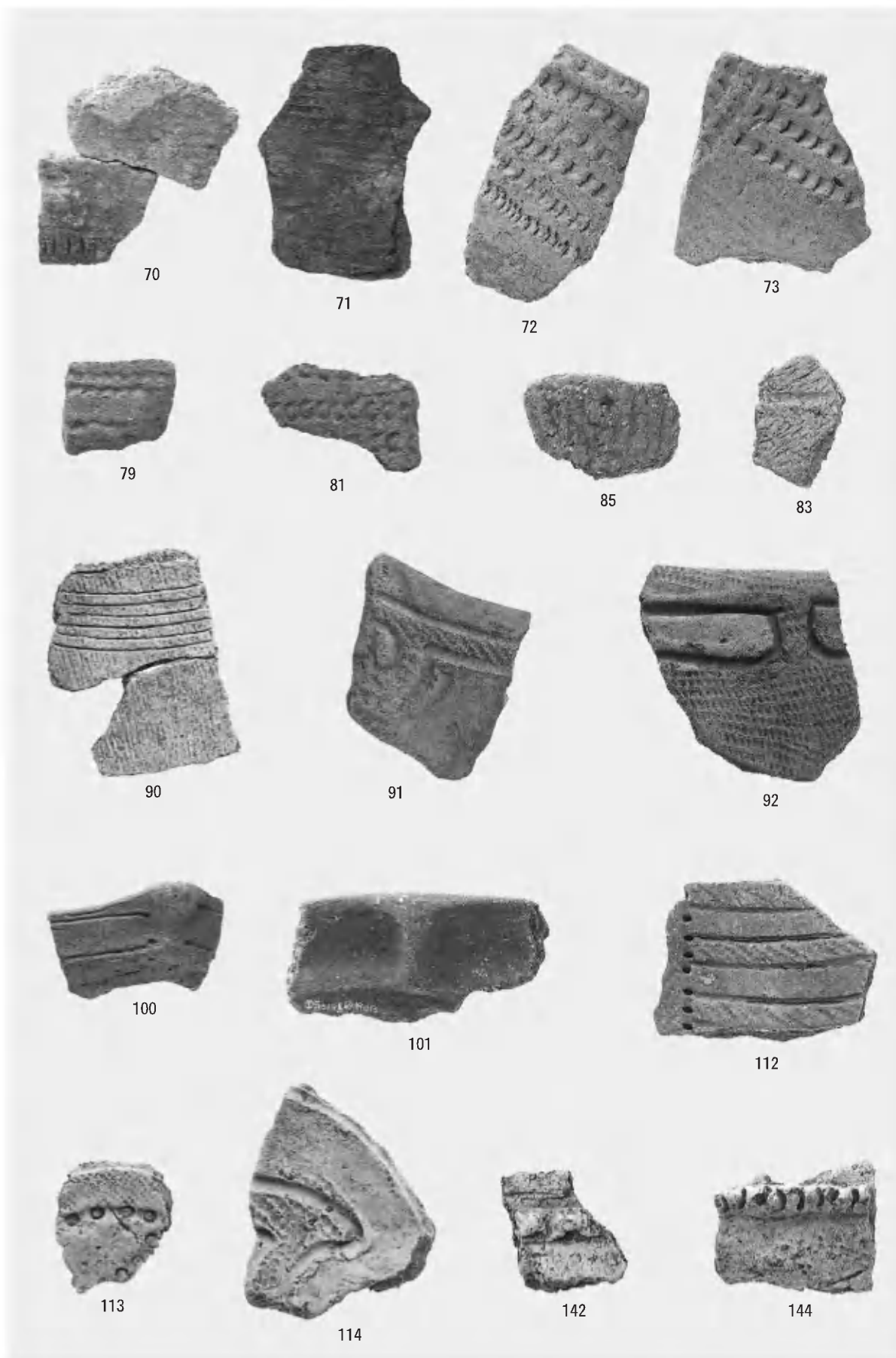


3 3区土壙8
(西から)

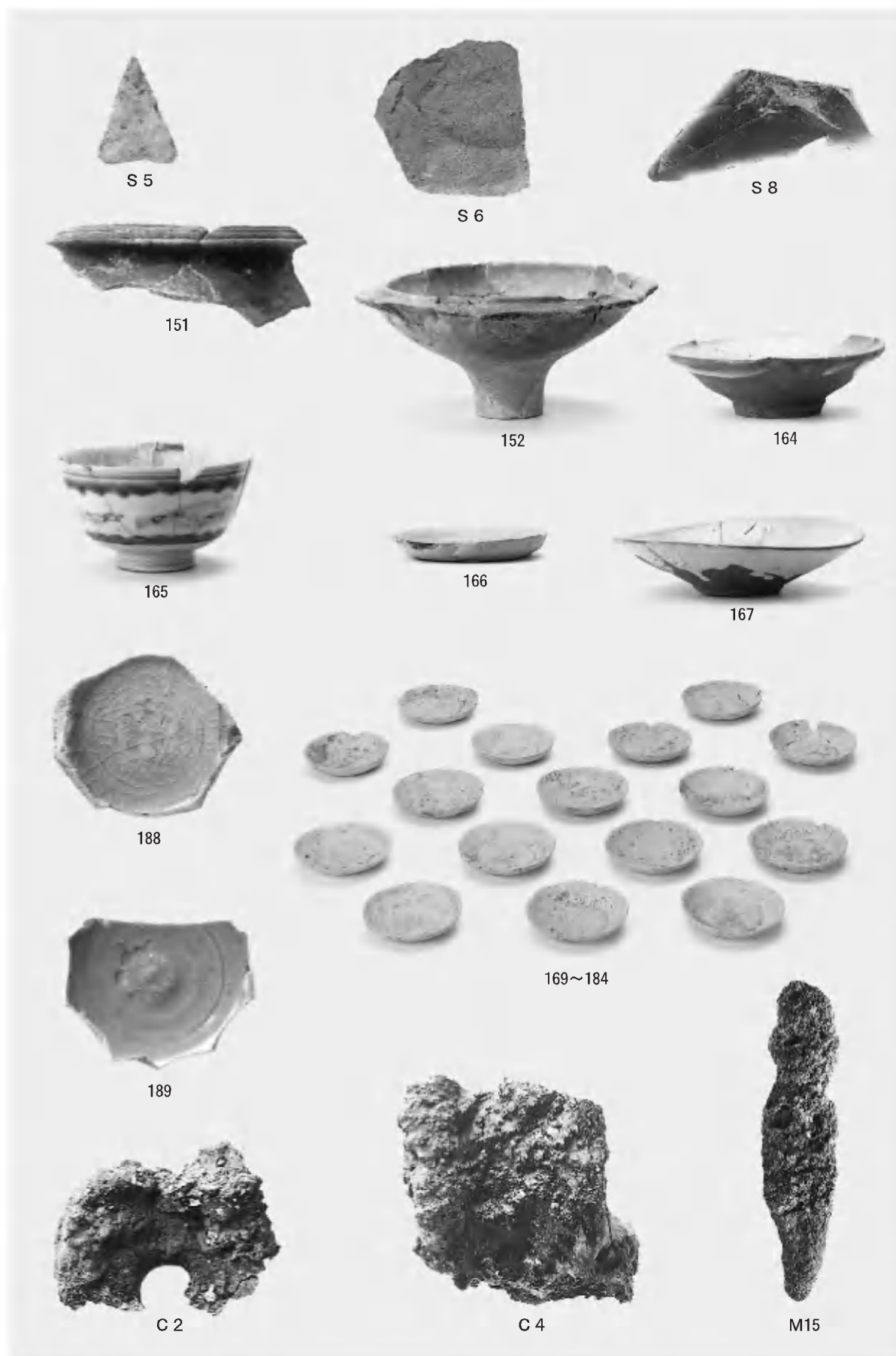
箱 E 遺跡



出土遺物①繩文土器



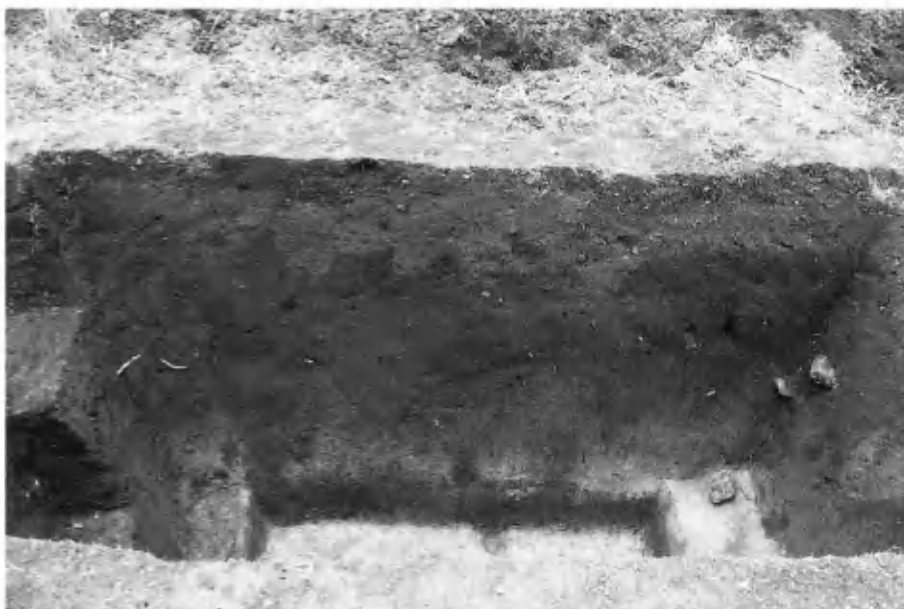
箱 E 遺 跡



出土遺物③石器・弥生土器・中近世の遺物



1 T12
(南西から)



2 T21
(東から)



3 C区土坑 1
(北から)

かなぼれ B 遺跡

1 A区全景
(西から)



2 A区掘立柱建物 1
(北から)



3 A区土壇 2
(南から)





1 B区掘立柱建物2
(西から)



2 C区近世の遺構
(西から)



3 出土遺物

丸ヶ吷遺跡

1 遠景
(南から)



2 焼成土壇1
(南から)



3 出土遺物



1 遠景
(南から)



2 T 8
(北から)



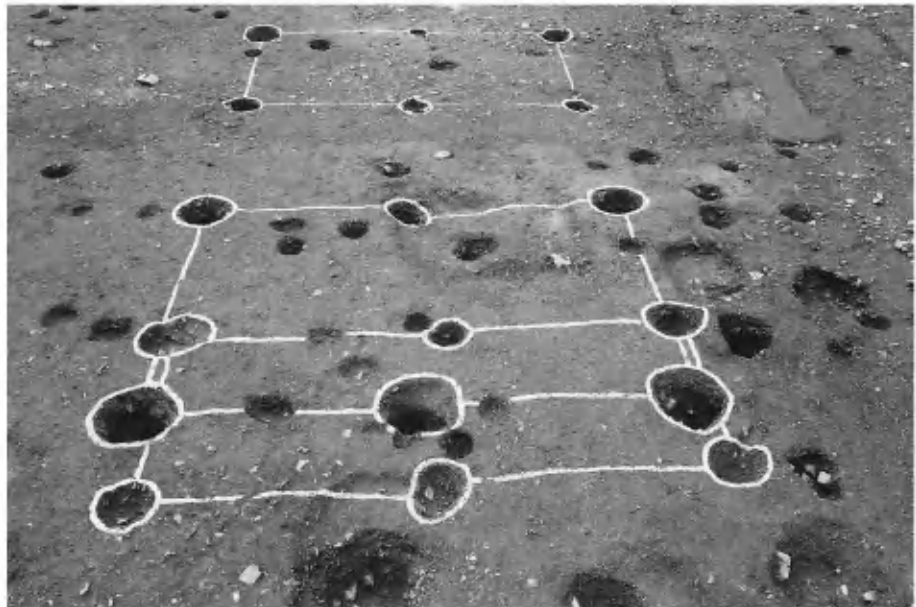
3 T 12
(北から)

下黒木遺跡

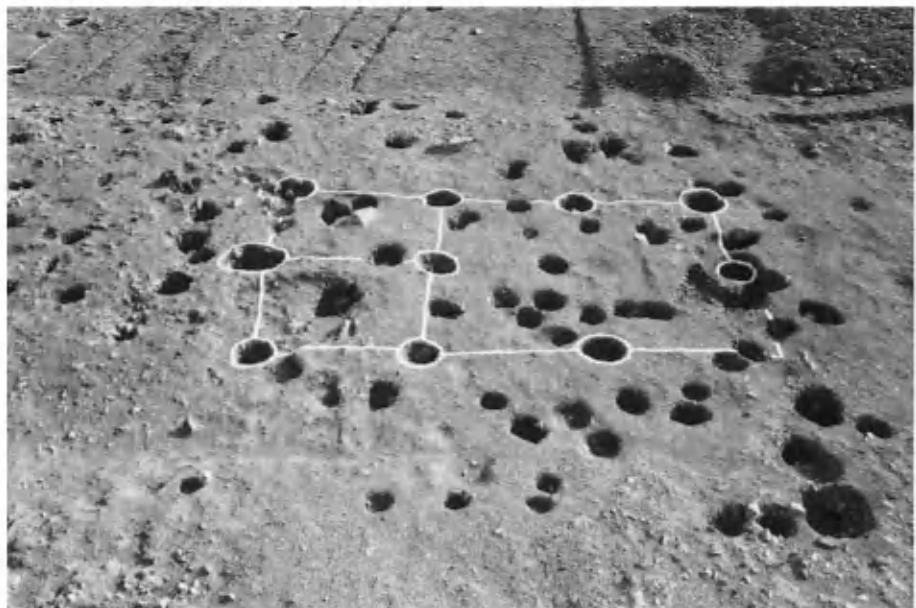
1 全景
(北東から)



2 掘立柱建物1・4
(北から)



3 掘立柱建物2
(北から)





1 下黒木遺跡
土壙3(南から)



2 下黒木遺跡 出土遺物



3 久田神社古墳
遠景(西から)

久田神社古墳

1 石室東壁
(西から)



2 土壇1
(南から)



3 全景
(南から)





1 久田神社古墳 出土遺物



2 城峪城跡北散布地
遠景(北から)



3 城峪城跡北散布地
トレンチ近景
(南西から)

報告書抄録

ふりがな	すぎまさむねいせき・ほこいせき・かなぼれBいせき・まるがたわいせき・かつのだんいせき・しもくろぎいせき・くたじんじゃこふん・しろさこじょうあときたさんぶち
書名	杉正宗遺跡・箱E遺跡・かなぼれB遺跡・丸ヶ丸遺跡・勝の段遺跡・下黒木遺跡・久田神社古墳・城峪城跡北散布地
副書名	苫田ダム建設に伴う発掘調査
巻次	4
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	193
編著者名	氏平昭則・伊藤 晃・中野雅美・平井泰男・上村 武
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136 岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211
発行機関	国土交通省苫田ダム工事事務所・岡山県教育委員会
所在地	〒708-0433 苫田郡鏡野町久田下原1592-4 TEL 0868-52-2151 〒700-8570 岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すぎまさむねいせき 杉正宗遺跡	すぎまさむね 杉字正宗240-1他	33606	152	35°09'56"	133°53'49"	平成13年9月27日～10月4日、 平成13年10月18日～11月28日	805	苫田ダム建設に伴う埋没予定地及び関連工事
ほこいせき 箱E遺跡	ほこ 箱487他		145 ・ 146	35°09'47"	133°53'40"	平成9年3月11日～3月13日、 平成11年9月20日～11月26日、 平成13年7月23日～8月10日、 平成14年5月9日～7月12日	1,490	
かなぼれBいせき かなぼれB遺跡	ほこ 箱185-1他		149	35°09'44"	133°53'39"	平成14年4月1日～6月6日、 平成14年10月16日～12月3日	1,515	
まるがたわいせき 丸ヶ丸遺跡	こうち 河内960他		156	35°08'58"	133°54'15"	平成14年4月1日～5月20日	490	
かつのだんいせき 勝の段遺跡	くたかみのほら 久川上原201他		159	35°08'41"	133°53'37"	平成14年11月21日～12月17日、 平成15年1月20日～3月13日	800	
しもくろぎいせき 下黒木遺跡	くろぎ 黒木68-1他		160	35°08'30"	133°53'21"	平成13年6月8日～7月3日、 平成14年8月27日～10月17日	1,800	
くたじんじゃこふん 久田神社古墳	くたしものほら 久田下原33-2他		163	35°08'19"	133°53'15"	平成14年1月17日～1月25日、 平成14年4月30日～6月27日	1,210	
しろさこじょうあときたさんぶち 城峪城跡北散布地	くたしものほら 久田下原730他			35°07'43"	133°53'24"	平成14年7月8日～8月29日	680	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉正宗遺跡	集落	中世	掘立柱建物	弥生土器・土師器・瓦質土器・ 陶磁器・土鏝・古銭	
箱E遺跡	集落・製鉄遺跡	縄文・弥生・ 近世	掘立柱建物・土塙	縄文土器・弥生土器・陶磁器・ 鉄滓・羽川・如壁・尖頭器・ 石鏝・金属器	縄文草創期の尖頭器・ 縄文早期の押型文土器
かなぼれB遺跡	集落	縄文～古墳・ 近世	落とし穴・掘立柱建物	縄文土器・弥生土器・土師器・ 陶磁器・尖頭器・石鏝・鉄器・ 古銭	
丸ヶ丸遺跡	集落	弥生・古代・ 中世	焼成土塙・土塙	弥生土器・土師器・勝岡田焼・ 石包丁・古銭	
勝の段遺跡	集落	弥生・中世	竪穴住居・土塙	弥生土器・陶磁器・石鏝	
下黒木遺跡	集落	中世	掘立柱建物・土塙	土師器・瓦質土器・陶磁器・ 金属器	
久田神社古墳	弥生・古墳・ 集落	弥生・古墳・ 中世	横穴式石室・掘立柱建物	弥生土器・土師器・須恵器・ 瓦質土器・陶磁器・石器・金 属器	
城峪城跡北散布地				弥生土器	遺構なし

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告193

杉 正 宗 遺 跡
箱 E 遺 跡
かなぼれ B 遺 跡
丸ヶ嶋 遺 跡
勝の段 遺 跡
下黒木 遺 跡
久田神社古墳
城峪城跡北散布地

苦田ダム建設に伴う発掘調査
4

平成17年 3月18日 印刷
平成17年 3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発 行 国土交通省苦田ダム工事事務所
苦田郡鏡野町久田下原1592-4
岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印 刷 ワッシュ印刷株式会社
岡山市当新田381-3



本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています。